

長野県安曇野市

穂高古墳群

2021年度 E 6号墳・F 9号墳発掘調査報告書



2022.2

國學院大學考古学研究室

長野県安曇野市

穂高古墳群

2021年度 E 6 号墳・F 9 号墳発掘調査報告書

2022.2

國學院大學考古学研究室

(表紙写真)：E 6号墳周辺遠景

(裏表紙写真)：8月10日調査ミーティング風景(F 9号墳 第Iトレンチ)

緒 言

故古田恵二師が策定した研究計画に基づき、平成21(2009)年から実施している長野県安曇野市の穂高古墳群における実習調査は、この夏で13年目を迎えた。昨年度は、COVID-19の感染拡大によって休講を余儀なくされたため、初年度から数えると第12次調査ということになる。この間の成果を振り返ると、F9号墳が予想以上に良好な状態で遺存していたお陰で、副葬品のセット関係や、石室と墳丘の構築過程を明らかにし得たことが特筆されよう。加えて、安曇野市教育委員会が公開したE13・G1号墳の発掘調査成果報告、あるいは目下整理作業が進められているB27号墳の調査状況とともに、穂高古墳群における中小規模古墳、すなわち直径10～15m程度の一群について、具体的モデルを提示できるようになってきた点も大きい。

しかしながら、古墳群自体が烏川扇状地の緩斜面に位置しているため、墳丘の長径と短径が等しいとは限らず、かつ周溝の存在も確認されていないことから、特に羨道部が破壊されているF9号墳の正確な規模が、未だに把握できていない憾みがあった。また、中小規模古墳の実態が明らかになってきた一方、豊富な副葬品を伴う大規模古墳の具体像は、なお不明な点が多々残されていると言わざるを得ない。そこで今回は、F9号墳の墳丘規模を再確認すると共に、現況で直径約20mと推定されているE6号墳の墳丘規模を明らかにすることで、穂高古墳群の内部における中小規模古墳と大規模古墳との質的な差異について検討する方針を立てた。

加えて、我々が長期に亘る調査を実施してきた間に、発掘調査技術も長足の進歩を遂げている。もとより考古学的な調査の記録は、主に発掘調査報告書という形で世に問われるが、3次元情報を2次元に置換して提示せざるを得ないところに一つの限界があった。かつ、「実測図」「写真」という基礎データ自体が、調査者による「解釈」の産物であり、成果品としての水準も一定でない。また、破壊されてしまった遺構の記録は、後世の再検証が困難である点にも大きな課題を残している。今後は、かかる考古学という学問の「科学的脆弱性を補う上でも、より一層客観的な記録の蓄積が求められていくに違いない。従って、本学の考古学専攻生には、手作業の平板測量・遺方実測などによって調査技術の原理原則を身に付けるとともに、トータルステーション等を用いた電子記録や、最新の三次元計測の方法まで並行して学習し、様々な現場に対応できる担当者を目指してもらいたいと考えている。

ところで今年度は、東京都にCOVID-19の緊急事態宣言が発令されるまでの調査となったため、参加者全員がPCR検査を受け、極力外部との接触を断つ形で実習を実施した。一人の感染者も出さずことなく無事に帰京することができたのは、万全の防疫体制を採った結果であると自負しておきたい。このような危機的状況の中、我々を受け入れて下さった地元、安曇野市教育委員会、長野県教育委員会、国土交通省、国営アルプスあづみの公園をはじめ、例年以上のご苦勞をかけた國學院大學教務課、そして物心両面のご支援を賜った関係機関・関係各位に、心から感謝申し上げる次第である。

令和4年2月

國學院大學博物館

深澤 太郎

緒 言

本学における考古学実習授業の一環として実施している長野県安曇野市所在徳高古墳群F 9号墳並びにE6号墳の確認調査に参加する機会を得た。3泊4日という短い期間であったが、久しぶりに本学の考古学実習調査に参加する学生たちの姿を目の当たりにし、思わず涙してしまった。

私はかつて本学考古学研究室助手として、新潟県中魚沼郡中里村壬遺跡や千葉県富津市森山塚古墳、東京都三宅村中郷遺跡や物見処遺跡の調査に従事した。昭和56～58(1981～1983)年度のことである。当時の國學院大學では考古学分野に乙益重隆教授、小林達雄助教授、吉田恵二講師、博物館学分野に加藤有次教授、考古学資料館の学芸員として金子皓彦、青木豊の両氏が在職中であった。考古学実習の一環としての発掘実習調査の担当教員は、小林達雄助教授、吉田恵二講師及び小林教授のカナダ研修中は相山林綱講師(日本文化研究所所員)であり、考古学資料館青木豊学芸員と助手であった私が参加した。

当時の國學院大學は1970年代に全国の大学を席卷した学生運動の余韻が濃厚に残っており、大学の考古学実習の一環としての発掘調査は中断されたままであった。これを復活させたのは昭和53(1978)年に文化庁から本学に戻られた院友の小林達雄先生である。小林先生は考古学を学ぶ大学にとって考古学実習で行う野外調査の重要性を大学関係者や学生に説き、復活に漕ぎ着けたのだった。

しかし、その実施は簡単だった訳ではない。大学の予算は限られたことから、費用をできる限り低減するため、小学校の寄宿舎や校舎、民宿や大学の寮などを宿舎にお願いし、現地までの機材の運搬は夏休み中で使用機会が減っていた大学生協の貨物車を借り上げて助手の私が運転して担当するといった具合であった。参加する学生も現地集合、現地解散で経済的な負担も少なくなかったが、久しぶりに実施される考古学実習の野外調査に期待を込めて参加した学生も多かった。本学の谷口康浩教授や奈良女子大学武藤康弘教授などもそのような学生の1人であったことが思い出される。その後、本学の考古学実習授業としての野外調査は継続的に実施され、参加者の中からは多くの人材が巣立って行った。私もまた、3年の助手生活の後、琉球大学へ赴任し、以来、37年の時を経て定年退職を迎えたが、琉球大学の卒業生の中からも沖縄県を中心とする西日本各地の文化財行政に携わる人材が育った。これを見て、琉球大学は「國學院大學の垂流」と評した人もあるが、むしろ私にとって最高の褒め言葉であると悦んでいる。

琉球大学退職を機に、母校に戻ることとなり、かつての考古学資料館や神道資料室、日本文化研究所などが統合・変更された研究開発推進機構に籍を置くこととなった。かつての助手在任中に近侍した乙益重隆・加藤有次・吉田恵二先生は彼岸に赴かれ、小林達雄・相山林綱・金子皓彦・青木豊先生もすでに大学を退かれた。

しかし、國學院大學の考古学はしっかりと受け継がれている。そのことを徳高古墳群での考古学実習調査へ参加した学生たちの姿を見て思わずにはいられなかった。時は流れ、大学に集う人の姿は変われども、考古学を学ぶ國學院大學の伝統は眼前に生きついていた。涙の理由はそこにある。

令和4年2月

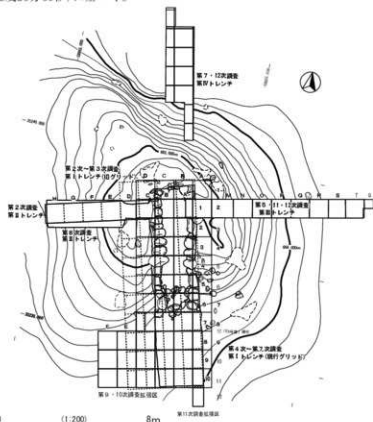
國學院大學博物館
池田 榮 史

例 言

1. 本書は、長野県安曇野市穂高柏原3653番地(塚原地区)に所在する穂高古墳群F9号墳の第12次調査、および同市穂高牧29番地1(牧地区)に所在する穂高古墳群E6号墳の第1次調査報告書である。
2. 本調査は、令和3(2021)年度の國學院大學学部開講科目「考古学実習Ⅰ・Ⅱ」、および同大学院開講科目「考古学実習B」の一環として、同年8月5日から8月14日までの10日間にわたって実施した。
3. 本古墳の調査は、國學院大學の針本正行(学長)が主体者となり、深澤太郎(研究開発推進機構准教授・文学部兼任准教授)が担当した。
4. 調査の実施に際しては、谷口康浩・青木敬(文学部教授)の助言を得て、深澤が運営を統括した。また、大日方一郎(文学部助手)と、大学院ティーチングアシスタントの篠田浩輔・樋口典昭(大学院文学研究科博士前期課程)が指導にあたり、考古学実習生22名(学部生21名・大学院生1名)、特別参加生6名が調査を実施した。
5. 本書の執筆・図面の製図・表および図版の作製は、考古学実習生を中心とする調査参加者が分担した。執筆・製図・作製分担は、目次・挿図目次・表目次・図版目次と文末に示した。なお、過年度報告から概ね変更のない文章・図表等には、当初の担当者名を掲げて責任の所在を明確にした。
6. 遺構・遺物写真の撮影は、主に考古学実習生の写真係が担当した(第1章-4参照)。
7. 本書の編集は、考古学実習生が主体となって進め、大日方・篠田・樋口の補佐を得て、深澤が統括した。
8. E6・F9号墳から出土した資料は、調査研究の都合上、総括報告書を刊行するまで國學院大學考古学研究室にて保管する。
9. 現地調査、および調査記録の整理作業に際しては、多くの関係機関・関係各位から御支援を受けた。第1章-4に御芳名を記し、感謝の意を表する次第である。なお、機関名・所属先等は、調査当時のものをを用いた(敬称略)。

凡 例

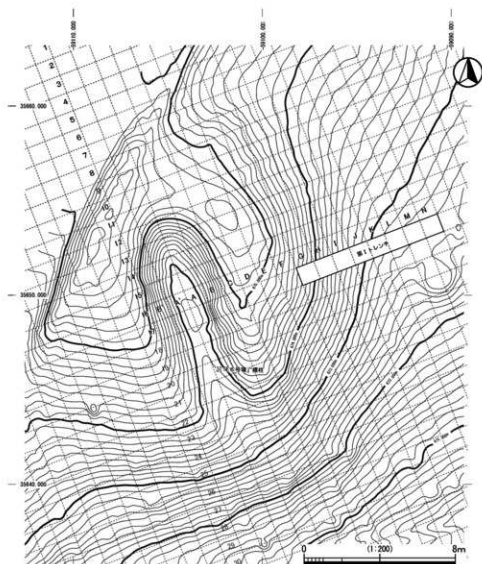
1. 穂高古墳群を構成する各古墳の名称については、既往の調査研究に準拠して「所属支群を示すアルファベット+通し番号」とした。ただし、松川村所在古墳については、この限りでない。また、別称を持つ古墳に関しては、過去の文献との整合を容易にするため、括弧付けで別称を表記する場合もある。
2. F9号墳とF10号墳の総称として「二つ塚」、E6号墳とE7・8号墳の総称として「狐塚」の別称を用いる例もある。しかし、単独の古墳を表示する場合に総称を表記するのは適当ではない。また、文章中で古墳名を多用することを考慮して、E6・F9号墳に限り別称の表記を省略した部分がある。
3. F9号墳の現行グリッドは、第3次調査で判明した石室の主軸に合わせて、第4次調査から新たに採用したものであり、1.0m×1.0mの規模で設定した。第2次～第3次調査における旧グリッドとの対応関係は、第i図を参照されたい。
4. E6号墳のグリッドは、測量調査成果をもとに想定した石室の主軸に合わせて、1.0m×1.0mの規模で設定し、石室主軸から北東にA～Z、南西にA'～Z'、石室主軸に平行して1～30のグリッド番号を振った。詳細は、第ii図を参照されたい。
5. 本書で用いる標高は、すべて東京湾標準海抜高に基づく。
6. 本書における遺構図の座標値は、平成14年国土交通省告示第9号による平面直角座標系第8系(原点:北緯36度00分00秒・東経138度30分00秒)に基づく。
7. 本書の第4・5・7図は、国土地理院発行1/25,000地形図を用いた。
8. 本書における土層、および出土遺物の色調に関する記述は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版標準土色帖』(2005年度版)に準拠した。
9. 遺物番号は、各遺物固有の個体番号を用いた。図面等に表示する場合は、図面番号に続き、〔 〕内に個体番号を示した。なお、既報告の資料のうち、複数の個体が接合した場合は、初出の番号に「ほか」と付して表記する。
10. 本書のⅢ・Ⅳ章における遺物の図面では、須恵器の断面を黒色、金属器の断面を斜



第1図 F9号墳グリッド配置図

線で表した。

11. 第29図から第31図に掲載した遺物の画像にはEinScan-SEで生成した三次元データをCloudCompareに読み込ませて作ったオルソ画像を用いた。
12. 煩雑を避けるため、初出を除く既刊の第1次～第11次発掘調査報告書については、調査年度を付して、『報告2009』のように略記した。



第Ⅱ図 E6号墳グリッド配置図

目 次

緒 言	
例 言	
凡 例	
目 次	

第 I 章 序 言

1 調査の経緯	
(1) 考古学実習の概要	(吉田恵二・青木敬・深澤太郎) 1
(2) 研究計画の策定	(吉田・深澤) 1
(3) 調査の経過	(大日方一郎・深澤) 3
2 研究史	
(1) 既往の群集墳研究	(藤原正大) 4
(2) 徳高古墳群に関する調査研究	(尾上周平・藤原) 5
3 調査研究の目的	(藤原・樋口典昭・深澤) 7
4 調査組織	(水津みゆき) 9
5 調査の経過	
(1) F 9号墳における既往の調査	(原武卓也・種神春香・服部拓) 10
(2) E 6号墳における既往の調査	(谷和奏) 12
(3) 調査日誌	
i) 事前測量調査	(深澤) 14
ii) 調査準備	(深澤) 14
iii) F 9号墳の調査	(松永芽衣) 14
iv) E 6号墳の調査	(今関太一) 15
v) 撤収・帰京	(深澤) 16

第 II 章 周辺の環境

1 安曇野の自然環境	
(1) 安曇野の地形と生物相	(森田耕平) 23
(2) 中房川・烏川と扇状地	(森田・深澤) 26
2 安曇野の歴史環境	
(1) 旧石器時代	(原武・前田奈都美) 27
(2) 縄文時代	(原武・前田 _n) 27
(3) 弥生時代	(原武・前田 _n ・前田萌登) 28
(4) 古墳時代	(森田・前田 _n) 28
(5) 古代	(原武) 29
(6) 中世・近世	(原武) 31
(7) 近代・現代	(萩原秀匡) 31
3 長野県における古墳の概要	(北澤宏明) 39

4 穂高古墳群および潮古墳群の概要

(1) 穂高古墳群の概要	(原武)	42
(2) 潮古墳群の概要	(大嶋拓真)	52

第三章 F9号墳の調査成果

1 F9号墳の現況

(1) 古墳の立地	(藤原)	61
(2) 墳丘・石室の遺存状態	(中島志徳)	61
(3) 調査区の設定	(小山海斗・深澤)	63
(4) 基本層序	(紀静姪・高橋桃子)	64

2 遺構

(1) 遺構の概要	(小林文昭・水津みゆき)	65
(2) 墳丘 [第Ⅰ～Ⅳトレンチ]		
i) 第Ⅰトレンチ	(神澤郁美)	66
ii) 第Ⅱトレンチ	(尾上誠・深澤)	67
iii) 第Ⅲトレンチ	(高山達矢)	68
iv) 第Ⅳトレンチ	(安本好)	70
(3) 石室 [第Ⅰトレンチ]	(黒澤ひかり・水谷凌)	71

3 遺物

(1) 遺物の概要	(松坂響空・神澤)	72
(2) 墳丘出土遺物		
i) 土師器・土製品	(中村朱里・神澤)	76
ii) 須恵器	(松永・神澤)	76
iii) 武器	(松坂・神澤)	76
iv) 馬具	(山本怜香・神澤)	76
v) 工具	(篠田浩輔)	76
vi) 装身具	(篠田)	76
vii) 陶磁器	(加々見真希・神澤)	76
(3) 石室出土遺物		
i) 土師器	(中村・神澤)	77
ii) 須恵器	(松永・神澤)	77
iii) 武器	(松坂・神澤)	77
iv) 馬具	(山本・神澤)	77
v) 工具	(篠田)	78
vi) 装身具	(加々見・神澤)	78
vii) 赤色顔料	(加々見・神澤)	78
viii) 動物遺体	(神澤)	78
4 小結	(平井智規・小池西・大日方)	78

第四章 E6号墳の調査成果

1 E6号墳の現況

(1) 古墳の立地	(小椋賢志)	81
(2) 墳丘・石室の遺存状態	(小椋)	81

(3) 調査区の設定	……………	(鈴木品成)	81
(4) 基本層序	……………	(久光孔一郎・深澤)	84
2 遺構			
(1) 遺構の概要	……………	(久光)	84
(2) 墳丘 [第 I トレンチ]	……………	(樋口)	86
3 遺物			
(1) 遺物の概要	……………	(今関)	88
(2) 墳丘出土遺物			
i) 土師器	……………	(神澤・谷・樋口)	88
ii) 須恵器	……………	(樋口・小池・平井・谷)	88
4 小結	……………	(久光・谷・樋口)	93
第 V 章 結 語			
1 調査のまとめ	……………	(深澤)	95
2 おわりにあたって	……………	(水谷)	98
附編 第12次調査における測量と三次元計測の経過	……………	(篠田)	99

F 9号墳第2次～第11次調査・E 6号墳第1次調査出土遺物一覧	……………	(尾上 ^田 作成、神澤・小池・篠田・樋口・水谷改変)	107
----------------------------------	-------	---------------------------------------	-----

図版
報告書抄録

挿図目次

第 i 図 F 9号墳 グリッド配置図	……………	(大日方製図)	ii
第 ii 図 E 6号墳 グリッド配置図	……………	(樋口製図)	iii
第 1 図 徳高古墳群の位置	……………	(藤原製図)	2
第 2 図 長野県の山岳・河川	……………	(藤原製図)	23
第 3 図 調査地周辺地質図	……………	(北澤製図)	25
第 4 図 安曇野市周辺の遺跡	……………	(原武製図)	33
第 5 図 安曇野市周辺の遺跡 (古墳時代)	……………	(原武製図)	34
第 6 図 長野県の主要古墳と古代寺院	……………	(北澤製図)	41
第 7 図 徳高古墳群と周辺の古墳時代遺跡	……………	(黒澤・藤原製図)	43
第 8 図 徳高古墳群の墳丘	……………	(和泉智子製図)	44
第 9 図 徳高古墳群の石室	……………	(高橋製図)	46
第 10 図 徳高古墳群出土の主要遺物 (1)	……………	(尾上 ^田 ・原武製図)	47

第11図	穂高古墳群出土の主要遺物 (2)	(尾上 _田 ・原武・大日方製図)	48
第12図	穂高古墳群出土の主要遺物 (3)	(尾上 _田 ・原武製図)	49
第13図	穂高古墳群出土の主要遺物 (4)	(尾上 _田 ・原武製図)	50
第14図	潮古墳群出土の主要遺物	(大鳥製図)	52
第15図	F9号墳 墳丘測量図	(高橋製図)	62
第16図	F9号墳 トレンチ配置図	(大日方製図)	63
第17図	F9号墳 基本層序	(大日方・黒澤・中島製図)	64
第18図	F9号墳 第Iトレンチ東壁土層断面図	(加々見・平井・大日方・篠田製図)	66
第19図	F9号墳 第IIトレンチ北壁土層断面図	(竹本雪乃製図)	67
第20図	F9号墳 第IIIトレンチ北壁土層断面図	(加々見・平井・篠田・大日方製図)	68
第21図	F9号墳 第IVトレンチ西壁土層断面図	(小山・谷・平井・篠田・大日方製図)	70
第22図	F9号墳 石室内遺物出土状況 第1・2段階	(中島・小池・平井製図)	73
第23図	F9号墳 石室内遺物出土状況 第3段階	(中島製図)	74
第24図	F9号墳 石室内遺物出土状況 第4段階以降	(中島製図)	75
第25図	F9号墳 墳径復元案	(大日方製図)	79
第26図	E6号墳 周辺地形測量図	(樋口・篠田製図)	82
第27図	E6号墳 トレンチ配置図	(樋口・篠田製図)	83
第28図	E6号墳 第Iトレンチ北東壁土層断面図	(樋口・中村・篠田・小椋製図)	85
第29図	E6号墳 第Iトレンチ遺物出土状況	(樋口・篠田・小椋製図)	87
第30図	E6号墳 出土遺物 (1) (神澤・樋口・平井・安本実測、加々見・神澤・樋口・平井トレース、尾上 _田 ・馬場由佳・山本探拓、篠田オルソ画像作成、小池・大日方製図)		89
第31図	E6号墳 出土遺物 (2) (加々見・神澤・谷・平井実測、加々見・神澤・小池・小山・谷中村・平井・渡辺夏海トレース、萩原・水谷・山本探拓、篠田オルソ画像作成、小池・大日方製図)		90
第32図	E6号墳 出土遺物 (3) (谷実測、加々見・谷・中村・平井トレース、馬場探拓、篠田オルソ画像作成、小池・大日方製図)		91
第33図	E6号墳 墳径復元案	(樋口製図)	94
第34図	E6号墳・F9号墳 土層断面図	(深澤製図)	96
第35図	トラバース路線図	(篠田・樋口製図)	100
第36図	E6号墳の基準点	(篠田・樋口製図)	101

表目次

第1表 「狐塚」の名称変遷	(谷作成)	13
第2表 安曇野市周辺の遺跡	(尾上 _m 作成)	35
第3表 穂高古墳群一覧表	(尾上 _m 作成)	59
第4表 E6号墳 土師器観察表	(加々見・神澤・小池・平井作成)	92
第5表 E6号墳 須恵器観察表	(加々見・神澤・小池・平井作成)	92
第6表 トラバース測量に使用した基準点とE6号墳の基準点の座標	(篠田作成)	99
巻末 F9号墳第2次～第11次調査・E6号墳第1次調査出土遺物一覧	(尾上 _m 作成、神澤・小池・篠田・樋口・水谷改変)	107

図版目次

図版1 F9号墳 墳丘調査前全景	(写真係撮影、大日方製図)
図版2 F9号墳 第Iトレンチ	(写真係撮影、大日方製図)
図版3 F9号墳 第IIIトレンチ (1)	(写真係撮影、大日方製図)
図版4 F9号墳 第IIIトレンチ (2)	(写真係撮影、大日方製図)
図版5 F9号墳 第IIIトレンチ (3)	(写真係撮影、大日方製図)
図版6 F9号墳 第IVトレンチ (1)	(写真係撮影、大日方製図)
図版7 F9号墳 第IVトレンチ (2)	(写真係撮影、大日方製図)
図版8 E6号墳 墳丘調査前全景	(写真係撮影、大日方製図)
図版9 E6号墳 第Iトレンチ (1)	(写真係撮影、大日方製図)
図版10 E6号墳 第Iトレンチ (2)	(写真係撮影、大日方製図)
図版11 E6号墳 出土遺物 土師器・須恵器	(写真係・樋口・大日方撮影、大日方製図)
図版12 現地説明会・集合写真	(写真係撮影、大日方製図)

第I章 序 言

1 調査の経緯

(1) 考古学実習の概要

考古学実習の目的 國學院大學は、考古学的遺跡を調査する際の計画立案方法をはじめ、文化財保護に関する行政手続きや、基礎的な調査技術を受講生に教授した上で、夏季休暇中に学術発掘を実施し、その成果を実習報告として刊行する学部開講科目「考古学調査法」「考古学実習Ⅰ・Ⅱ」、ならびに大学院開講科目「考古学実習A・B」を設けている。この実習は、担当教員が策定した研究計画に従って、ティーチングアシスタント(大学院教務補佐員)や、既習生・特別参加者らの支援を受けつつ、実習生が主体的に参画する科目であり、遺跡の発掘調査に関する手順を一貫して学習する点に、例のない特徴があるものといえよう。

既往の実習調査 本学の考古学実習は、昭和54(1979)年度に学部開講科目「考古学演習Ⅱ」としてはじまり、平成19(2007)年に学部開講科目「考古学調査法」と改めた後、平成27(2015)年に大学院開講科目「考古学実習A・B」を加えた。また、令和3(2021)年度より、従来の学部開講科目「考古学調査法」について、発掘調査に必要な知識・技術を教授する通年科目「考古学調査法」と、サマーセッションとして現地調査を行う「考古学実習Ⅰ・Ⅱ」によるものと改め、かつ複数年度に互る受講を可能とするようカリキュラム変更を実施した。

その内、先史考古学分野では、主に旧石器時代から縄文時代への展開過程を研究するため、新潟県十日町市壬遺跡、山形県長井市北堂C遺跡・明神堂遺跡、長野県水曾町柳又遺跡A地点、北海道今金町美利河遺跡群、新潟県津南町木ノ木遺跡・卯ノ木遺跡、青森県東北町赤平(1)遺跡、そして群馬県長野原町居家以岩除遺跡の調査を行っている。また、原史・歴史考古学分野では、伊豆諸島における積石信仰を考古学的に研究するため、東京都三宅村中郷遺跡・物見処遺跡などの現地調査を平成20(2008)年まで継続した。但し、調査担当者の在外研究に伴い、千葉県富津市森山塚古墳や、秋田県北秋田市石倉岱遺跡の調査を実施した年度もある。

(吉田・青木・深澤)

(2) 研究計画の策定

古墳時代から古代への展開過程に関する研究 東京都三宅村物見処遺跡の調査を終えた当研究室では、平成21(2009)年度から吉田恵二(文学部・文学研究科教授)を担当者として、古墳時代から古代への展開過程に関する研究計画を策定し、これに伴う新たな実習調査を実施することとした。

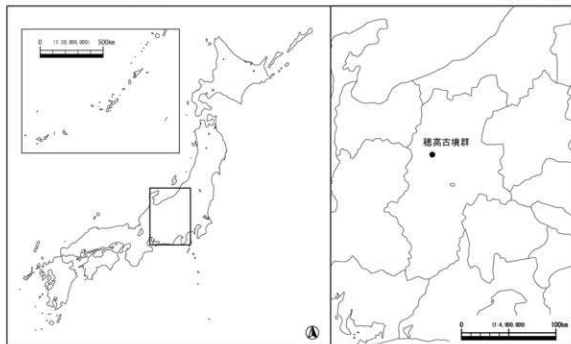
ここで検討する古墳時代後期から飛鳥時代・奈良時代にかけての移行期は、古墳の築造を社会統合の

一手段としてきた時代から、成文法によって国家を運営しようとする時代への過渡の様相を呈するものである。従って、古墳の築造や、古墳の利用に代表される古墳時代的な社会の在り方が、どのように変容し、そして最終的に忘れ去られていくのか、といった問題についても、やはり個別の地域における具体的様相を把握していくことが欠かせない。かかる問題点を検討するためには、複数回の埋葬や、その後の再利用などが想定される横穴式石室と、これを内蔵する古墳の比較研究が、多くの情報をもたらしてくれるものと思われる。

調査対象遺跡の選定 このような観点に基づき、研究計画に相応しい調査対象の検討を進めていたところ、幸いにして長野県安曇野市教育委員会の協力を得ることができた。この安曇野市には、6世紀後半から8世紀前半にかけての穂高古墳群が存在しており、約90基に及ぶ古墳の分布や、埋葬施設の様相、年代観などの基礎的な研究に関しては、すでに一定の成果が得られている。しかしながら、古墳群内の階層性を探る上で良好なモデルとなる未盗掘の事例について、墳丘・石室・遺物の総合的な学術調査が行われた例のない点が惜しまれていた。特に、埋葬施設の石材まで抜き取られた古墳も少なくなく、墳丘と石室の関係については、ほとんど知見が得られていない。

一方で、墳丘と埋葬施設の遺存状態が良好な事例も、僅かながら認められてきた。とりわけ、国土交通省所管の国営アルプスあづみの公園(堀金・穂高地区)に保存されているF9・F10号墳は、横穴式石室の存在が明らかな好例として知られている。そこで当研究室では、既に天井を失っているF9号墳を対象として、平成21(2009)年度より考古学実習による発掘調査を開始することとした。なお、隣接するF10号墳は、天井石まで遺存しているため、当面発掘調査の手を加えずに現状のまま保存する。また、直径約120mのF9号墳のように、古墳群内における中小規模の古墳と、豊富な副葬品と比較的大型の墳丘を持つ事例との比較検討を行うため、令和3(2021)年度より烏川の対岸に位置するE6号墳の範囲確認調査を行うこととした。

(吉田・深澤)



第1図 穂高古墳群の位置

(3) 調査の経過

事前測量調査・発掘調査に係る手続き 調査の計画と実施に当たっては、所轄庁である長野県教育委員会・安曇野市教育委員会の指導を仰ぎ、地権者の国土交通省と、管理者である国営アルプスあづみの公園の協力を得た。令和3(2021)年度の第12次調査に際しては、同年5月18日に、これらの4者と國學院大學考古学研究室による5機関の事前協議を国土交通省長野国道事務所にて実施し、調査計画・安全対策・保存活用・広報などに関する理解と承認を受けた。その上で、文化財保護法第92条に基づく調査のための発掘届(令和3(2021)年7月2日付)を、安曇野市教育委員会経由にて長野県教育委員会へ提出した。加えて今年度は、E6号墳およびその周辺地形における調査前状況を記録するため、国土交通省関東地方整備局宛に公園使用許可申請書(令和3(2021)年7月8日付)を提出。発掘調査に先立つ7月17・18日に事前測量調査を実施した。

現地における発掘調査は、8月5日から8月14日まで、継続調査を行ってきたF9号墳と、新たに発掘に着手するE6号墳の合計30.75㎡を対象に実施し、E6号墳からコンテナ1個分の出土遺物を得ている。これを受けて、安曇野警察署長宛てに埋蔵物発見届(令和3(2021)年8月24日付)を、長野県教育委員会教育長宛てに埋蔵文化財保管証(令和3(2021)年8月24日付)・発掘調査終了届(令和3(2021)年8月24日付)を提出した。また、出土遺物や調査記録の整理は、調査終了後の9月から開始し、翌令和4(2022)年2月まで継続して同月に本書を刊行した。

コロナ禍への対応 昨年度は、新型コロナウイルス感染症の感染拡大に伴い、やむを得ず「考古学調査法」「考古学実習」を休講としたが、重ねて今年度も実習を中止することは、教育課程の運用上極めて難しい。しかし、引き続きコロナ禍が猛威を振るい、国の緊急事態宣言も発令されている中で本授業を開講するためには、大前提として学生・教職員の命と健康を守っていく十分な取り組みが欠かせないであろう。そこで当研究室では、関係5機関、および本学教務課との協議を重ね、次のような対策を実施することとした。

現地調査の前後における授業は、感染拡大状況を見据えつつ極力オンラインにて開講し、技術伝習の必要がある測量・写真撮影技術などの講習、および整理作業についてのみ対面で実施する。また、考古学実習室など関連施設の利用予約制限によって「三密」を避け、来室者の入退出・体温を記録する。

発掘実習に際しては、大学手配によるワクチンの2回接種を推奨するとともに、全ての参加者が実習参加直前に必ずPCR検査を受け、陰性が確認できた者のみ参加を許可する。加えて、外部との接触を避けるため、チャーターしたバスで東京と現地を往復する。現場作業中は、総員が事前に陰性を確認しており、むしろ熱中症の危険を避けるため、やむなく陰性確認者以外と接触する場合を除いてマスクを着用せず、その旨を現場付近に看板などを設置して告知する(国土交通省からの要望)。参加者は、現場と宿舍との往復に徹し、外部との接触を最小限とするため、日用品などの買い出しも教員と学生幹事2名程度の少人数で行い、夜間も宿舍からの外出は不許可とする。調査終盤に実施する現地説明会は、密を避けるためオンラインにて実施する(長野県教育委員会からの要望)。(大日方・深澤)

2 研究史

(1) 既往の群集墳研究

「群集墳」の位置付け 徳高古墳群は、いわゆる「後期群集墳」と理解されている。このような「群集墳」は、戦前から一部の研究者によって「古墳群」として認識され、その立地や出土遺物に着目した研究が、地域史研究の一環として検討されてきた¹⁾。しかし、多くの研究者の関心は、大型古墳や、副葬品、埴輪などの遺物に向けられ、活発な研究が行われることはなかった。

戦後は、古墳の多くを占める中小古墳を含めた研究が試みられ、昭和26(1951)年の近藤義郎らによる岡山県津山市佐良山古墳群の発掘調査を契機として、群集墳研究が本格化した。近藤は、「群集墳」という語を用いて、それらを「当時の支配体制と政治構造を表現しうるもの」とし、古墳の多くが横穴式石室を採用していることから後期古墳であると判断した²⁾。その後、石部正志は、古墳時代後期以外にも群集墳が存在することを指摘し、古墳時代中期における木棺直葬や簡略な竪穴式石室、粘土椀などを内部主体とする円墳・方墳からなる群集墳を「古式群集墳」とし、横穴式石室を内部主体とするものを「後期群集墳」とした³⁾。1970年代に入ると、群集墳の調査事例は激増し、従来の群集墳論を再検討しようとする動きが高まった。和田晴吾は、弥生時代から古墳時代後期にかけての墳墓群を5つに分類する中で、古墳時代後期から飛鳥時代のものを群集墳と定義した。その中で、特に小型低方墳の流れを汲む後期前半のものを「古式群集墳」、畿内型横穴式石室をもつ古墳時代後期から飛鳥時代初頭のものを「新式群集墳」、小型化した畿内型横穴式石室・小石椀・木棺直葬をもつ飛鳥時代の方墳を「新式群集墳」に細分した⁴⁾。

群集墳の性格 それでは、徳高古墳群が属する「後期群集墳」の研究史について概観しておこう。群集墳研究は、そもそも歴史解釈の問題と密接に関わってきた。近藤義郎は、佐良山古墳群の調査から、群集墳の成立を家父長制の発達によるものとした⁵⁾。これに対して西嶋定生は、古墳を大和政権との政治的関係の中で論じており、後期群集墳の被葬者層の拡大をカバネ制と結びつけ、群集墳の分布の広がりは大和政権と地方家族との擬制的同族関係の波及を意味するとした⁶⁾。

1970年代以降は、群集墳の発生を家父長制に起因するという近藤説と、大和政権との関係に起因するという西嶋説の、大きく2つの説に依拠して様々な研究者が群集墳の性格を主張した。西嶋説に立った水野正好は、滋賀県甲西町狐栗古墳群の調査から、群域内に墓道としての幹道、枝道の存在を指摘し、単位群を抽出した。その結果、水野は、この単位群の在り方に古代家族の存在を想定している⁷⁾。また、近藤説に立った都出比呂志は、群集墳の発展過程が同じ盆地、平野内でも異なることを指摘し、西嶋説に疑義を呈している⁸⁾。さらに、山中敏史は、群集墳を律令社会から遡って解釈することで、その性格を「同族関係を示す身分秩序や族制的結合原理による軍事編成に有力成員を組み込み、氏族・部族組織の崩壊を防ぎ、成員を人格的奴隷状態に押しとどめる」ものとした⁹⁾。最近では、鈴木一有が、無袖石室の導入過程の分析から、畿内と地方との擬制的同族関係の存在を想定している¹⁰⁾。また、白井久美子

は、千葉県域の後期群集墳について、王権と地域首長との関係を念頭に置きながら論じている¹¹⁾。

群集墳の階層性 群集墳の副葬品・墳丘・埋葬施設から、階層性・地域性を見出そうとする論考は、様々な研究者の研究主題となっている。副葬品に関しては、土器や武器類における器種の多寡に群集墳の階層性が表れるとする河村好光の論考や¹²⁾、畿内系文物の採用が群集墳に葬られた上部階層の官人化に伴うものと推測している太田博之の論考がある¹³⁾。埋葬施設に関しては、鈴木一有が、東海地域の横穴式石室に関して、墓室の規模から被葬者の階層性を指摘する¹⁴⁾。さらに、立地に関しては、丸山竜平が、滋賀県志賀郡の群集墳について墓域の復元・立地の検討を行い、郷土的な家父長制と戸的の家父長制の存在を推定した¹⁵⁾。また、群集墳の支群内で墳丘規模が卓越する古墳を、最も早く造墓権を獲得した者の墳墓とする太田宏明の論考もある¹⁶⁾。穂高古墳群では、三木弘が古墳の規模・出土遺物の様相から、各支群内における古墳の時期差について、階層性の有無を交えて検討している¹⁷⁾。F9号墳およびE6号墳の位置づけを考える上でも、これらの方法論が有効であると考えられる。

広域的な群集墳研究 2000年代以降、遺構・遺物の個別研究の深化と、それまでマイクロに実施されてきた群集墳研究をすり合わせ、より広域で議論が行われる事例が増加した。東海考古学フォーラムによるシンポジウムなどでは、東海・中部高地・関東における無袖石室の導入過程やその変遷について報告されており、被葬者の職業や、畿内との関係性についての考察が行われている¹⁸⁾。また、関東地方では、佐々木憲一らが各地域の様相の報告を行っており、王権との関係性について検討された¹⁹⁾。(藤原)

(2) 穂高古墳群に関する調査研究

古墳群の発見 学術誌において穂高古墳群の存在が世に示されたのは、明治23(1890)年に鷹野秀雄によって「有明村ノ古墳」として紹介された報告が初出である²⁰⁾。次いで、明治34(1901)年には、増田謙吾によって、旧有明村に所在する古墳の分布概略図が示され²¹⁾、大正年間には、D1号墳(魏石鬼窟)をはじめとするいくつかの古墳が、島居龍蔵らによって踏査された²²⁾。大正10(1921)年には、長野県史蹟名勝天然記念物調査会の発足にともなって、南安曇郡から長野県へ旧有明村の47基・旧西穂高村の21基の古墳が報告され²³⁾、調査の結果、要保存と判断されたものとして、A1号墳(陵塚)・B1号墳(ちいが塚)・D1号墳・G1号墳(上原古墳)が報告書に記載された²⁴⁾。

これら個々に報告されてきた旧有明村周辺の古墳を古墳群として包括する見地は、昭和31(1956)年発行の『信濃史料』において示された。但し、旧有明村の古墳が「有明古墳群」としてA～Dの4群に分類されているが、旧西穂高村など安曇野市穂高牧以南に所在する古墳については古墳群として扱っていなかった²⁵⁾。

古墳の悉皆調査と「穂高古墳群」 戦後の宅地造成などにより古墳の埋没が問題になると、穂高町教育委員会によって、昭和39(1964)年度から昭和43(1968)年度にかけて、町内に所在する古墳の精密な分布調査が実施された。現存確認できた65基の古墳に標柱が設置され、古墳の概要と現状の写真を付した報告書が刊行された²⁶⁾。この調査では、それまで「有明古墳群」に含まれていなかった古墳も、E～Hの支群に分類された。同時期には、長野県教育委員会による分布調査も実施され²⁷⁾、これらの調査を通して、穂高古墳群の現状と実態が把握された結果、旧穂高町域(有明地区・西穂高地区・穂高地区)の古墳

が、A～Hの8群に分類された²⁶⁾。

なお、「徳高古墳群」の名称は、A～G群と北安曇郡松川村鼠穴地蔵に所在する3基の古墳を包括した『長野県史』を初とし²⁹⁾、『徳高町誌』³⁰⁾以降、広く用いられることとなる。但し、A～C・E群を「有明・牧古墳群」、F群を「塚原古墳群」に分ける立場も示した『南安曇郡誌』や³¹⁾、A～C群を「有明古墳群」、E・F群を「牧古墳群・塚原古墳群」の「二大古墳群」として想定する論考³²⁾もある。また、平成元(1989)年に徳高町教育委員会から刊行された『徳高町の古墳群とその人々』では、A～D群を「有明古墳群」、E群を「牧古墳群」、F群を「塚原古墳群」の分類に従って表記している³³⁾。これに対して、三木弘は、祖父が塚古墳とA～F群、およびD1号墳・G1号墳などの「単独墳」を単一の「有明古墳群」として捉えるなど³⁴⁾、群認識・名称の統一はなされていない。

本学では、これら松川村南部から安曇野市西部の常念山脈麓にかけて分布する群集墳を包括した名称として、『長野県史』以来普及し、安曇野市指定史跡名称である「徳高古墳群」を用いることとした。さらに、その内訳として、『信濃史料』以降の文献上から確認できた85基以上の古墳(安曇野市内82基・松川村内3基)を含むと定義している³⁵⁾。

発掘調査と既出資料の再検討 徳高古墳群の多くの古墳が、明治から昭和初期にかけて「発掘」されたものの、詳細な記録も残らず、出土遺物もほとんどが散逸している。学術的な記録をともなった発掘調査は、大正7(1918)年のB5号墳(金堀塚)や³⁶⁾、昭和5(1930)年のG1号墳を嚆矢とし³⁷⁾、戦後の県史・郡誌・町誌編纂の一環として、数基の古墳を対象に実施された。昭和26(1951)年のE7号墳(狐塚2号墳)ほか数基³⁸⁾、昭和50(1975)年のF1号墳(一本杉古墳)³⁹⁾、昭和62(1987)年のD1号墳の発掘調査などである⁴⁰⁾。さらに、平成11(1999)年には、戦前の第1次調査に続いて、G1号墳の第2次発掘調査が行われ⁴¹⁾、続いて実施された第3・4次調査の発掘調査報告書も刊行されている⁴²⁾。なお、平成21(2009)年度からは、本学考古学研究室によるF9号墳の発掘調査が継続中であり、令和3(2021)年度で第12次調査を迎えた⁴³⁾。

また、古墳の分布調査を通して、古墳群全体の現状や個々の古墳の損壊状況が把握されてくるなかで、県史・町史の編纂にともない、既出資料の再検討も実施された。後述するように、昭和57(1982)年には、筑波大学考古学研究室の岩崎卓也らによって、旧徳高町内2基・松川村内1基の墳丘・石室の測量調査と、宮内庁書陵部・有明山神社・徳高神社所蔵資料の実測調査が行われた⁴⁴⁾。平成3(1991)年には、三木により、徳高郷土資料館などに断片的にしか伝えられていなかったE6号墳(狐塚3号墳)の出土資料が調査された⁴⁵⁾。

徳高古墳群の位置づけに関する研究 資料の蓄積を踏まえて、徳高古墳群の位置づけに関連した以下の研究が行われている。

徳高古墳群の年代について、岩崎らは6基の古墳について墳丘・石室の測量調査、および既出遺物の実測調査を実施した。その結果、「有明古墳群」の造営年代を6世紀後半から7世紀前半と推定し、石室を規模に応じた3類型に分類したうえで、出土遺物の年代をもとに各類型の築造年代を比定した。また、類型ごとに開口方向の差異が認められることを指摘した⁴⁶⁾。桐原健は、『徳高町誌』において、岩崎らによる石室分類をE・F群にも適用し、A～C群とE・F群との間に僅かな時期差がある可能性を指摘した⁴⁷⁾。また、三木はE6号墳出土と伝わる資料の検討により、E6号墳において、6世紀末の築造

後、少なくとも7世紀前半に2回、8世紀前半に1回の追葬があったことを指摘した。三木は、D1号墳出土資料も、8世紀を除いてほぼ同様の年代に比定し⁴⁹⁾、その他の古墳出土資料と総合した結果、「有明古墳群」が6世紀後半から7世紀代にかけて築造されたものと推定した。すなわち、TK43型式の須恵器を出土しているA6号墳(犬養塚)・B23号墳(祝塚)・D1号墳・E6号墳・G1号墳が6世紀後半に築造され始め、7世紀に入っても築造が継続していたとみている。なお、古墳築造の最終時期は不明であるが、F群は他の支群と比べて相対的に新しい築造時期であるとの認識のもとで、小型石室をもつF1号墳の年代を7世紀中葉とみている。さらに、石室・墳丘規模ともに卓越する古墳が、各支群において最高標高地に先行して築造され、後続する古墳に対して占地的な規制を与えた可能性を指摘した⁴⁹⁾。このように、穂高古墳群の稼働年代については、6世紀後半から8世紀の間とされ、F9号墳出土遺物の年代もほぼ当該期間に収まる⁵⁰⁾。

石室については、岩崎らが、石室長・幅・高によって3類型に分類し、石室類型ごとに開口方向の差異が認められることを指摘した。さらに、古墳の分布からA～C群を小支群に分類したうえで、石室類型との対応関係が認められる可能性を提示した⁵¹⁾。三木は、岩崎らの石室分類を受けて、石室長に主眼を置いた5類型に分類し、石室構造には、腰石を用いずに河原石を平積みするものと、大振りの石材を用いて腰石とするものとが存在すると指摘した。また、後者には、礫を平積みにして腰石としたもの(B1号墳・C2号墳・F1号墳・G1号墳)と、礫を縦長に並べて腰石としたもの(E2号墳・E7号墳)とに分かれることを指摘している⁵²⁾。

なお、古墳群の造営主体は、未だ明らかとなっていないが、桐原は、A～C群とE・F群とに僅かな時期差が認められる点などを指摘し、それぞれ異なる集落によって形成されたことを想定しつつ、現状で穂高古墳群周辺における古墳時代の集落遺跡がF・G群下流の等々力・白金・矢原地区一帯のみしか認められないことから、今のところこれを否定せざるを得ないとした⁵³⁾。これに対して、三木は鳥川扇状地内において、洪水層が遺物包含層の上に厚く堆積していることなどから、古墳時代集落の大部分が発見されていない可能性を示した⁵⁴⁾。また、古墳群を古代の牧と関連づける研究もある。桐原は、「延喜式」に記載された「猪鹿牧」が安曇野市穂高牧地籍に比定されることや、他地域での古墳と古牧との係わりから、E群を猪鹿牧に先行する私牧の墓域であると想定するが⁵⁵⁾、三木は、E群からの馬具の出土が乏しい点などを根拠に否定的な見解を示している⁵⁶⁾。

(尾上 田・藤原)

3 調査研究の目的

既往の調査成果 穂高古墳群は、松本市の中山古墳群などと並ぶ中信用有数の後期群集墳であるが、古墳群全体に対して一貫した調査・研究が行われておらず、またそのほとんどが墳丘・石室や、既出資料の再報告に止まっているのが現状である。こうした研究史上の問題点から、穂高古墳群F9号墳における考古学実習では、墳丘・埋葬施設・副葬品等の全体像を明らかにし、他の古墳と比較する上で有効なモデルを把握するために、平成21(2009)年度より継続的な調査を開始した。最終的には、F9号墳の墳丘規模や、墳丘・石室の構築方法、出土遺物の総合的な検討を通して、古墳群の形成過程や階層性、造

営主体の実態などの検討を進め、古墳時代から古代に至る社会的な変容過程を明らかにしていきたい。

上記の研究課題を念頭に置き、第1次調査では、E群・F群の現状確認調査と、F9号墳・F10号墳の墳丘測量を行った。また、平成22(2010)年度の第2次調査以後は、F10号墳を現状保存することとし、F9号墳の石室内に第Ⅰトレンチ、墳丘上に第Ⅱ～Ⅳトレンチを設定して掘削・記録を行った。その結果、これまでに、直径約11.0～約12.0mの墳丘と、残存長約7.0m、幅約1.3～約1.5mの南側に開口する無袖の横穴式石室をもつ円墳であることが判明している。また、古墳時代から古代にかけての土師器(7世紀中頃)・須恵器(6世紀後半～8世紀前半)・直刀(6世紀末～7世紀初頭)・鉄鏃(6世紀後半～7世紀初頭)・馬具(6世紀末～7世紀初頭)・刀子・装身具類・動物骨などが出土した。

F9号墳の第12次発掘調査 過年度の調査成果を受け、この第12次調査では、周溝の有無及び、墳丘規模の最終的な確認を目的として、第Ⅲトレンチを東に、第Ⅳトレンチを北に拡張する。また、第Ⅰトレンチ東壁の土層堆積状況も併せて再検討することで、墳丘構築時の盛土と、後世における古墳の壊変状況も把握し、穂高古墳群内における中小規模古墳の実態を明らかにする。

E6号墳の第1次発掘調査 上述した通り、11次にわたるF9号墳の調査によって多くの成果が得られたが、穂高古墳群の中にF9号墳と比較検討が可能な調査済みの古墳は少なく、古墳群全体の位置づけを考察するための基礎情報が不足している。とりわけ、多量の副葬品や、群内で比較的大型の墳丘を持つ事例との比較なくして、穂高古墳群の構造を理解することは困難であろう。そこで、隣接するE群の中で最大とされる直径20m級のE6号墳について、一昨年度実施してきた墳丘・周辺地形の測量を継続するとともに、墳丘の範囲確認を目的としたトレンチを石室主軸に直交する墳丘東側に設定し、発掘調査を開始することとする。

出張特集展示「穂高古墳群F9号墳－考古学実習展－」の開催 今年度は、事前協議時に公園事務所から要望を受け、既往の調査成果について来園者に展示公開する機会を設けることとなった。そこで、國學院大學博物館の出張特集展示「穂高古墳群F9号墳－考古学実習展－」を、園内のテーマ展示館「あづみの学校」にて開催する。但し、相応しい展示ケースの調達が困難であるため、パネル展示と露出展示を併用することとし、毎日9時30分～16時30分まで、実習生を90分5回交代制にて安全監視員として派遣する。その際は、必ずマスクを着用し、来園者とのソーシャルディスタンスを保ちつつ対応するものとする。

オンライン現地説明会「穂高古墳群発掘調査」の開催 また、長野県教育委員会より、対面の現地説明会を開催することで、周辺地域から多くの来訪が懸念されるため、オンラインにて現地説明会を開催できないかとの依頼があった。そこで、動画配信の実績がある國學院大學博物館に依頼し、実習生を主体とする参加者が解説の様子を、リアルタイムで配信することとする。配信内容のアーカイブは、当日以降も、國學院大學博物館YouTubeサイト(以下のQRコード参照)にて公開する。

(深澤・藤原・樋口)



4 調査組織

調査主体者

針本正行(國學院大學学長)

調査担当者

深澤太郎(國學院大學研究開発推進機構准教授・文学部兼担准教授)

調査指導者

池田榮史(國學院大學研究開発推進機構教授)、谷口康浩(國學院大學文学部教授)、内川隆志(國學院大學文学部教授・國學院大學博物館副館長)、及川聡(國學院大學AMC事務部長・國學院大學博物館副館長)、青木敬(國學院大學文学部教授)、大日方一郎(國學院大學文学部助手)、佐々木理良・尾上周平(國學院大學博物館学芸員)

大学院ティーチングアシスタント

篠田浩輔・樋口典昭(國學院大學大学院文学研究科博士前期課程)

令和3(2021)年度考古学実習生

総務：水谷凌 副総務：神澤郁美・松本空也 幹事：久光孔一郎・水津みゆき

	班長	機材・遺物係	写真係	図面係	衛生係
1班(E6)	久光孔一郎	今関太一	鈴木昂成	谷和奏	寺田佑
2班(F9-1)	神澤郁美	中村朱里	山本怜香	加々見真希	小崎菜太郎
3班(F9-2)	松本空也 高山達矢	高山達矢	松永芽依	小山海斗	服部拓
4班(F9-3)	水津みゆき	松坂響空	萩原秀匡	安本好	水津みゆき
大学院	-	小槻賢志	-	-	-

特別参加者

平井智規(國學院大學大学院文学研究科博士前期課程)、大嶋拓真・小池茜・馬場由佳・渡辺夏海・服部拓(國學院大學文学部史学科)

調査協力機関・協力者

安曇野市教育委員会、アルプスあづみの公園管理マネジメント共同体、AID保養所エソール安曇野、九州文化財計測支援集団、国土交通省関東地方整備局、長野県教育委員会

石井匠、石丸敦史、白居直之、内堀團、大塚惟子、押本雅生、大日方明文、大日方昌子、風間栄一、春日皓介、金田明大、河原薫、桐原健、楠恵美子、窪田尚幸、黒澤ひかり、児玉利一、古墳王子(飯田怜大)、笹生衛、島田哲男、榎山林繼、多賀谷蓮、竹村侑祐、主税英徳、土屋和章、富山悠加、中村亜希子、中村耕作、永見秀徳、中谷高志、成田裕、新山保和、野口淳、原明芳、原智之、日野正祥、福島彩子、福尾正彦、藤野豊國、二葉俊也、古谷毅、皆川貴之、宮本尚子、武藤駿平、村松洋介、mooya、茂木雅博、山口欧志、山下泰水、山田真一、吉澤徹、吉田敏弘、吉田あんり、吉田みちこ、渡辺仁

(水津)

5 調査の経過

(1) F9号墳における既往の調査

平成21(2009)年度 第1次調査³⁷⁾ F9号墳・F10号墳の墳丘測量を行った。その結果、F9号墳が現状で直径約17.0m・残存高約1.3m、F10号墳が現状で長軸約12.9m・残存高約1.8mの墳丘規模と推定され、いずれも横穴式石室をもつ円墳と判明。併せて、E群・F群の踏査による現状確認も実施した。

平成22(2010)年度 第2次調査³⁸⁾ 比較的遺存状態が良好と判断されるF10号墳を現状保存し、F9号墳の発掘調査を開始した。この調査では、石室・羨道部の確認を目的とした南北10.0mの第Ⅰトレンチと、墳丘の層序や、西側墳裾部の状況把握を目的とした東西8.0mの第Ⅱトレンチを設定した。調査の結果、第Ⅰトレンチでは、石室東壁と推定される石列を確認した。石室内部は、主に長軸長約10cm～約50cmの割石・石室石材などで埋められていた。石室開口部付近の攪乱層を中心に、土師器・須恵器(7世紀中ごろ)、石室付近から和釘・硬貨・陶器片(近代)などが出土した。第Ⅱトレンチでは、国営公園の設置まで機能していた塚原配水池によって墳裾部が削平されたことを確認した。また、測量調査で得られた墳丘規模が、古墳の構築当初とは異なる可能性を指摘した。

平成23(2011)年度 第3次調査³⁹⁾ 石室の全体像を確認するため、第Ⅰトレンチを北に0.5m、西に1.0m拡張して掘削を行い、石室内の礫を除去した。その結果、残存長約7.0m、幅約1.3～約1.5mで、無袖構造の横穴式石室をもつことが判明した。また、この時点で、東西両側壁を検出したことにより、N-12°-Wをとる南向きに開口した石室であることも明らかとなった。土師器・須恵器(8世紀前半)、切子玉、陶製受皿・釘類・硬貨(中世以降)などが出土した。

平成24(2012)年度 第4次調査⁴⁰⁾ 石室の内部構造を明らかにするため、引き続き第Ⅰトレンチの掘削を進めた。第3次調査では、第2次調査で設定したグリッドを使用していたため、グリッドの軸が石室に対して傾いていた。そこで、第3次調査で明らかになった石室主軸の延長上に基準点を設け、改めてグリッドを設定した(凡例参照)。調査の結果、石室は、上段にいくほど石室幅が狭くなる持ち送り構造を採用していることが判明した。また閉塞石と推測される礫が出土したことから、石室の入り口と思われる部分特定し、玄室長が約7.0mであると確定できた。古墳時代から古代にかけての遺物として土師器・須恵器(6世紀後半～8世紀初頭)・馬具(6世紀後半～7世紀)・刀子・切子玉のほか、近世以降の遺物として動物骨が出土。これら石室内部の遺物は、入り口付近を中心に出土した。

平成25(2013)年度 第5次調査⁴¹⁾ 石室構造の全容を把握するため、引き続き第Ⅰトレンチの掘削を進めた。調査の結果、羨道部の石列全体を検出し、土師器・須恵器(8世紀前半頃)・紋具・鉄鏃(6世紀後半頃)・刀子・釘・勾玉・管玉・ウマの歯や骨などの動物遺存体(9世紀末～11世紀前半)が出土した。特に、B6グリッドの閉塞石の内側からは、8世紀前半の須恵器が集中的に出土した。また、周溝の存否と、墳丘規模の確認、墳丘の構築方法の解明を目的とし、墳頂部から東に8.0m、幅1.0mの第Ⅲトレンチを設定した。その結果、当初の目的である周溝は確認できなかったが、墳丘基盤層とみられる層状地

性堆積物の砂礫層(I・II層)を検出した。また、第Iトレンチ前庭部や、第IIIトレンチにおける層位との比較を通して、F9号墳の石室が古墳築造時の地表面を掘り込んで構築された可能性を指摘した。

平成26(2014)年度 第6次調査⁶² 石室の内部構造を明らかにするため、引き続き第Iトレンチの掘削を進めた。また、前年度第IIIトレンチで見出したF9号墳の基盤層(I・II層)を追求するため、前庭部東側に幅0.3mのサブトレンチを設定。さらに、周溝の有無と、墳丘規模の確認、墳丘構築方法の解明を目的とし、墳丘北側に第IVトレンチを設けた。調査の結果、いずれの調査区においても基盤層(I・II層)を検出した。第Iトレンチでは、奥壁に幅約100cmの腰石と思われる石材が据えられ、ほぼ完形の土師器杯(7世紀中頃)、須恵器長頸壺・鉄鏃(6世紀末～7世紀初頭)、直刀(7世紀前半)、賣金具・靱金具(6世紀末～7世紀初頭)、ウマの歯(9世紀末～11世紀前半)なども出土した。第IVトレンチでは、明確な遺構を確認することはできなかったが、第IIトレンチ・第IIIトレンチの土層堆積状況から改めて墳丘の形状を検討してみると、第IVトレンチの設定範囲に墳裾部が収まらない可能性も想定された。

平成27(2015)年度 第7次調査⁶³ 初葬時の石室床面の検出を目的とし、第Iトレンチ東側のB区にて掘削を行った。土師器・須恵器・両頭金具・鉄鏃・赤色顔料やガラス小玉・切子玉が、一面の小さな礫とともに出土した。また、墳丘規模や、構築方法の確認、および遺跡形成過程の確認を目的とし、第IVトレンチを東に0.5m、南に2.0m拡張した結果、周溝埋土か、盛土の一部と推測されたレンズ状堆積の「3層」と呼ばれる土層を確認した。加えて、各調査区における土層堆積状況を検討し、墳丘の規模を約11.0mと推測した。

平成28(2016)年度 第8次調査⁶⁴ 初葬時の床面を全面的に検出するため、引き続き第Iトレンチ石室内埋土の掘削を行った。その結果、初葬時の床面と思われる礫が混じりの黒色土層を検出した。土師器・須恵器(7世紀中頃)、鉄鏃・直刀(6世紀末～7世紀初頭)、ガラス小玉(6世紀後半～7世紀前半)、鎧靴(6世紀後半)、不明鉄片が出土した。また、墳裾部の確認と墳丘構築方法の解明のため、第IIトレンチをD2グリッド西端部から東西5.0m、南北1.0mに再設定し、部分的に南側へ0.5m、東側へ1.0m拡張した。さらに北壁から0.8m幅のサブトレンチを設定した。その結果、石室壁体の背後に控え積みとみられる礫群を検出した。

平成29(2017)年度 第9次調査⁶⁵ 石室床面の全面的な検出と、遺物の存否確認を目的として石室内埋土を掘削したところ、初葬時の床面とされる小礫が混ざった黒色土層を全面で検出した。石室内からは、須恵器子持壺(6世紀前半)、須恵器杯身(7世紀中頃)、ガラス小玉(6世紀末～7世紀前半)、鉄鏃、不明鉄片、炭化物が出土。また、周溝の存否確認、石室開口部前面付近の構造解明や、石室開口部南側周辺における埋葬儀礼の把握を目的に、前庭部西側に東西2.0m、南北3.0mの拡張区を設定したところ、土師器・須恵器・磁器・鉄製鈔・刀子・寛永通寶鉄銭・丸釘・不明鉄製品・炭化物が出土した。

平成30(2018)年度 第10次調査⁶⁶ 石室内調査の完了に向け、床面を精査することを目的として第Iトレンチ石室内を調査した結果、須恵器片、ガラス小玉などが出土した。また、墳丘規模の確認と周溝の存在を確認することを目的として、前庭部の調査区を西側に東西2.0m、南北3.0m幅に拡張した。その結果、A11グリッド南端で、周溝である可能性が疑われた落ち込みが確認された。土師器・須恵器・磁器・鍔金具・角釘・瓦などが出土した。

令和元(2019)年度 第11次調査⁶⁷ 第10次調査において検出した落ち込みの範囲を確認することを目

的として、第1トレンチA11グリッドの南側を東西1.0m、南北0.5m拡張して掘削した。その結果、従来の推定より墳丘規模が大きくなる可能性が浮上した。土師器片1点と土製品1点を採集した。また、周溝の有無、墳裾部の確認を目的として、第5次調査で設定した第Ⅲトレンチを復原して検討した結果、墳裾部とおぼしき落ち込みを検出した。さらに石室側壁の背面構造の把握を目的としてトレンチを西側へ2.0m拡張して掘削した。須恵器片1点を採集した。(原武・種神・服部)

(2) E 6号墳における既往の調査

明治44(1911)年の発掘記録 明治44(1911)年に行われたE 6号墳の発掘記録は、大正12(1923)年に刊行された『南安曇郡誌』に残されている⁶⁶⁾。この発掘では、長径約20.0m、短径約16.6m、高さ約3.6mの古墳であることが判明し⁶⁶⁾、石室内から出土した横瓶1点、蓋杯1点、刀身3点、鉄鍬2点、鉄製袋徳槍身6点が東京帝室博物館に、瑪瑙製勾玉、管玉、水晶切子玉が徳高神社に、鈿、直刀数本、金環、青銅製銅、鈕、須恵器瓶、横口瓶等が満願寺に収蔵された⁷⁰⁾。その後、満願寺所蔵資料は、昭和47(1972)年に開館した徳高郷土資料館にて展示されている。このほかに直刀や馬具等多数出土したが、散逸したという。なお、『南安曇郡誌』には、大正10(1921)年に南安曇郡が郡内所在古墳を長野県へ報告した際の記録がある。これによると、大正10(1921)年時点で西徳高村には21基の古墳が存在しているが、このうち「狐塚」の名を冠するものは、現在のE 6号墳のみである。但し、字及地番の項目でE 6号墳と同様の「牧狐塚」に所在する古墳がこのほかに2基記録されている⁷¹⁾。

長野県による資料収集事業 長野県教育委員会による資料収集事業の一環として、昭和27(1952)年から藤沢宗平らによって古墳の分布調査が行われた⁷²⁾。その成果は、昭和31(1956)年公刊の『信濃史料第一巻』に掲載されている。E 6号墳は、狐塚第1号墳の名称で報告され、径約20.0m、高さ約3.0mの墳丘が「僅かに残る」円墳であり、玉類、金環、直刀、鉄鍬、馬具、須恵器、人骨が出土し、これらの所蔵先は徳高神社と満願寺であるとされた⁷³⁾。但し、人骨については詳細不明である。狐塚第1号墳のほかには、「狐塚」の名を冠する古墳が狐塚第2～5号墳として4基報告されている。このうち、狐塚2号墳は、報告された墳丘規模や出土品などから、昭和26(1951)年に大場啓雄により調査された古墳であると推定される。また、狐塚第4・5号墳は、埋滅した古墳である⁷⁴⁾。

『南安曇郡誌(新版)』編纂事業 『南安曇郡誌(新版)』編纂に際し、郡内古墳の調査が行われた。ここでは、牧地区所在の古墳が西徳高古墳群A群と表記されている。A群8号墳(通称狐塚1号墳)と呼ばれたE 6号墳と、同じく「狐塚」を冠する狐塚2～5号墳が報告された。このうち狐塚2号墳は、昭和26(1951)年に大場啓雄指導のもとで発掘調査が行われており、成果が『南安曇郡誌(新版)』に報告されている。また、狐塚4・5号墳は、狐塚1～3号墳と同番地に所在していたが埋滅したという⁷⁵⁾。

徳高町教育委員会による古墳分布調査 昭和31(1956)年に報告された古墳数が、大正10(1921)年に南安曇郡が長野県へ報告した数を下回ったことを受け⁷⁶⁾、徳高町教育委員会が昭和39(1964)年から五年計画で古墳群の分布確認調査を行うことを決定した⁷⁷⁾。この際、古墳に標柱を建てる事業が実施され、写真も撮影されている⁷⁸⁾。昭和45(1970)年には、調査報告書として『徳高町の古墳』が刊行された。ここでE 6号墳は、E 6号墳(通称狐塚1号墳)の名称で、径約19.0～約20.0m、高さ約3.5m、「石室は石もと

られ、そのあとだけ残り、明治44(1911)年に鳴井氏により発掘されたと報告された。なお、この報告は、『信濃史料』を参考にこれを修正したものである。併せて、E 6号墳のほかに「狐塚」を冠する古墳がE 7号墳(通称狐塚2号墳)、E 8号墳(通称狐塚3号墳)の名称で2基報告されている。E 7号墳(通称狐塚2号墳)は、昭和26(1951)年に大場磐雄の指導のもと発掘された古墳にあたる⁷⁹⁾。

『長野県史』編纂事業 長野県史編纂に際し、長野県教育委員会により古墳群の調査が行われた⁸⁰⁾。調査結果は、昭和56(1981)年発行の『長野県史考古資料編全一巻(一)遺跡地名表』に掲載されている。E 6号墳は、牧E 8号古墳(狐塚4号)とされ、径約15.0m、高さ約3.0mの円墳であり、出土品は穂高神社と東京国立博物館に所蔵されていると報告された⁸¹⁾。なお、本調査では、何らかの略測が行われたらしい⁸²⁾。併せて、E 6号墳のほかに「狐塚」を冠する古墳が牧E 7号墳(狐塚2号)、牧E 6号墳(狐塚3号)、牧E 4号墳(狐塚4号)の名称で3基報告された。この内、牧E 7号墳(狐塚2号)は、報告された墳丘規模や出土品など⁸³⁾から、大場磐雄の指導で調査された古墳であると推定される。

『穂高町の古墳群とその人々』の刊行 穂高町教育委員会が平成元(1989)年に刊行した『穂高町の古墳群とその人々』には、「狐塚」の名を冠する古墳として、E 6号墳(狐塚3号墳)のほか、E 8号墳(狐塚1号墳)、E 7号墳(狐塚2号墳)が記載されている。このうち、E 7号墳(狐塚2号墳)は、大場磐雄の指導で調査された古墳である。また、この付近に2基古墳が所在していたが、現在は埋滅して不明であるという⁸⁴⁾。本書の編纂にあたり、現在の古墳の名称および認識が定着したと思われる。

『穂高町誌』編纂事業 『穂高町誌』編纂に際し、三木弘により、穂高郷土資料館などに断片的に伝えられていた出土資料の調査・整理が行われた⁸⁵⁾。また、平成3(1991)年に刊行された『穂高町誌』では、E 6号墳を狐塚3号古墳(E 6号古墳)の名称で報告し、同じく「狐塚」を冠する狐塚1号古墳(E 8号古墳)、狐塚2号墳(E 7号古墳)を取り上げている。狐塚2号墳は、大場磐雄の指導で調査された古墳とみられる。また、狐塚1～3号墳と同地籍には、狐塚4号・5号古墳も存在していたという⁸⁶⁾。

本学による調査 本学による調査は、平成30(2018)年度の第10次調査より開始し、周辺の踏査により須恵器片を表面採集した。さらに、令和元(2019)年度の第11次調査では、基礎的なデータ収集を目的とした現状確認を行ない、墳丘で須恵器片などを表面採集した⁸⁷⁾。(谷)

第1表「狐塚」の名称変遷

文献名	名称	E 6号墳*	E 7号墳*	E 8号墳*	備考
南安善郡誌(旧)	狐塚				
信濃史料	狐塚第1号墳		狐塚第2号墳	狐塚第3号墳	狐塚4・5号墳は埋滅
南安善郡誌(新)	狐塚1号墳		狐塚2号墳	狐塚3号墳	狐塚4・5号墳は埋滅
穂高町の古墳	狐塚1号墳		狐塚2号墳	狐塚3号墳	
長野県史	狐塚4号		狐塚2号	狐塚3号	
穂高町の古墳群とその人々	狐塚3号墳		狐塚2号墳	狐塚1号墳	埋滅墳2基が狐塚2号墳付近に存在
穂高町誌	狐塚3号墳		狐塚2号墳	狐塚1号墳	狐塚4・5号古墳(埋滅)が同地籍に存在

*名称は『穂高町誌』による。

(3) 調査日誌

i) 事前測量調査

7月17日(土)：晴 今年度は、新たに国営アルプスあづみの公園内のE6号墳を発掘調査する計画であるため、本調査に先立って墳丘測量図を調整する必要性に迫られた。そこで、三次元レーザースキャナー(FARO社製Focus 3D X 130 HDR)を用いて、周辺地形も含めた図面を製作することとした。当日は、朝6時に大学を公用車にて出発し、現着10時。まずは、測量の基準となる既知点の検索を行った。午後から、E6号墳周辺の三次元測量を開始。大町市の大日方邸泊。

7月18日(日)：晴 午前は、引き続きE6号墳周辺の三次元測量を行った。午後は、北西側公園外の部分の測量も実施。16時に調査を終了して撤収。なお、一部機材は大日方邸に残留した。

ii) 調査準備

8月4日(水)：晴 教員・TAは、先遣隊として現地入り。松本にてレンタカー2台を借用し、一路安曇野へ向かった。深澤・篠田が安曇野市文化財資料センター、大日方・樋口が大日方邸に保管している機材を分担して回収し、宿舍となるエソール安曇野へ搬入。

8月5日(木)：晴 先遣隊は、朝から現地に機材を搬入し、調査地の除草作業を開始。また、畑の耕作に伴ってF9号墳の墳丘北東斜面に寄せられていたと思われる多量の礫を重機にて除去した。この間、古墳王子の来跡あり。一方、実習生をはじめとする本隊は、朝9時に大学へ集合し、PCR検査の陰性を確認した上でバスに乗車。一路安曇野へ向かい、13時半に公園へ到着した後、15時頃まで現地・宿舍への荷物搬入と、「あづみの学校」における展示設営を分担し、17時まで除草作業を行った。なお、墳丘の北東隅を確認するために設ける予定であった第Vトレンチは、盛土の残存状況が不良であると推測されたため、設定を断念した。

iii) F9号墳の調査

8月6日(金)：晴 F9号墳では、三次元レーザースキャナー(FARO社製Focus 3D X 130 HDR)による三次元計測を実施。実習生は、公園の屋内施設「あづみの学校」における「穂高古墳群F9号墳-考古学実習展-」と、E6号墳の見学を行った。その後、第I・Ⅲ・Ⅳトレンチの作業前写真を撮影し、午後から調査区の復原作業を開始した。

8月7日(土)：晴/雨 前日に引き続き、写真撮影作業と並行して調査区の復原作業を行った。第Iトレンチでは、閉塞石の手前まで確認したため掘り下げを停止。第Ⅲトレンチでは、石室の表込め石までを確認した。第Ⅳトレンチでは、引き続き復原作業を行った。

8月8日(日)：晴/雨 第Iトレンチでは、玄室南端を確認したため、トレンチ壁面の清掃を開始した。第Ⅲトレンチでは、調査区の復原を終了したため、写真撮影と土層確認のための清掃作業を行った。第Ⅳトレンチでは、南側拡張区を除いた調査区の復原が終了。清掃を進めながら、2015年度の第7次調査にて周溝埋土である可能性が指摘された「3層」相当の土層を確認した。午後は、豪雨のため作業を中断。

8月9日(月)：雨 雨天により、現地での作業が不可能となったため、深澤・大日方引率による穂高郷土資料館・豊科郷土博物館の見学と、TAの篠田浩輔による三次元計測の講習を、午前・午後の交代

制で実施した。徳高郷土資料館では、徳高古墳群の概要を把握。豊科郷土博物館では、原明芳館長の解説を頂き、安曇野地域の民俗文化について学ぶことができた。また、三次元計測の講習においては、基礎的な三次元計測の方法や、ソフトウェアの操作について学習した。午後は、各トレンチの排水作業を実施。夜は、12日に開催する現地説明会の打ち合わせを行った。

8月10日(火)：晴/時々雨 第Ⅰトレンチでは、サブトレンチの復原作業を行い、A8～A11グリッドにかけて自然堆積層(Ⅰ・Ⅱ層)の検出を目標として掘り下げた。その際、A8グリッドの自然堆積層上に、礫の混入が少ない黒色土層を検出。第Ⅲトレンチの東端では、東西1.0m・南北0.5mの拡張区を掘削していたところ、突如砂礫の混入が著しく乏しい黒色土が検出されたため、トレンチを更に東西0.5m・南北0.5m延長し、その実態を追及した。第Ⅳトレンチは、南側サブトレンチの復原に加え、南北1.0m・幅0.5mの北側拡張区を掘削したが、表土下約0.5mで自然堆積層に達した。

8月11日(水)：晴/曇 第Ⅰトレンチでは、午前中にA8～A11グリッドの清掃と、A12グリッドの自然堆積層までの掘り下げを行った。正午過ぎに、分層前の写真撮影とSfM/MVS(以下、SfMと略称)用の撮影を実施。午後からは、分層作業を開始。第Ⅲトレンチでは、清掃作業の後、分層前の写真撮影を行った。夜は、安曇野入りした國學院大学博物館のスタッフを交え、宿舎の研修棟にて今年度の調査成果を確認し、翌日のオンライン現地説明会に備えた。

8月12日(木)：曇/雨 午前中は、第Ⅰ・Ⅱトレンチにて、SfM用の撮影、写真撮影、土層断面の実測を行った。また、オンラインによる現地説明会のリハーサルを実施。13時からライブ配信を開始した。博物館の撮影スタッフは、MC佐々木、撮影尾上、音響及川。出演は、総合解説深澤、パターン小崎、F9号墳第Ⅰトレンチ解説神澤、第Ⅲトレンチ解説高山、第Ⅳトレンチ解説水津、F9号墳総括平井、E6号墳第Ⅰトレンチ解説久光、E6号墳総括樋口、コメント篠田・小池・服部、総括水谷の分担による。動画配信後は、調査区の埋め戻しを再開。また、翌13日まで予定していた「あづみの学校」における展示は、長野県による「新型コロナウイルス特別警報Ⅱ」の発出により、本日を以て終了することとなった。

8月13日(金)：雨 午前は、土砂降りの中、第Ⅰ・Ⅲトレンチの埋め戻しを行った。午後は、第Ⅳトレンチの埋め戻しと、機材等の清掃・整理・点検を実施した。

iv) E6号墳の調査

8月6日(金)：晴 墳丘近辺の清掃を行い、E6号墳の全景を撮影した。新規に調査区を設定するため、石室の軸上と思しき箇所には杭を打つ。午後は、墳丘北東に8.0m、南東に1.0mのトレンチを設定し、改めて写真撮影をした後に掘削を開始。まず、M17～N17グリッドにかけて掘削したところ、早くも一面黄褐色の土層が確認された。この土層の性格を明らかにするため、トレンチ北半に幅0.5mのサブトレンチを設定した。

8月7日(土)：晴/雨 午前中は、表土層全体の剥ぎ取りを行い、K17～L17グリッド付近において幅約1.8mの黒色土層を確認した。墳丘の周縁に沿って広がることから、周溝埋土、あるいは墳裾への流れ込み土ではないかと推測された。トレンチ西端付近より、須恵器が出土した。サブトレンチの掘削も続行し、50.0cm程の掘り下げでも土層の色調に変化がないことを確認した。午後は、SfMによる三次元化のための全景撮影を行った。剥片2点、土師器片1点、須恵器片3点、近世遺物(煙管の雁首)1点の計7

点の遺物を確認した。降雨のため、調査区にシートをかぶせて作業を終了した。

8月8日(日)：晴/雨 午前中は、トレンチの清掃を行い、前日の遺物出土状況を確認・記録するための写真撮影を実施した。J17~K17グリッドの黒色土層を掘り進めたところ、須恵器片3点が出土した。午後は、断続的な豪雨に見舞われたため、早々に作業を打ち切って宿舎に撤収した。

8月9日(月)：雨 雨天のため、博物館見学と三次元計測の講習を行った。午前中は、徳高郷土資料館・豊科郷土博物館を見学。三次元計測講習では、基礎的な計測方法について学習した。15時より雨が弱まったため、調査区の水抜き作業と、ブルーシートの張り直し、テントの設営を行った。

8月10日(火)：晴/時々雨 G17~K17グリッドにかけて、サブトレンチの掘削を進めたところ、土師器片2点、須恵器片18点の計20点が出土した。午後、掘削作業終了後、トレンチ全景を撮影。

8月11日(水)：晴/曇 遺物の出土状況の撮影を行った後、自然堆積層の精査を目的としてサブトレンチを掘削。その結果、I17グリッド~K17グリッドの表土下に黒色土層の堆積を確認した。特に、I17グリッド付近では、地山と黒色土層の立ち上がりが見られ、径約40cmの礫1点を検出した。また、黒色土の直下には、暗褐色土を確認した。

8月12日(木)：曇/雨 午前中は、遺物出土状況記録のため、トレンチ近辺を清掃し、SiM用写真の撮影を行った。また、現地説明会のリハーサルを実施。13時より現地説明会が始まり、E6号墳についての調査成果を発表した。その後、遺物の出土位置をトータルステーションで測定し、取り上げを行った。遺物を取り上げた場所から、自然堆積層まで掘り下げを行った際、須恵器の杯身が出土した。その後、分層をした上で、SiMによる三次元化のため、写真撮影を行った。

8月13日(金)：雨 前日に出土した杯身は、トータルステーションにて出土位置を記録して取り上げ。その後、埋め戻し作業を行った。雨天のため、ぬかるみの中での作業であったが、トレンチを土藁で塞ぎ、シートを被せて土を掛け、埋め戻しを完了した。また、残っていたテントや機材も片付け、現場を引き上げた。

v) 撤収・帰京

8月14日(土)：雨 午前中に、トラックで大学へ送り返す機材等の搬送を手配した。宿舎を清掃後、研修棟にて集合写真を撮影。この間、荒天により交通機関が麻痺しつつあるとの報があった。そのため、本隊のバスは、12時公園発予定を11時30分発に変更して16時帰京。國學院大学にて解散した。教員・TAは、本隊を見送った後、松本にてレンタカーを返却したものの、既に全ての公共交通機関がストップしていたことから、改めてレンタカーを借用し、大学を経て渋谷にて返却。辛くも、14日中に参加者全員が帰京できた。(松水・今関・深澤)



5月18日 現地協議 (F9号墳)



7月17日 事前測量調査 (E6号墳)



8月5日 古墳王子来跡 (F9号墳)



8月5日 実習生現地到着



8月5日 墳丘北東斜面の礫除去 (F9号墳)



8月7日 第Ⅲトレンチ復元 (F9号墳)



8月7日 宿舍



8月8日 第Ⅳトレンチ復元 (F9号墳)



8月8日 トレンチ掘削 (E6号墳)



8月9日 過年度調査成果公開展示 (あつみの学校)



8月10日 現場ミーティング(F9号墳)



8月10日 遺物検出(E6号墳)



8月11日 測量作業



8月11日 第Iトレンチ壁面清掃(F9号墳)



8月12日 第IIIトレンチ土層検討(F9号墳)



8月12日 現地説明会中継



8月13日 遺物取り上げ(E6号墳)



8月13日 トレンチ埋め戻し(E6号墳)



8月13日 第IIIトレンチ埋め戻し(F9号墳)



8月13日 埋め戻し後の泥落とし

註

- 1) 栗山一夫1934「播磨加古川流域に築造されたる古墳および遺物調査報告」『人類学雑誌』49-7-8、東京人類学会。栗山一夫1935「播磨加古川流域に築造されたる古墳および遺物調査報告」『人類学雑誌』50-1-3、東京人類学会。藤森栄一1939「考古学上よりしたる古墳墓立地の観方」『考古学』第10巻第1号、東京考古学会。
- 2) 近藤義郎編1952「佐良山古墳群の研究」、津山市教育委員会。
- 3) 石部正志1980「群集墳の発生と古墳文化の変質」『東アジアにおける日本古代史講座』第4巻、学生社。
- 4) 和田晴吾1992「群集墳と終末期古墳」『古代の日本』第5巻、角川書店。
- 5) 前掲註2)近藤1952。
- 6) 西嶋定生1961「古墳と大和王権」『岡山史学』第10号、岡山史学会。
- 7) 水野正好1970「群集墳と古墳の終焉」『古代の日本』第4巻、角川書店。
- 8) 郡山比呂志1970「横穴式石室と群集墳の発生」『古代の日本』第5巻、角川書店。
- 9) 山中敏史1986「律令国家の成立」『岩波講座日本考古学』第6巻、岩波書店。
- 10) 鈴木一有2001「東海地方における後期古墳の特質」『東海の後期古墳を考える』第8回東海考古学フォーラム三河大会、東海考古学フォーラム三河大会実行委員会・三河古墳研究会。
- 11) 白井久美子2007「関東の後・終末期古墳群の特性」『関東の後期古墳群』考古学リーダー-12、六一書房。
- 12) 河村好光1980「後期古墳の編成秩序とその展開」『考古学研究』第27巻第1号、考古学研究会。
- 13) 太田博之2007「北武蔵における後期古墳の動向」『関東の後期古墳群』考古学リーダー-12、六一書房。
- 14) 鈴木一有2010「駿河東部における無袖石室の史的意義」『東日本の無袖横穴式石室』、雄山閣。
- 15) 丸山竜平2004「古墳時代後期群集墳論 志賀郡北部の階層性」『名古屋女子大学紀要 人文・社会編』第50巻、名古屋女子大学。
- 16) 太田宏明2015「古墳時代における親族的継帯関係と集団組織原理」『日本考古学』第39号、日本考古学協会。
- 17) 三木弘1991「有明古墳群の再検討(1)」『信濃』第43巻第12号、信濃史学会。三木弘2006「有明古墳群の再検討(2)」『長野県考古学会誌』118号、長野県考古学。
- 18) 風間栄一2001「信濃善光寺平における後期古墳の様相」『東海の後期古墳を考える』第8回東海考古学三河大会、東海考古学フォーラム三河大会実行委員会・三河古墳研究会。土生田純之編2010「東日本の無袖横穴式石室」、雄山閣。
- 19) 佐々木壺一編2007「関東の後期古墳群」考古学リーダー-12、六一書房。
- 20) 廣野秀雄1890「信濃原有明村ノ古墳」『東京人類学会雑誌』第5巻52號、東京人類学会。
- 21) 増田謙吾1901「信濃國有明村古墳所在地管見録」『東京人類学会雑誌』第16巻第181号、東京人類学会。
- 22) 宮坂光次1922「信州南安曇郡有明村ドルメン類似の古墳に就いて」『人類学雑誌』第37巻第9号、東京人類学会。鳥居龍藏1925「豊科町より」『有史以前の跡を訪尋ねて』、雄山閣。
- 23) 太田伯一郎1923「第三章第三節遺跡(古墳)」『南安曇郡誌』(旧版)、南安曇郡教育會。
- 24) 唐澤貞治郎・岩崎長思1923「南安曇郡魏城城窟」『長野県史蹟名勝天然記念物調査報告』第1輯、長野県・長野県教育委員会。唐澤貞治郎1925「ちいが塚」『陵塚』『長野県史蹟名勝天然記念物調査報告』第3輯、長野県・長野県教育委員会。今井眞樹1933「穂高町上原の竪穴式石室墓古墳」『史蹟名勝天然記念物調査報告書』第14輯、長野県・長野県教育委員会。
- 25) 信濃史料刊行会編1956『信濃史料』第1巻上、信濃史料刊行会。
- 26) 穂高町教育委員会編1970『穂高町の古墳』、樺沢書苑。
- 27) 長野県教育委員会編1968『昭和42年度国鉄復線化等開発地域内埋蔵文化財緊急分布調査報告書』、長野県教育委

- 員会。
- 28) 前掲註26) 徳高町教育委員会編1970。
- 29) 河西清光・松尾昌彦1983『徳高古墳群』〔長野県史』考古資料編(3)、長野県史刊行会。
- 30) 榎原健1991『第二章第三節 古墳時代』〔徳高町誌』第2巻歴史編上・民俗編、徳高町誌刊行会。
- 31) 藤沢宗平1968『第四章 古墳文化とそれ以降の文化』〔南安曇郡誌』第2巻上、南安曇郡誌改訂編纂会。
- 32) 岩崎卓也・松尾昌彦・松村公仁1983『有明古墳群の再調査』〔信濃』第35巻第11号、信濃史学会。
- 33) 徳高町・徳高町教育委員会編1989『徳高町の古墳とその人々』、徳高町・徳高町教育委員会。
- 34) 前掲註17) 三木1991・2006。三木弘2011『古墳社会と地域経営』、学生社。
- 35) 吉田恵二・中村耕作編2010『長野県安曇野市徳高古墳群2009年度測量調査・現状確認調査報告書』國學院大學文学部考古学実習報告第44集、國學院大學文学部考古学研究室。本書第Ⅱ章-4。
- 36) 前掲註23) 太田1923。
- 37) 横田文紀1931『南安曇郡徳高町上原区古墳発掘に就て』〔信濃考古学会誌』第2年第5・6輯、信濃考古学会。
- 38) 前掲註31) 藤沢1968。
- 39) 中島豊晴1976『徳高町塚原F1号墳調査概報』〔長野県考古学会誌』第25号、長野県考古学会。
- 40) 三木弘1990『魏石鬼窟古墳を利用した修験道』〔徳高町郷土資料館』第12号、徳高町郷土資料館。
- 41) 徳高町教育委員会編2001『一本松・神の木・宗徳寺・南原遺跡 徳高沢水系による開発史、上原古墳』徳高町教育委員会。
- 42) 山下泰永・土屋和章編2015『徳高古墳群G1号墳(上原古墳)第3次・第4次発掘調査』安曇野市の埋蔵文化財第8集、安曇野市教育委員会。
- 43) 本書。
- 44) 前掲註32) 岩崎・松尾・松村1983。
- 45) 前掲註17) 三木1991。
- 46) 前掲註32) 岩崎・松尾・松村1983。
- 47) 前掲註30) 榎原1991。
- 48) 前掲註17) 三木2006。
- 49) 前掲註17) 三木1991。前掲註34) 三木2011。
- 50) 深澤太郎編2017『長野県安曇野市徳高古墳群2015年度F9号墳発掘調査報告書』國學院大學文学部考古学実習報告第54集、國學院大學文学部考古学研究室。
- 51) 前掲註32) 岩崎・松尾・松村1983。
- 52) 前掲註17) 三木1991。前掲註34) 三木2011。
- 53) 前掲註30) 榎原1991。
- 54) 前掲註34) 三木2011。
- 55) 前掲註30) 榎原1991。榎原健2016『徳高古墳群と猪鹿の牧』〔信濃』第68巻7号、信濃史学会。
- 56) 前掲註17) 三木1991。前掲註34) 三木2011。
- 57) 前掲註35) 『報告2009』。
- 58) 吉田恵二・中村耕作編2011『長野県安曇野市徳高古墳群2010年度発掘調査報告書』國學院大學文学部考古学実習報告第45集、國學院大學文学部考古学研究室。
- 59) 吉田恵二・中村耕作編2012『長野県安曇野市徳高古墳群2011年度発掘調査報告書』國學院大學文学部考古学実習報告第46集、國學院大學文学部考古学研究室。
- 60) 吉田恵二・中村耕作・深澤太郎編2013『長野県安曇野市徳高古墳群2012年度発掘調査報告書』國學院大學文学部考古学実習報告第48集、國學院大學文学部考古学研究室。
- 61) 吉田恵二・中村耕作・深澤太郎編2014『長野県安曇野市徳高古墳群2013年度発掘調査報告書』國學院大學文学部考古学実習報告第50集、國學院大學文学部考古学研究室。
- 62) 吉田恵二・深澤太郎・朝倉一貴編2016『長野県安曇野市徳高古墳群2014年度発掘調査報告書』國學院大學文学部考古学実習報告第52集、國學院大學文学部考古学研究室。
- 63) 前掲註50) 『報告2015』。
- 64) 青木敬・朝倉一貴編2019『長野県安曇野市徳高古墳群2016・2017年度F9号墳発掘調査報告書』國學院大學文学部考古学実習報告第55集、國學院大學考古学研究室。

- 室。
- 65)前掲註64)【報告2016・2017】。
- 66)青木敬・大日方一郎編2021『長野県安曇野市穂高古墳群
2018・2019年度F9号墳発掘調査報告書』國學院大學
文学部考古学実習報告第57集、國學院大學考古学研究
室。
- 67)前掲註66)【報告2018・2019】。
- 68)前掲註23)太田1923。
- 69)前掲註30)桐原1991。
- 70)前掲註17)三木1991。前掲註23)太田1923。前掲註26)穂高
町教育委員会編1970。)前掲註30)桐原1991。前掲註33)
穂高町・穂高町教育委員会編1989。前掲註34)三木2011。
東京国立博物館編1956『東京国立博物館収藏品目録：
考古・土俗・法隆寺献納宝物』、東京国立博物館。長野
県1981「Ⅲ中信地区 南安曇郡 穂高町」『長野県史考
古資料編全一卷(一)遺跡地名表』、長野県史刊行会。
- 71)前掲註23)太田1923。
- 72)前掲註31)藤沢1968。
- 73)前掲註25)信濃史料刊行会編1956。
- 74)前掲註25)信濃史料刊行会編1956。
- 75)前掲註31)藤沢1968。
- 76)前掲註30)桐原1991。
- 77)前掲註26)穂高町教育委員会編1970。前掲註33)穂高町・
穂高町教育委員会編1989。
- 78)前掲註30)桐原1991。前掲註26)穂高町教育委員会編
1970。
- 79)前掲註26)穂高町教育委員会編1970。
- 80)前掲註30)桐原1991。
- 81)前掲註70)長野県1981
- 82)前掲註70)長野県1981。
- 83)前掲註70)長野県1981。
- 84)前掲註33)穂高町・穂高町教育委員会編1989。
- 85)前掲註17)三木1991。前掲註34)三木2011。
- 86)前掲註30)桐原1991。
- 87)前掲註66)【報告2018・2019】。

第Ⅱ章 周辺の環境

1 安曇野の自然環境

多様な姿を見せる大地の中で、遺跡が特定の地点を選んで占地している理由を明らかにしたり、遺構の形成過程を復元したりするためには、当該遺跡を取り巻く自然環境を理解しておくことが欠かせない。そこで本節においては、穂高古墳群が営まれた安曇野周辺の地形・地質や、生物相等について概観する¹⁾。なお、地質年代の年代値については、国際地質科学連合の国際層序委員会が公開している国際年代層序表に従う。

(1) 安曇野の地形と生物相

安曇野の位置と気候 いわゆる「安曇野」が位置する長野県は、南北約212km・東西約120km・総面積約13,562km²の規模を誇るが、その大半を山地が占めている。また、主要河川の流域には、中信地域の松本平(松本盆地)、南信地域の伊那谷(伊那盆地)、東信地域の佐久平(佐久盆地)、

北信地域の善光寺平(長野盆地)といった盆地が存在する。但し、松本盆地に相当する広義の「松本平」の中には、狭義の松本平にあたる梓川以南の「筑摩野」と、梓川以北の「安曇野(安曇野)」が含まれ、前者が旧筑摩郡域、後者の大方が旧安曇郡域に属した。

この安曇野は、「西山」と呼ばれる飛騨山脈(北アルプス)の山麓線を西縁とし、そこから流れ出した乳川・芦川・中房川・鳥川・梓川などが形成した複合扇状地に相当する。具体的には、大町市の高瀬川右岸から、北安曇郡松川村・池田町、安曇野市、そして梓川左岸の松本市梓川地区(旧南安曇郡梓川村)を概ねの範囲とし、「東山」と呼ばれる筑摩山地が東の境となる。

なお、松本平では、内陸性気候の特徴が見られ、最高気温と最低気温の日較差・年較差が大きい。夏季は、日中に比べて、夜間や朝方の気温が低く、降水量も少ないため、比較的過ごしやすい日が続く。一方、冬季は、飛騨山脈が雪を阻むものの、山地から吹き降ろす寒風のため、氷点下を下回る日も多い。

松本平の形成 松本平、すなわち松本盆地は、大町市から塩尻市に至る南北約50km・東西約10km・面積約480km²の盆地であり、西に連なる標高3,000m級の飛騨山脈と、東の筑摩山地が隆起することによって相対的に陥没した山間盆地でもある。中央には、フォッサマグナ(中央地溝帯)の西縁にあたる糸魚川-



第2図 長野県 山岳・河川

静岡構造線が縦貫し、標高約520mの安曇野市明科周辺を底にした楕円状の地形をなす。

かかる地形の形成には、ユーラシアプレート・北アメリカプレート・フィリピン海プレートの境界に位置するフォッサマグナが深く関係していた。後に日本列島となる陸地は、新生代古第三紀(約6,600万年前～約2,300万年前)までアジア大陸の一部をなしていたが、新第三紀(約2,300万年前～約258万年前)になると、日本海の形成とともに西南日本と東北日本が分裂する。そこに生じた大きな溝がフォッサマグナであり、この溝に流れ込んだ海の底には、次第に砂泥などが堆積していった。

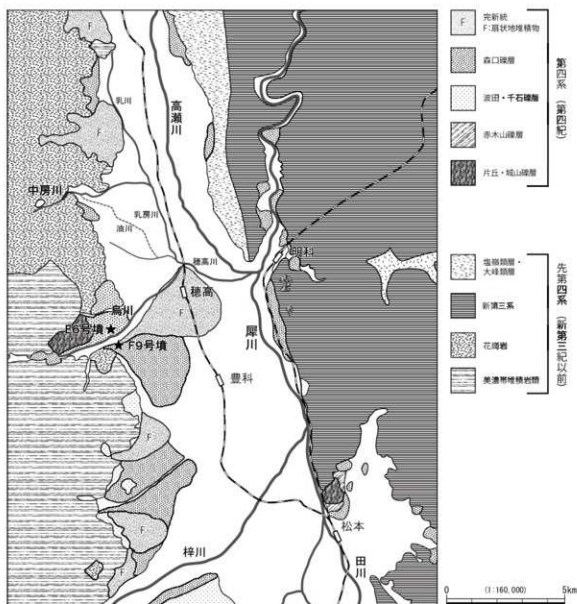
また、第四紀前期更新世(約258万年前～約77万4,000年前)になると広域隆起が進み、フォッサマグナに準平原が出現する。第四紀中期更新世(約77万4,000年前～約12万9,000年前)以降になると、その準平原が糸魚川-静岡構造線に沿って地溝状に陥没したところへ、飛騨山脈や筑摩山地から運ばれてきた砂礫が堆積し、更に完新世(約11,700年前～)の複合扇状地や氾濫原が形成された。

地質の特徴 このように松本平の地形形成が進んだ結果、糸魚川-静岡構造線を境として、西部の険峻な飛騨山脈側と、東部のなだらかな筑摩山地側では、基盤層となる地質の特徴に大きな差異が生じた。西部は、古生代石炭紀から中生代ジュラ紀(約3億5,900万年前～約1億4,500万年前)にかけて海底に堆積・噴出した堆積岩・火山岩からなる美濃帯の堆積岩類と、新生代古第三紀(約6,600万年前～約2,300万年前)に貫入してできた花崗岩類等からなる。一方、東部は、新生代新第三紀(約2,300万年前～約258万年前)にフォッサマグナの海へ堆積した礫岩・砂岩・泥岩類等によって形成されている。

その後、新生代第四紀中期更新世(約77万4,000年前～約12万9,000万年前)に陥没した松本平では、中期更新世初期の梨ノ木礫層、中期更新世中期の片丘礫層・城山礫層、後期更新世初期の赤木山礫層、後期更新世中期の波田礫層・千石礫層、後期更新世後期の森口礫層が積み、そこに完新世の低位段丘堆積物・扇状地堆積物・氾濫原堆積物や、現河床面堆積物などが広がっていく。これらの地層は、地点によって層相が大きく異なってくるが、徳高古墳群のF群が位置する鳥川流域では、黒雲母花崗岩などからなる有明花崗岩、花崗岩礫が多い淘汰不良の亜角-亜円礫層である片丘礫層、花崗岩・砂岩・泥岩の巨礫・大礫による角-亜角礫層である赤木山礫層、円磨された中礫や大礫が多い波田礫層、美濃帯堆積岩類や花崗岩を主とする中礫の円-亜円礫層である森口礫層、美濃帯砂岩や花崗岩からなる段丘堆積物、そして礫・砂・シルトの氾濫原堆積物が認められる。

山地と動植物 安曇野の西縁は、飛騨山脈の前山にあたる常念山脈に画されている。この常念山脈は、北から唐沢岳(標高2,633m)・燕岳(標高2,763m)・有明山(標高2,268m)・大天井岳(標高2,922m)・常念岳(標高2,857m)・蝶ヶ岳(標高2,677m)・霞沢岳(標高2,646m)などの標高3,000m近い山々からなり、最高峰の大天井岳から、安曇野市明科中川手附近の盆地底に至る標高差が約2,400mに及ぶ。かかる標高差は、直線距離で東西20kmほどの狭い地域に、著しい気候差・植生差をもたらした。

その内、森林限界を越えた標高2,500m以上の高山帯は、常緑針葉樹の低木であるハイマツや、落葉低木のミヤマハシノキ、コマクサなどの群落といった高山植物の自然植生が見られるハイマツ帯であり、留鳥のライチョウ、高山蝶のタカネヒカゲなども生息する。標高1,500m～2,500mの亜高山帯は、常緑針葉樹のシラビソ・コマツガや、落葉広葉樹であるダケカンバ等の自然植生によるシラビソ帯であり、メボソムシクイやホシガラスなどの鳥類が見られる。標高1,500m以下の山地帯は、多くが人の手による代償植生となっており、ニホンカモシカ・ツキノワグマ・ニホンザル・ニホンノウサギなどが出没する。



第3図 調査地周辺地質図(註1)松本盆地団体研究グループ1977・塚原編2002を改変)

河川と動物 槍ヶ岳から北回りで南流する高瀬川や、燕岳からの中房川が、常念岳・榎ヶ岳からの烏川と合流した穂高川などは、槍ヶ岳から南回りで北流する梓川、すなわち奈良井川と合流して名を変えた犀川と明科の押野崎で1つになる。このように、松本平の河川を集めた犀川は、筑摩山地を嵌入蛇行しつつ善光寺平まで北上して千曲川と合流し、新潟県境から信濃川と名を変えて日本海に注ぐ。

これらの河川には、春に産卵期を迎えるカジカ、初夏に集団で産卵するウグイのほか、水の冷たい溪流に生息するイワナなどがみられる。昭和初期までは、信濃川河口から290kmほど上流の安曇野にも、サケ・マス・ウナギ・アユが遡上していたが、水力発電所の建設が進んだ結果、河川の生態系に大きな影響が及んだ。

扇状地と水田開発 また、先述した通り、飛騨山脈を源とする中房川・烏川や、黒沢川などは、山を

削り渓谷を形成した先へ砂礫を運び扇状地を形成した。扇頂部に顔を出した河川は、地下に浸透して伏流水となる。従って、扇尖部では、大雨や雪解けによる水量の増加が無い限り、いわゆる水無川となる場合が多い。そのため、安曇野では、地元で「堰」と呼んでいる用水路を、平安時代から開削してきたという。しかし、堰の本格的な整備が進められたのは、江戸時代以降のことであり、一般的な縦堰と、等高線に沿って設けた横堰を張り巡らせることによって、不毛の扇状地が広大な水田地帯に変貌を遂げた。このような水田では、コイを放流して除草や害虫駆除に利用する田鯉農法がおこなわれている。

一方、扇端部では、伏流水となっていた河川が湧水となり、豊かな水をもたらしている。安曇野では、このような湧水のことを「花見」と呼んできた。その代表例が、周囲から万の川を集めて流れる万水川であり、環境省による名水百選「安曇野わさび田湧水群」にも選定されている。（森田）

（2）中房川・烏川と扇状地

穂高古墳群は、北の中房川と、南の烏川に挟まれた地域を中心に占地している（第3・7図）。この2つの河川が形成する扇状地が、穂高における沖積地のほぼ全域を占めている。

中房川扇状地 中房川は、東沢乗越に源を発し、乳川と合流して乳房川となるまでの全長が約16km、山地内の流域面積が約57km²の河川である。この川が形成した約23kmの扇状地は、扇頂が標高約750mの宮城にあたり、扇端が乳房川の右岸に及ぶ。

中房川では、上流に基盤岩である花崗岩が露出する渓谷が形成され、扇頂部に近い矢村・宮城付近にて、径約50mを超える花崗岩の押し出しが認められる。また、扇尖部には、長径約5cm～約30cmの花崗岩礫と粗粒砂がみられる。そして、扇端部に近い乳房川沿いの耳塚地区では、中粒から細粒の砂層を主として間にシルト層を挟み、ときに細礫を混入する地層となる。このように、堆積物の粒度に大きな差異が生じているのは、中房川扇状地が風化しやすい有明花崗岩を基盤としているためである。

ちなみに、中房川に由来する花崗岩の巨礫は、古くから石材として利用されてきた。大正から昭和の初期にかけては、中房川で採集されたり、扇状地内から掘り出されたりした花崗岩礫が、石碑・土台石・門柱・鳥居等の石材として各地に出荷されていたという²⁾。

烏川扇状地 烏川は、蝶ヶ岳から直線状に東流し、穂高川に合流するまでの全長が約16km、山地内の流域面積が約69km²の河川である。この川が形成する約30kmの扇状地は、扇頂が標高約700mの須砂渡にあたり、扇端が穂高中心地の東側まで及ぶ³⁾。

このような烏川では、上流にV字谷が形成されており、中流まで渓流をなしているが、上原の北方を過ぎると粗粒物質からなる烏川扇状地に吸収されて水量が激減する。河床は、美濃帯の珪質泥岩・チャート・砂岩などが占め、全体的に黒っぽい岩石が多いが、上流域には花崗岩礫も多数みられる。扇尖に位置する富田の南方では、現河床のものほとんど同類の礫が地表から約15mにわたって堆積している。

なお、烏川流域の河岸段丘は、概ね5面に区分されている。その内、穂高古墳群のE群が所在する牧周辺は、離山面と呼ばれる第3段丘面にあたり、立山火山に由来するEPm以上のテフラが段丘層を覆っていた。また、同F群が所在する塚原周辺には、粗砂を主体とした亜円礫層からなる第5段丘面が広がっている。（森田・深澤）

2 安曇野の歴史環境

長野県の中央に位置する安曇野市は、平成17(2005)年に5町村が合併して成立した。その内、旧南安曇郡徳高町・堀金村・三郷村、ならびに豊科町が、「西山」と呼ばれる飛騨山脈の東麓に広がる扇状地と、犀川西岸の沖積地に当たる。また、旧豊科町の一部と旧東筑摩郡明科町が、犀川東岸から「東山」と呼ばれる筑摩山地の西麓に位置する。このような市域の大半を山地が占めているものの、河川流域の河岸段丘上や、扇状地の扇端などに多数の遺跡が営まれており、縄文時代早期以降に属する周知の埋蔵文化財包蔵地が、これまでに400箇所ほど確認されてきた⁴⁾。本節では、必要に応じて松本平全域の様相に目を配りつつ、安曇野市域の旧石器時代から歴史時代にかけての概要を瞥見し、穂高古墳群の形成前後における歴史的変遷を把握する。

(1) 旧石器時代

今のところ、松本平における旧石器時代遺跡の確認例は、盆地南部の田川流域を中心とした塩尻市域に集中している。安曇野市内では、三郷の東小倉遺跡 [3-6] にて有舌尖頭器が採集されており、旧石器時代に遡る遺跡が黒沢川流域に存在する可能性も指摘された⁵⁾。なお、明科の吐中遺跡 [5-422] にて、昭和31(1956)年にオオツノシカの化石が発見されたとの記録もあるという⁶⁾。しかし、この時期の実態については、明確な事例が乏しく、詳細を窺い知り得ない憾みがある。 (原武・前田◎)

(2) 縄文時代

安曇野市域の縄文時代遺跡は、中期の事例を主体としつつ、早期から晩期にかけての事例が見られ、多くが西山東麓に広がる複合扇状地の扇頂附近や、明科における犀川流域の河岸段丘上に営まれた。

穂高地域では⁷⁾、離山遺跡 [2-19]・新林遺跡 [2-25] 等にて、僅かながら早期から前期の土器が報告されている。中期に入ると、多数の堅穴建物跡が確認された他谷遺跡 [2-27] をはじめ、徐々に遺跡数が増し、中期後葉にそのピークを迎えた。後期以降に遺跡数も大きく減少するが、山崎遺跡 [2-16]・草深遺跡 [2-17]・神谷遺跡 [2-24]・新林遺跡 [2-25] では、後期に属する土器の出土が報告された。また、離山遺跡 [2-19] では、大配石遺構が確認されており、後期・晩期の土器も多数出土している。堀金地域では⁸⁾、神沢遺跡の北側に位置する上手林遺跡 [4-8]・石見堂遺跡 [4-9] にて早期の押型文土器、石見堂遺跡などにて前期の土器が出土し、西山の山腹にあたる東峠でも同時期の遺物が採集されている。中期になると、そり表遺跡 [4-19]・なかじま遺跡 [4-20]・巾上遺跡 [4-4] など、西山山麓に多数の遺跡が出現した。後・晩期の遺跡としては、神沢遺跡 [4-15] をはじめ、石剣がまとまって出土した山の神下遺跡 [4-6] が知られる。三郷地域では、早期の押型文土器片が出土した黒沢川右岸遺跡 [3-8]・稲荷西遺跡 [3-12] がある。また、前期の北小倉オの神遺跡では、有尾式、北白川下層式土器も出土

している。中期の遺跡としては、長者屋敷遺跡 [3-47]・南松原遺跡 [3-10]・東小倉遺跡 [3-6] の規模が大きい。

一方、東山に沿った明科地域では、北村遺跡にて中期を中心とする集落跡が確認されたほか、470近い後期の土壊墓や、300体以上のほろ人骨が見つかった⁹¹⁾。また、晩期末から弥生時代初期の土器がみられたみどりヶ丘遺跡 [5-209] や、水式土器が出土した荒井遺跡 [5-206] が存在する⁹⁰⁾。(原武・前田⁹⁾)

(3) 弥生時代

安曇野市域の弥生時代遺跡は、中期以降に集落遺跡が増加する傾向にある。集落遺跡の立地は、地域によって差がみられ、穂高地域では扇尖から扇端にかけて分布するのに対して、堀金・三郷・豊科・明科地域では主として山麓に営まれた。

穂高の芝宮南遺跡 [2-40] では、堅穴建物跡等の遺構や、中期前半を主体とする土器が出土した。ほとんどの土器が細片であり、明科のみどりヶ丘遺跡 [5-209] の事例と類似することから、当該期の遺跡に共通する出土状況とも考えられている。一方で、石器の器種組成が偏在している点は、豊富な器種が見られたみどりヶ丘遺跡とは異なっており特徴的である。なお、芝宮南遺跡が厚い砂礫層の下から発見されたことから、扇尖に未知の遺跡が存在している可能性が示唆された¹¹⁾。扇端付近に立地する等々力町巾巾上中下遺跡 [2-35] では、かつて石包丁が採集されていたが、その後の発掘調査により、地表下約18mから後期の堅穴建物跡が検出され、甕を含む土器も出土した¹²⁾。穂高神社境内遺跡 [2-36] でも、明確な遺構は認められないものの、後期の土器片が確認された¹³⁾。また、三枚橋・塚原遺跡 [2-38・47] の周辺からは、過去の発掘調査および採集遺物等で弥生時代後期の赤彩を施した土器片が確認されており、関連する遺構の存在が示唆されているが、具体的にはあきらかになっていない¹⁴⁾。

三郷の黒沢川右岸遺跡 [3-8] や、豊科の町田遺跡 [1-14] も中期に展開した集落であり、いずれも山麓の河岸段丘上に立地する¹⁵⁾。特に町田遺跡は、中期後半から終末にかけての短い期間に形成された集落遺跡と考えられている¹⁶⁾。

また、穂高の他谷遺跡 [2-27]、明科のほうろく屋敷遺跡 [5-101] などでは、再葬墓が発掘調査された¹⁷⁾。特に、ほうろく屋敷遺跡では、後期の堅穴建物跡のほかに、4群16基に及ぶ中期初頭の再葬墓が確認されており、在地系の土器を中心として、東北・関東および東海系の土器も出土している¹⁸⁾。

(原武・前田⁹⁾・前田¹⁰⁾)

(4) 古墳時代

安曇野市域の古墳時代遺跡は、前期から終末期まで存在する。前期古墳かと思われる事例も知られているが、当地域にて古墳の築造が盛んとなるのは、あくまで後期以降のことである。いずれの古墳も、6世紀後半から順次造営されたが、8世紀に墳墓としての役割を終えた点で共通している。

西山東麓の穂高地域から三郷地域にかけては、約90基の円墳からなる穂高古墳群を中心に、多数の後期古墳が営まれた。堀金では、須佐渡口南古墳 [4-1]、岩原古墳 [4-2]、前の髪古墳 [4-5] などが存

在する。また、三郷の北小倉1・2号墳 [3-39]、平福寺付近古墳 [3-28]、アルプス学園前古墳 [3-7] は、扇状地を縦断して点在する。穂高古墳群を造営した集団は、烏川扇状地の扇端付近、馬場街道遺跡 [2-53]、藤塚遺跡 [2-28] や、等々力町巾巾下遺跡 [2-35] をはじめとする矢原遺跡群を拠点としたのであろう。馬場街道遺跡では、中期から後期にかけての建物跡が確認されており、古代・中世にかけて集落遺跡が継続する³⁰⁾。藤塚遺跡では、後期と推定される竪穴建物跡30棟と掘立柱建物跡5棟が確認されている³⁰⁾。矢原五輪畑遺跡 [2-48] では、土製勾玉が多数出土したという³¹⁾。一方、堀金・豊科地域では、古墳時代の集落がみられないが³²⁾、これは沖積作用によって集落域が地中深くに埋没した結果に過ぎない。

明科地域には、前期に遡る上生野遺跡 [5-517] が認められる³³⁾。また、長峯山から潮神明宮周辺の山麓にかけては、能念寺古墳群(能念寺1～3号墳) [5-416～418]、武士平1・2号墳 [5-420・421]、上郷古墳 [5-408]、潮古墳群(金山塚1～5号墳・お経塚古墳・潮古墳群6～8号墳) [5-503～507・508・501(537～539)] などが築かれており、恐らく20基以上の古墳があると予想されている。能念寺古墳群には、前期古墳が含まれる可能性も指摘されているが、大方が6世紀以降のものであろう³⁴⁾。7世紀から8世紀初頭まで稼働した潮古墳群³⁵⁾、明科庵寺 [5-409] を創建した氏族の奥津域である可能性が高い。その内、潮神明宮前遺跡では、周溝を巡らせた一辺約20.0mの方墳が存在することも確認された³⁶⁾。このような周溝をもつ方墳は、松本平全域でも中山15号墳以外に類例がない³⁷⁾。上郷古墳は、横穴式石室から直刀2本と髯が出土しており、それらの特徴から7世紀末葉に比定されている³⁸⁾。

また、先述した通り明科地域には、7世紀後半に創建された明科庵寺 [5-409] がある。これまでの発掘調査によって、掘立柱建物跡などともなう大量の瓦が出土した³⁹⁾。鵜尾や瓦塔も確認されており、信濃における最古の寺院のひとつとして注目されよう。補修瓦の様相などから、平安時代まで存続していたものと考えられている。一部の瓦は、板坂古窯跡 [5-212] から供給されたものとみられるが⁴⁰⁾、軒丸瓦第一型式第1・2類などは生産地がわからない。なお、第一型式第2類と同范の軒丸瓦が、岐阜県飛騨市の寿楽寺庵寺から出土している⁴¹⁾。

(森田・前田)

(5) 古代

ほぼ現在の長野県にあたる地域に建置された令制国の信濃国には、伊那・諏訪・筑摩・安曇・更級・水内・高井・埴科・小県・佐久の10郡が設けられた。現在の安曇野市は、安曇郡の大部分と、筑摩郡の一部に該当し、「倭名類聚抄」によれば、安曇郡に高家・八原・前科・村上の4郷が存在していたことがわかる。恐らく、高家郷が豊科・三郷周辺、八原郷が穂高周辺、前科郷が明科・池田町周辺、村上郷が大町市周辺にあたるものであろう。正倉院に残されている布袴の墨書には、「信濃国安曇郡前科郷戸主安曇郡真平調布老端(中略)郡司主帳従七位上安曇郡百島 天平宝字八(764)年十月」とあり、安曇氏が郡司層の一端を担っていた事実を窺わせる。なお、当地の古社として知られる穂高神社は、「日本三代実録」貞観元(859)年条に「宅宅神」と見え、延喜式神名帳に「穂高神社 明神大」とある通り、有力な官社として取り扱われていた。

奈良時代の集落立地は、古墳時代までの傾向を概ね踏襲しており、犀川以西の扇端と犀川以東の河岸

段丘上に営まれた。また、三都地域の三角原遺跡 [3-14]、堀金地域の堀金小学校遺跡 [4-24]、豊科地域の吉野町遺跡 [1-22] などで集落遺跡が発見されたことにより、8世紀以降、これらの地域で新たに開発が及んだとみられている。9世紀中葉以降になると各地で集落遺跡が増加することから、平安時代以降に郡内の開発がさらに進んだとみられる³⁰⁾。

穂高地域では、馬場街道遺跡 [2-53] から、8世紀・10～11世紀の竪穴建物跡がそれぞれ確認されている³⁰⁾。このほか矢原五輪畑遺跡 [2-48]、矢原宮地遺跡 [2-49] でも竪穴建物跡が確認されている。堀金地域では、岩田天神南遺跡 [4-3]、おもそう遺跡 [4-7]、下堀道南遺跡 [4-22] などで奈良時代の集落遺跡が確認されており³⁰⁾、堀金小学校付近遺跡 [4-24] では、9世紀後半以降の竪穴建物跡が確認された³⁰⁾。豊科地域では、鳥羽遺跡 [1-23]・吉野町遺跡 [1-22]・梶海波遺跡 [1-6] で竪穴建物跡が発見されており、広大な沖積地の開発が進んだことが窺われるが、いずれも9世紀後半に位置づけられ、集落は継続していない³⁰⁾。

犀川以東の明科地域でも、全域で集落が確認されており、開発が広範囲に及んでいたとみられている³⁰⁾。湖古墳群 [5-503～508]・明科庵寺 [5-409] の造営集団の集落とみなされている明科遺跡群 [5-407～414] では、栄町遺跡 [5-411] や龍門淵遺跡 [5-412] の発掘調査から、犀川を中心とした水運の支配を経済基盤として富を蓄積した可能性が想定されている³⁰⁾。このほか、潮神明宮前遺跡 [5-501] や上生野遺跡 [5-517]、犀川を挟んだ段丘上に位置するほうろく屋敷遺跡 [5-101] などでも平安時代の集落が営まれた³⁰⁾。また古殿屋敷遺跡 [5-413] では、平安時代の木棺墓が確認され、八咫鏡や緑釉陶器が出土した⁴⁰⁾。

これらの集落遺跡のほかに、主要な生産遺跡として牧と窯跡を挙げておく。10世紀前半に編纂された「延喜式」によれば、勅旨牧である信濃十六牧のうち、松本平には埴原牧・大野牧・猪鹿牧が置かれていたと記されている。いずれも具体的な遺跡は明確に発見されていないが、このうち猪鹿牧が、安曇野市穂高牧付近に比定されている。

信濃の須恵器生産は、6世紀前半の長野市松ノ山窯跡に始まり、7世紀中葉から後葉になって各地に窯が出現した⁴¹⁾。松本平では、7世紀から8世紀中頃にかけて、松本市新切窯跡群・鍬形窯跡、塩尻市菟淵窯跡など複数の須恵器生産地が出現した。この時期の松本平における遺跡からは、岐阜県的美濃須恵窯跡群で生産された土器の出土が目立っており、須恵器に対する需要の高まりが開窯の契機になったと考えられている。また、菟淵窯の製品は美濃須恵窯と類似しており、陶工の移動が想定されている。豊科地域でも、東山山麓にある上ノ山窯跡群・菟淵平窯跡群 [1-12・13] で、8・9世紀代の須恵器窯跡17基と、数基の土器焼成土坑、26棟の竪穴建物跡が調査されている。9世紀頃になると、松本市の会田盆地窯跡群や、上ノ山窯跡群・菟淵平窯跡群や田溝池窯跡からなる筑摩東山窯跡群に須恵器生産が集約されたと考えられている。この傾向は須恵器だけでなく、土師器にも当てはめられることができるとされる。集落遺跡出土の土師器の規格が揃い始めた点と、土師器焼成坑の遺構が筑摩東山窯跡群に限られている点は注目される。また、上ノ山窯跡群・菟淵平窯跡群から出土した瓦や、須恵器壺には土師器・甕の技法であるハケが施されたものがあり、土師器と須恵器が一体的に生産されていたことも指摘されている。9世紀前葉頃には、松本平に流通する土器はすべて筑摩東山窯跡群で生産する体制が整ったと考えられ、松本平の古代住居跡で使われていた土器のほとんどは、ここで焼かれていたものであるとさ

れている。松本平において須恵器窯での食器生産は、9世紀前葉までで終了したとされ、9世紀中葉から後葉にかけては土器焼成坑での生産がおこなわれていたと考えられている。また須恵器貯蔵具は9世紀後葉まで窯での生産がおこなわれていたものと推定されている。9世紀末には、遺跡から出土する土器は、東海地方などから搬入品である灰軸陶器が多くなり、在地産の土師器も個体差が大きくなるなど、多種の土器を一元的に生産・供給した体制が終焉を迎えたとみられている。^(原武)

(6) 中世・近世

平安時代末から鎌倉時代初期には、住吉荘・大穴荘・仁科荘や、矢原御厨・仁科御厨などが存在した。鎌倉・室町時代においては、仁科氏が大町市周辺を拠点として勢力を保ち、徳高神社の大権那も務めた細堂氏(大伴氏)が矢原に拠っている。また、松本平にて力を伸ばした小笠原氏が度々信濃守護職となったが、天文19(1550)年に小笠原長時を破った武田晴信が中信を手にした。その後は、仁科氏が徳高神社の大権那を担い、一族・被官の古厩氏・等々力氏・堀金氏・丸山氏・真々部氏らも武田に従う。同様に、東信の小県郡を本貫地とした海野氏や、その支族である会田氏・塔原氏らも武田被官となった。武田氏滅亡後は、木曾義昌が一带を領したが、織田信長の死とともに小笠原氏が迎えられ、天正18(1590)年に徳川家康が関東へ移った後、石川家・小笠原家・戸田松平家・堀田家・水野家を経て、享保10(1725)年に再び戸田松平家が松本藩に封じられて明治維新を迎えた。なお、この地域は、千国道が通る交通の要衝であり、天保3(1832)年には松本と新町を結ぶ犀川通船も開かれた。

遺跡の様相に目を転じると、平地に中近世の館跡、西山・東山の一帯に戦国期の山城が残されている。中世前期に遡る殿村館跡 [1-35] は、古くから当地域の開発に関わってきた細堂氏の館跡であろう。一方、仁科氏の一族・被官に関しては、古厩氏が古厩城跡 [2-65]・空保木城跡 [2-63]、等々力氏が等々力城跡 [2-62]、堀金氏が岩原城跡 [4-33]、丸山氏が中村堀屋敷跡 [1-26]・鳥羽館跡 [1-30]、真々部氏が真々部氏館跡 [1-24] などを営んでいた。また、明科地域に塔原氏の上手屋敷遺跡 [5-404]・塔ノ原城跡 [5-406]、豊科田沢に光氏の町田館跡 [1-34]・光城跡 [1-31] などがあり、潮・塔ノ原・光にかけて「古屋敷」という地名も複数残されている通り、海野一族が犀川東岸一帯を押さえていたことがわかる。

なお、安曇野の扇状地は、「堰」と呼ばれる用水路によって潤されてきた。それは、山麓の斜面を利用した縦堰と、ほぼ等高線に沿って南北に設けられた横堰からなる。とりわけ、文化13(1816)年に開削された最大規模の拾ヶ堰は、総延長約15kmの規模を誇る横堰だが、周辺10村の人々によって約3ヶ月の短期間のうちに竣工したことも知られる。^(原武)

(7) 近代・現代

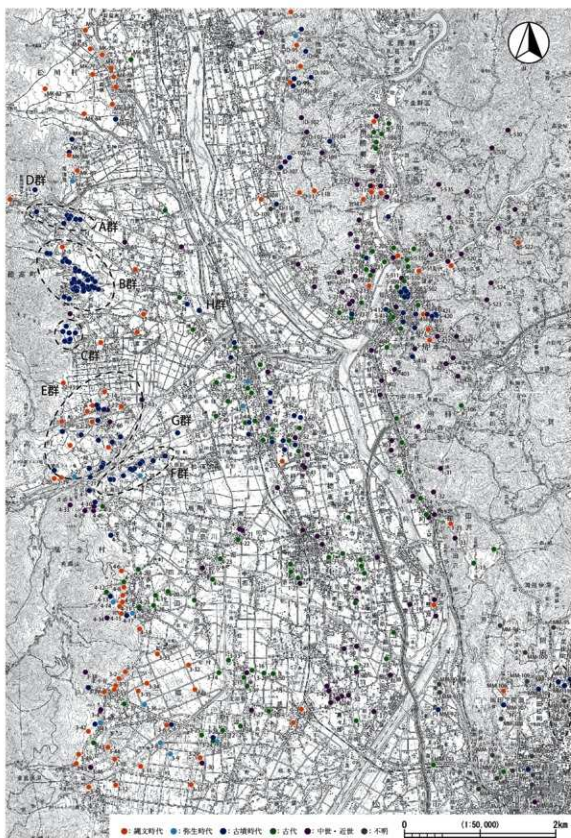
戸田松平家のもと明治維新を迎えた信濃国安曇郡は、明治4(1872)年に松本県、そして筑摩県の属となり、明治7(1875)年に東穂高村(合併前7ヶ村)・西穂高村(同4ヶ村)・北穂高村(同2ヶ村)・有明村(同7ヶ村)・豊科村(同6ヶ村)が置かれた。その後、明治9(1876)年から長野県管内とされた安曇郡は、

明治12(1879)年に北安曇郡・南安曇郡となる。その内、南安曇郡管下の町村は、幾度かの分置廃合を経て、平成17(2005)年に豊科町・穂高町・堀金村・三郷村と、高瀬川・犀川東岸の東筑摩郡明科町が合併。現在の安曇野市発足とともに、南安曇郡は消滅した。

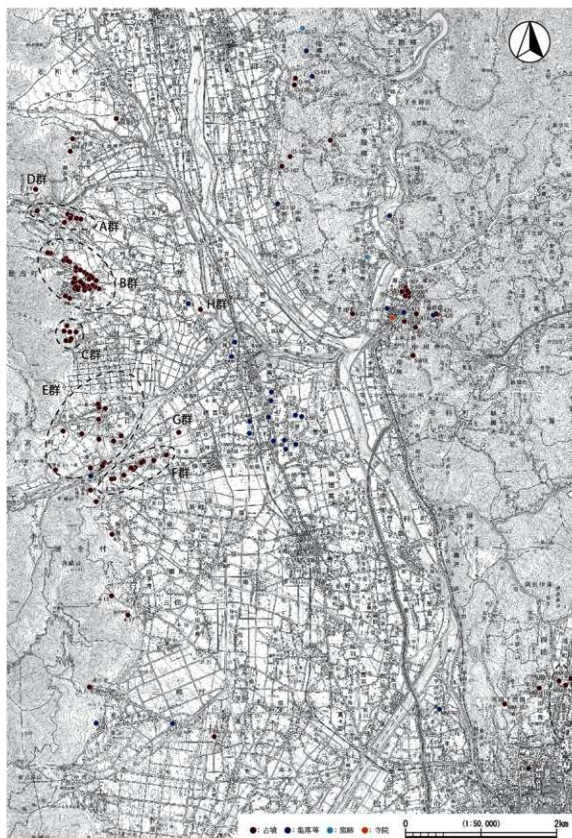
文化13(1816)年以来、安曇野の扇状地を調べてきた拾ヶ堰では、近代に入って度々改修工事が行われ、井戸掘削による灌漑を試みてきた塚原地区でも幹線水路の完成によって昭和後期には水が行き渡るようになった。そして昭和30(1955)年には、上水道の敷設がはじまり、その一環として穂高古墳群F9・10号墳付近にも塚原配水池が設けられた⁴⁰。一方、低地においては、そもそも豊富な水資源に恵まれ、大正15(1926)年に長野県水産試験場の前身となる施設が設けられた。この試験場は、シナノユキマスや、信州サーモンの開発を行ったことで知られる。その他、昭和12(1937)年に呉羽紡績の工場を誘致するなど、繊維産業をはじめとする産業振興にも力が入れられた。

また、安曇野は、今や避暑地としても名高い観光地だが、大正10(1921)年に山際の中房温泉から引湯し、長野市にあった遊郭を移築して有明温泉が開かれた。周囲では、昭和40年代に入ると町主導による引湯を利用しての別荘化が進められた⁴⁰。ちなみに、この有明温泉本館は、昭和3(1928)年の有明温泉倒産の後、昭和21(1946)年に「松本少年学院」となり、昭和24(1949)年には少年院「有明高原寮」となった。この建物は、昭和22(1947)年から昭和25(1950)年に放送されたNHKラジオドラマ「鐘の鳴る丘」のモデルとなっていたこともあり、穂高郷土資料館裏手に再移築され、鐘の鳴る丘集会所(安曇野市指定有形文化財)として保存されている。

なお、大正4(1915)年より、穂高町に歩兵第50連隊の演習地が設置された。昭和19(1944)年になると、歩兵第204連隊(決部隊)が本土決戦に備えた訓練として、安曇野のあちこちに「タコつぼ」と称する穴を掘ったという。また、昭和20(1945)年5月19日には、これらを標的として穂高・有明地区に空襲があり、3人の死傷者が出ている⁴⁰。(萩原)



第4図 安曇野市周辺の遺跡



第5図 安曇野市周辺の遺跡(古墳時代)

第2表 安曇野市周辺の遺跡

地域	番号	遺跡名	主な時代	種別	地域	番号	遺跡名	主な時代	種別
豊科	1-1	宮前遺跡	平安	散布地	穂高	2-14	有明山上遺跡	縄文	集落跡
豊科	1-2	熊合遺跡	縄文	散布地	穂高	2-15	かんべいじふ遺跡	平安	集落跡
豊科	1-3	小海丸遺跡	平安	集落跡	穂高	2-16	山崎遺跡	縄文中期～後期	集落跡
豊科	1-4	上大手川遺跡	中世	集落跡	穂高	2-17	草深遺跡	縄文中期～後期	集落跡
豊科	1-5	荒井遺跡	平安	集落跡	穂高	2-18	十三塚遺跡	縄文	集落跡
豊科	1-6	飯海丸遺跡	平安	集落跡	穂高	2-19	礪山遺跡	縄文	集落跡
豊科	1-7	本村遺跡	平安	散布地	穂高	2-20	大坂遺跡	縄文中期	集落跡
豊科	1-8	順原遺跡	平安	散布地	穂高	2-21	礪下遺跡	縄文・古墳	集落跡
豊科	1-9	大海丸遺跡	平安	散布地	穂高	2-22	シヨウノヒナタ遺跡	縄文中期後半～後期、奈良	集落跡
豊科	1-10	越ヶ丘遺跡	平安	散布地	穂高	2-23	南原遺跡	縄文前期後半	集落跡
豊科	1-11	成宿遺跡	縄文・平安	散布地	穂高	2-24	神谷遺跡	縄文中期後半～後期	集落跡
豊科	1-12	高湯字原跡群	平安	生業遺跡	穂高	2-25	新林遺跡	縄文早期～後期	集落跡
豊科	1-13	上ノ山原跡群	奈良・平安	生業遺跡	穂高	2-26	荒井字遺跡	縄文	集落跡
豊科	1-14	町田遺跡	奈良・平安	集落跡	穂高	2-27	熊谷遺跡	縄文・中世	集落跡
豊科	1-15	光巻跡	縄文・平安	散布地	穂高	2-28	塚原遺跡	奈良	集落跡
豊科	1-16	原村遺跡	平安	散布地	穂高	2-29	貝梅田上遺跡	古墳・平安	集落跡
豊科	1-17	飯田宮遺跡	中世	散布地	穂高	2-30	貝梅田下遺跡	古墳・平安	集落跡
豊科	1-18	真ヶ丘山下遺跡	平安	散布地	穂高	2-31	江遺跡	古墳・平安	集落跡
豊科	1-19	町田遺跡	中世	散布地	穂高	2-32	一本松遺跡	平安	集落跡
豊科	1-20	小瀬原遺跡	奈良・平安	散布地	穂高	2-33	神の水遺跡	平安	集落跡
豊科	1-21	上ノ山北遺跡	縄文	散布地	穂高	2-34	宮前遺跡	奈良前期・平安・中世	集落跡
豊科	1-22	吉野町遺跡	平安	集落跡	穂高	2-35	等々力町市上印下遺跡	縄文・奈良・奈良・平安・中世	集落跡
豊科	1-23	鳥石遺跡	平安	集落跡	穂高	2-36	穂高神社境内遺跡	奈良・古墳・奈良・平安	集落跡
豊科	1-24	真ヶ丘氏館跡	中世	城郭跡	穂高	2-37	北ノ下神遺跡	古墳後期・平安	集落跡
豊科	1-25	野村町館跡	中世	城郭跡	穂高	2-38	塚原遺跡	古墳後期・平安	集落跡
豊科	1-26	中村原館跡	中世	城郭跡	穂高	2-39	宗徳寺遺跡	平安	集落跡
豊科	1-27	成相氏館跡	中世	城郭跡	穂高	2-40	芝宮宮遺跡	奈良・平安	集落跡
豊科	1-28	藤木の墓所跡	中世	城郭跡	穂高	2-41	穂高高校北遺跡	平安	集落跡
豊科	1-29	法蔵寺館跡	中世	城郭跡	穂高	2-42	大坪川遺跡	平安	集落跡
豊科	1-30	鳥石館跡	中世	城郭跡	穂高	2-43	南原遺跡	奈良	集落跡
豊科	1-31	光巻跡	中世	城郭跡	穂高	2-44	飯沼遺跡	古墳・平安	集落跡
豊科	1-32	田沢城跡	中世	城郭跡	穂高	2-45	道祖遺跡	平安	集落跡
豊科	1-33	上ノ山城跡	中世	城郭跡	穂高	2-46	矢原尾根池遺跡	平安	集落跡
豊科	1-34	町田館跡	中世	城郭跡	穂高	2-47	三枚池遺跡	縄文中期～中世	集落跡
豊科	1-35	飯沼館跡	中世	城郭跡	穂高	2-48	矢原五輪池遺跡	古墳～平安	集落跡
豊科	1-36	熊谷氏館跡	中世	城郭跡	穂高	2-49	久原宮地遺跡	縄文中期・奈良～平安	集落跡
豊科	1-37	花村氏館跡	中世	城郭跡	穂高	2-50	梅池遺跡	縄文中期後半・平安	集落跡
豊科	1-38	飯田館跡	中世	城郭跡	穂高	2-51	四反田遺跡	古墳後期・平安	集落跡
豊科	1-39	法蔵寺跡	中世	社寺跡	穂高	2-52	正鳥遺跡	縄文中期後半・中世	集落跡
豊科	1-40	日光寺跡	中世	社寺跡	穂高	2-53	馬場前遺跡	古墳・奈良・平安	集落跡
豊科	1-41	常光寺跡	中世	社寺跡	穂高	2-54	矢原ふらて池遺跡	平安	集落跡
豊科	1-42	正覚寺跡	奈良	社寺跡	穂高	2-55	下原遺跡	縄文中期後半	集落跡
豊科	1-43	円蔵寺跡	奈良	社寺跡	穂高	2-56	八ツ口遺跡	奈良・平安・中世	集落跡
豊科	1-44	円通寺跡	中世	社寺跡	穂高	2-57	柏原遺跡	古墳後期～平安	集落跡
豊科	1-45	王光寺跡	奈良	社寺跡	穂高	2-58	中在池遺跡	縄文中期後半・古墳後期～平安	集落跡
豊科	1-46	真光寺跡	中世	社寺跡	穂高	2-59	瀬之内遺跡	古墳中期～後期・中世	集落跡
豊科	1-47	浄法寺跡	中世	社寺跡	穂高	2-60	矢原中上遺跡	古墳中期～後期・中世	集落跡
豊科	1-48	栄光寺跡	中世	社寺跡	穂高	2-61	徳之助館遺跡	平安	集落跡
豊科	1-49	円蔵寺跡	中世	社寺跡	穂高	2-62	等々力城跡	中世	城郭跡
豊科	1-50	上野原館跡	中世	城郭跡	穂高	2-63	惣保木城跡	中世	城郭跡
豊科	1-51	常光寺跡	奈良	社寺跡	穂高	2-64	古戦氏館跡	中世	城郭跡
豊科	1-52	金堂寺跡	中世	社寺跡	穂高	2-65	古戦城跡	中世	城郭跡
穂高	2-1	宮城遺跡	縄文中期後半	集落跡	穂高	2-66	寺前・北田遺跡	中世	散布地
穂高	2-2	野辺川遺跡	縄文	集落跡	穂高	2-A1	A 1号墳(塚塚)	古墳	古墳
穂高	2-3	杉尾遺跡	縄文中期前半	集落跡	穂高	2-A2	A 3号墳	古墳	古墳
穂高	2-4	青原寺大門遺跡	中世	城郭跡	穂高	2-A6	A 6号墳(大妻塚)	古墳	古墳
穂高	2-5	小笠原下木戸遺跡	縄文中期後半・中世	集落跡					
穂高	2-6	原成遺跡	平安	集落跡					
穂高	2-7	匠内成遺跡	縄文	集落跡					
穂高	2-8	高下神社東遺跡	縄文中期後半	集落跡					
穂高	2-9	高下遺跡	縄文	集落跡					
穂高	2-10	耳塚公民館棟遺跡	平安	集落跡					
穂高	2-11	耳塚遺跡	古墳前期・奈良	集落跡					
穂高	2-12	有明南原遺跡	縄文	集落跡					
穂高	2-13	寺島館遺跡	縄文中期後半～後期	集落跡					

地域	番号	遺跡名	主な時代	種類
鶴高	2-A7	A 7号墳(徳塚)	古墳	古墳
鶴高	2-A8	A 8号墳	古墳	古墳
鶴高	2-B1	B 1号墳(石いり塚)	古墳	古墳
鶴高	2-B2	B 2号墳	古墳	古墳
鶴高	2-B3	B 3号墳(浦塚)	古墳	古墳
鶴高	2-B4	B 4号墳	古墳	古墳
鶴高	2-B5	B 5号墳(金塚)	古墳	古墳
鶴高	2-B6	B 6号墳	古墳	古墳
鶴高	2-B7	B 7号墳	古墳	古墳
鶴高	2-B8	B 8号墳	古墳	古墳
鶴高	2-B9	B 9号墳	古墳	古墳
鶴高	2-B10	B 10号墳	古墳	古墳
鶴高	2-B11	B 11号墳	古墳	古墳
鶴高	2-B12	B 12号墳	古墳	古墳
鶴高	2-B13	B 13号墳	古墳	古墳
鶴高	2-B14	B 14号墳	古墳	古墳
鶴高	2-B15	B 15号墳	古墳	古墳
鶴高	2-B16	B 16号墳	古墳	古墳
鶴高	2-B17	B 17号墳	古墳	古墳
鶴高	2-B18	B 18号墳	古墳	古墳
鶴高	2-B19	B 19号墳	古墳	古墳
鶴高	2-B20	B 20号墳	古墳	古墳
鶴高	2-B21	B 21号墳	古墳	古墳
鶴高	2-B22	B 22号墳	古墳	古墳
鶴高	2-B23	B 23号墳(祝塚)	古墳	古墳
鶴高	2-B24	B 24号墳	古墳	古墳
鶴高	2-B25	B 25号墳	古墳	古墳
鶴高	2-B26	B 26号墳	古墳	古墳
鶴高	2-B27	B 27号墳	古墳	古墳
鶴高	2-B28	B 28号墳	古墳	古墳
鶴高	2-B29	B 29号墳	古墳	古墳
鶴高	2-B30	B 30号墳	古墳	古墳
鶴高	2-B31	B 31号墳	古墳	古墳
鶴高	2-B32	B 32号墳	古墳	古墳
鶴高	2-B33	B 33号墳	古墳	古墳
鶴高	2-B34	B 34号墳	古墳	古墳
鶴高	2-B35	B 35号墳	古墳	古墳
鶴高	2-B36	B 36号墳	古墳	古墳
鶴高	2-C1	C 1号墳	古墳	古墳
鶴高	2-C2	C 2号墳	古墳	古墳
鶴高	2-C3	C 3号墳	古墳	古墳
鶴高	2-C4	C 4号墳	古墳	古墳
鶴高	2-C5	C 5号墳	古墳	古墳
鶴高	2-C6	C 6号墳	古墳	古墳
鶴高	2-C7	C 7号墳	古墳	古墳
鶴高	2-D1	D 1号墳(巖石岩塚)	古墳	古墳
鶴高	2-E1	E 1号墳(西塚)	古墳	古墳
鶴高	2-E2	E 2号墳(三郎塚)	古墳	古墳
鶴高	2-E3	E 3号墳	古墳	古墳
鶴高	2-E4	E 4号墳(鎌塚)	古墳	古墳
鶴高	2-E5	E 5号墳(上人塚)	古墳	古墳
鶴高	2-E6	E 6号墳(風塚3号)	古墳	古墳
鶴高	2-E7	E 7号墳(風塚2号)	古墳	古墳
鶴高	2-E8	E 8号墳(風塚1号)	古墳	古墳
鶴高	2-E9	E 9号墳(前田塚)	古墳	古墳
鶴高	2-E10	E 10号墳(寺高塚)	古墳	古墳
鶴高	2-E11	E 11号墳(神谷塚)	古墳	古墳
鶴高	2-E13	E 13号墳(浜塚)	古墳	古墳
鶴高	2-E14	E 14号墳(藤山1号)	古墳	古墳
鶴高	2-E15	E 15号墳(藤山2号)	古墳	古墳
鶴高	2-E16	E 16号墳(藤塚)	古墳	古墳
鶴高	2-E17	E 17号墳(シヨウシ ハウ)	古墳	古墳
鶴高	2-E18	E 18号墳(藤山3号)	古墳	古墳
鶴高	2-E19	E 19号墳	古墳	古墳
鶴高	2-F1	F 1号墳	古墳	古墳
鶴高	2-F2	F 2号墳	古墳	古墳

地域	番号	遺跡名	主な時代	種類
鶴高	2-F3	F 3号墳	古墳	古墳
鶴高	2-F4	F 4号墳	古墳	古墳
鶴高	2-F5	F 5号墳	古墳	古墳
鶴高	2-F6	F 6号墳(元塚大明神)	古墳	古墳
鶴高	2-F7	F 7号墳	古墳	古墳
鶴高	2-F8	F 8号墳	古墳	古墳
鶴高	2-F9	F 9号墳(二つ塚)	古墳	古墳
鶴高	2-F10	F 10号墳(二つ塚)	古墳	古墳
鶴高	2-G1	G 1号墳(上塚古墳)	古墳	古墳
鶴高	2-H1	H 1号墳(大塚群)	古墳	古墳
三郎	3-1	一本松遺跡	縄文	散佈地
三郎	3-2	鳴沢A遺跡	縄文	散佈地
三郎	3-3	オの神遺跡	縄文	散佈地
三郎	3-4	浄心寺南塚	中世以降	不明
三郎	3-5	浄心寺付古遺跡	縄文・中世	散佈地
三郎	3-6	東小倉遺跡	縄文	集落跡
三郎	3-7	アムス宇架前古墳	古墳以降	古墳?
三郎	3-8	加沢川右岸遺跡	縄文・弥生	集落跡
三郎	3-9	チクウ宮敷遺跡	縄文・弥生	散佈地
三郎	3-10	南松原遺跡	縄文	集落跡
三郎	3-11	調布池北遺跡	縄文	散佈地
三郎	3-12	稲倉西遺跡	縄文	散佈地
三郎	3-13	丁田遺跡	縄文・平安	散佈地
三郎	3-14	三角原遺跡	縄文・弥生・ 平安以降	集落跡
三郎	3-15	徳中村遺跡	平安以降	散佈地
三郎	3-16	徳小路遺跡	縄文・平安以降	散佈地
三郎	3-17	徳小手遺跡	平安以降	散佈地
三郎	3-18	徳の木下遺跡	平安以降	集落跡
三郎	3-19	三柱神社東遺跡	平安以降	散佈地
三郎	3-20	白山神社西遺跡	縄文	散佈地
三郎	3-21	一日寺塚郵便局南 遺跡	縄文	散佈地
三郎	3-22	上総原古遺跡	平安以降	散佈地
三郎	3-23	川原原氏宅地遺跡	弥生	散佈地
三郎	3-24	京原遺跡	弥生・平安	散佈地
三郎	3-25	若宮遺跡	平安	散佈地
三郎	3-26	道下遺跡	平安・中世	集落跡
三郎	3-27	坂が丘遺跡	中世以降	散佈地
三郎	3-28	平塚寺付古墳	古墳	古墳
三郎	3-29	長尾城址北遺跡	縄文	散佈地
三郎	3-30	長尾城址	中世	城跡跡
三郎	3-31	南原西遺跡	縄文	散佈地
三郎	3-32	住吉村東遺跡	縄文	散佈地
三郎	3-33	鳴沢民遺跡	縄文	散佈地
三郎	3-34	西牧遺跡	縄文	散佈地
三郎	3-35	地蔵沖遺跡	縄文	散佈地
三郎	3-36	大塚遺跡	弥生	散佈地
三郎	3-37	堀尾遺跡	弥生	散佈地
三郎	3-38	小倉城址	中世	城跡跡
三郎	3-39	北小倉1号・2号塚	古墳?	古墳?
三郎	3-40	堂原古遺跡	弥生	散佈地
三郎	3-41	山の越遺跡	古墳	散佈地
三郎	3-42	大日堂北遺跡	縄文	散佈地
三郎	3-43	中沢遺跡	平安以降	散佈地
三郎	3-44	砂の久保遺跡	縄文	散佈地
三郎	3-45	熊沢冷水塚東遺跡	縄文	散佈地
三郎	3-46	富士塚	中世	散佈地
三郎	3-47	長者原古遺跡	縄文	散佈地
三郎	3-48	千原北遺跡	縄文	散佈地
三郎	3-49	大塚遺跡	縄文	散佈地
三郎	3-50	及木西村遺跡	平安	散佈地
三郎	3-51	鳴沢B遺跡	縄文	散佈地
三郎	3-52	徳神寺跡	中世・近世	社寺跡
三郎	3-53	五反田遺跡	縄文	集落跡
瀬金	4-1	瀬神瀨門南古墳	古墳	古墳
瀬金	4-2	岩塚古墳	古墳	古墳

地域	番号	遺跡名	主な時代	種別
福金	4-2	岩原遺跡	古代	集落跡
福金	4-4	信上遺跡	縄文・弥生・中世	集落跡
福金	4-5	前ひま古墳	古墳	古墳
福金	4-6	山の神下遺跡	縄文	散布地
福金	4-7	おもしろ遺跡	縄文・弥生・古代	散布地
福金	4-8	上手林遺跡	縄文	散布地
福金	4-9	石見古遺跡	縄文	散布地
福金	4-10	上の原B遺跡	縄文	散布地
福金	4-11	上の原C遺跡	縄文	散布地
福金	4-12	曲尾遺跡	縄文・古代	散布地
福金	4-13	曲尾古墳群	古墳	古墳
福金	4-14	平塚遺跡	縄文・弥生	散布地
福金	4-15	津沢遺跡	縄文	散布地
福金	4-16	賀茂神社古遺跡	縄文・弥生	散布地
福金	4-17	古城ノ古墳	古墳	古墳
福金	4-18	和合田遺跡	縄文	散布地
福金	4-19	そり武遺跡	縄文・弥生・ 古代・中世	集落跡
福金	4-20	なごこま遺跡	縄文・古代	集落跡
福金	4-21	十兵衛原遺跡	中世・近世	散布地
福金	4-22	下湯田遺跡	古代	散布地
福金	4-23	たつまい(湯田前)遺跡	縄文・古代	散布地
福金	4-24	福金小学校付近遺跡	古代	集落跡
福金	4-25	田多字古城ノ遺跡	縄文・古代・中世	集落跡
福金	4-26	田多字北村遺跡	縄文・古代・中世	散布地
福金	4-27	堀の内遺跡	縄文・古代・中世	散布地
福金	4-28	深沢南遺跡	縄文・古代	散布地
福金	4-29	安楽寺跡	中世以降	社寺跡
福金	4-30	大同寺跡	中世以降	社寺跡
福金	4-31	上黒原町屋敷跡	中世以降	城跡跡
福金	4-32	田多字氏原館址	中世以降	城跡跡
福金	4-33	岩原城址	中世以降	城跡跡
福金	4-34	田多字城址	中世以降	城跡跡
福金	4-35	十兵衛原遺跡	中世以降	城跡跡
明科	5-101	ほうろく(原)遺跡	縄文・弥生・奈良・ 平安・中世・近世	集落跡
明科	5-102	高松寺跡	中世・近世	社寺跡
明科	5-103	高平遺跡	縄文	散布地
明科	5-104	竹原遺跡	縄文・古代	散布地
明科	5-105	上ノ段遺跡	古代	散布地
明科	5-106	北原遺跡	縄文・古代	散布地
明科	5-107	榎平遺跡	古代	散布地
明科	5-108	湯谷野見跡	中世	城跡跡
明科	5-109	東原寺	中世・近世	社寺跡
明科	5-110	中村城址	中世・近世	城跡跡
明科	5-111	寺光寺跡	中世・近世	社寺跡
明科	5-112	寺光遺跡	縄文	散布地
明科	5-113	石丸遺跡	縄文後期	散布地
明科	5-114	中村原田遺跡	中世・近世	城跡跡
明科	5-115	中村塚	縄文中期	散布地
明科	5-116	小丸ノ宮址	中世・近世	城跡跡
明科	5-117	源平遺跡	縄文	散布地
明科	5-118	坂山田遺跡	縄文	散布地
明科	5-201	萩原古原遺跡	中世・近世	城跡跡
明科	5-202	萩原城址	中世・近世	城跡跡
明科	5-203	宮原遺跡	縄文・古代	散布地
明科	5-204	宮原古原遺跡	古墳	生土遺跡
明科	5-205	宮ノ原遺跡	縄文・古代	集落跡
明科	5-206	美片遺跡	縄文・古代	集落跡
明科	5-207	伊勢宮遺跡	縄文	散布地
明科	5-208	狐城	中世・近世	城跡跡
明科	5-209	みどりヶ丘遺跡 (疑々丘遺跡)	縄文・弥生・古代	集落跡
明科	5-210	福山原遺跡	縄文・弥生・ 平安・奈良・中世・近世	散布地

地域	番号	遺跡名	主な時代	種別
明科	5-211	福山原内館跡	古代	城跡跡
明科	5-212	桜取古原遺跡	中世・中世・近世	生土遺跡
明科	5-213	藤五郎原遺跡	縄文	散布地
明科	5-214	福山原上ノ平遺跡	縄文・中世・近世	散布地・ 城跡跡
明科	5-215	上野遺跡	縄文・古墳・ 奈良・平安・ 中世・近世	散布地
明科	5-216	やしき遺跡	縄文・古墳・ 奈良・平安・ 中世・近世	散布地
明科	5-217	上野原古墳	古墳	古墳
明科	5-218	白沢城	中世・近世	城跡跡
明科	5-219	神野山遺跡	縄文・中世・近世	散布地
明科	5-220	神野城	中世・近世	散布地
明科	5-221	城ノ平遺跡	縄文・中世・近世	散布地
明科	5-222	神野八幡宮	古代・中世・近世	散布地
明科	5-223	中水ノ原遺跡	中世・近世	城跡跡
明科	5-224	天王原遺跡	中世・近世	社寺跡
明科	5-301	光道跡群北村遺跡	縄文・弥生・ 古代・中世・近世	集落跡
明科	5-302	光道跡群中森遺跡	古代	集落跡
明科	5-303	光道跡群下原館	中世・近世	集落跡
明科	5-304	光道跡群古宮遺跡	中世・近世	社寺跡
明科	5-305	しょうぶ平遺跡	中世・近世	散布地
明科	5-306	天平遺跡	縄文・古墳・ 奈良・平安	散布地
明科	5-401	船形寺古原敷遺跡	中世・近世	城跡跡
明科	5-402	磨古寺	中世・近世	散布地
明科	5-403	法華寺館	中世・近世	城跡跡
明科	5-404	上手原敷遺跡	縄文・古代・ 中世・近世	集落跡
明科	5-405	町原敷遺跡	中世・近世	集落跡
明科	5-406	等ノ原城址	中世・近世	城跡跡
明科	5-407	明科遺跡群上郷遺跡	縄文・古墳・ 奈良・平安	散布地
明科	5-408	明科遺跡群上郷ノ遺跡	古墳	古墳
明科	5-409	明科遺跡群明科塚寺	古墳・奈良・平安	社寺跡
明科	5-410	明科遺跡群黒町遺跡	古墳・奈良・平安	集落跡
明科	5-411	明科遺跡群栄町遺跡	古墳・奈良・平安	集落跡
明科	5-412	明科遺跡群門前遺跡	弥生・古墳	中世集 落跡 (仮称)
明科	5-413	明科遺跡群古原敷遺跡	古墳・平安・ 中世・近世	集落跡・ 城跡跡
明科	5-414	明科遺跡群元町遺跡	弥生・古墳・ 奈良・平安	集落跡
明科	5-415	こや城	縄文・古墳・ 奈良・平安・ 中世・近世	集落跡・ 城跡跡
明科	5-416	徳念寺1号墳	古墳	古墳
明科	5-417	徳念寺2号墳	古墳	古墳
明科	5-418	徳念寺3号墳	古墳	古墳
明科	5-419	武士平遺跡	古墳・中世・近世	散布地
明科	5-420	武士平1号墳	古墳	古墳
明科	5-421	武士平2号墳	古墳	古墳
明科	5-422	杜中遺跡	縄文	散布地
明科	5-423	城下遺跡	縄文	散布地
明科	5-424	南原遺跡	中世	城跡跡
明科	5-425	光久寺	中世	社寺跡
明科	5-426	清本古原	中世	城跡跡
明科	5-427	平上ノ段遺跡	中世	城跡跡
明科	5-428	中沢古原	中世	城跡跡
明科	5-501	瀬道跡群新神宮 前遺跡	古墳・奈良・平安	集落跡
明科	5-502	瀬道跡群新原遺跡	古墳・奈良・平安	散布地
明科	5-503	金山塚1号墳	古墳	古墳
明科	5-504	金山塚2号墳	古墳	古墳

地域	番号	遺跡名	主な時代	種別
明科	5-503	金山塚3号墳	古墳	古墳
明科	5-506	金山塚4号墳	古墳	古墳
明科	5-507	金山塚5号墳	古墳	古墳
明科	5-508	お経塚古墳	古墳	古墳
明科	5-509	南遺跡群古原敷遺跡	古墳、奈良、平安、中世、近世	城跡跡
明科	5-510	南遺跡群藤田遺跡	古墳、奈良、平安、中世、近世	散布地
明科	5-511	南遺跡群古殿原遺跡	中世、近世	城跡跡
明科	5-512	南遺跡群藤田若宮遺跡	縄文、古墳、奈良、平安	集落跡
明科	5-513	南遺跡群三山遺跡	縄文	散布地
明科	5-514	南遺跡群茶臼山遺跡	縄文、中世、近世	散布地、城跡跡
明科	5-515	木戸塚/瓜遺跡	古代	散布地
明科	5-516	大久保遺跡	古代	散布地
明科	5-517	上野野遺跡	縄文、弥生、古墳、中世、近世	集落跡
明科	5-518	山中殿原遺跡	中世、近世	城跡跡
明科	5-519	山中中屋敷遺跡	縄文	散布地
明科	5-520	土屋遺跡	中世、近世	散布地
明科	5-521	花見城址	中世、近世	城跡跡
明科	5-522	庄原河遺跡	縄文	散布地
明科	5-523	佐々野城址	中世、近世	城跡跡
明科	5-524	三峯城(旭城)址	中世、近世	城跡跡
明科	5-525	高見谷址	中世、近世	城跡跡
明科	5-526	城二の峯址	中世、近世	城跡跡
明科	5-527	物見岩址	中世、近世	城跡跡
明科	5-528	高谷原物見址	中世、近世	城跡跡
明科	5-529	たかうちば物見址	中世、近世	城跡跡
明科	5-530	築+城宮	中世、近世	城跡跡
明科	5-531	横谷塚(高松原城)址	中世、近世	城跡跡
明科	5-532	大森物見址	中世、近世	城跡跡
明科	5-533	梶子重物見址	中世、近世	城跡跡
明科	5-534	小浮原遺跡	中世、近世	城跡跡
明科	5-535	川はさま岩址	中世、近世	城跡跡
明科	5-537	南古墳群7号墳	古墳	古墳
明科	5-538	南古墳群7号墳	古墳	古墳
明科	5-539	南古墳群8号墳	古墳	古墳
松川村	MR-37	下谷地遺跡	縄文、弥生	散布地
松川村	MR-75	西原遺跡	縄文	散布地
松川村	MR-76	南原近遺跡	縄文	散布地
松川村	MR-77	網野原反遺跡	縄文	散布地
松川村	MR-78	有明山社大門北遺跡	縄文	散布地
松川村	MR-79	大門南遺跡	縄文	散布地
松川村	MR-80	二ツ家神戸遺跡	縄文	散布地
松川村	MR-81	南河邊遺跡	平安	散布地
松川村	MR-82	舟岩遺跡	散布地	散布地
松川村	MR-83	神戸遺跡	縄文	散布地
松川村	MR-84	七城野遺跡	縄文	散布地
松川村	MR-85	根元が塚古墳	古墳	古墳
松川村	MR-86	板沢カヌエ古墳	古墳	古墳

地域	番号	遺跡名	主な時代	種別
松川村	MR-87	牛窪の宮古墳	古墳	古墳
松川村	MR-88	牛窪遺跡	縄文	散布地
松川村	MR-89	南海原南原遺跡	縄文	散布地
松川村	MR-90	西原渡遺跡	弥生	散布地
池田町	ID-55	若松古墳	中世	城跡跡
池田町	ID-56	平在家遺跡	縄文	散布地
池田町	ID-57	徳傳寺前遺跡	古墳	遺跡跡
池田町	ID-58	徳傳寺前田遺跡	弥生	散布地
池田町	ID-59	徳傳寺前田遺跡	縄文	散布地
池田町	ID-96	境畑遺跡	古墳、平安	散布地
池田町	ID-97	若宮遺跡	縄文	散布地
池田町	ID-98	宮下遺跡	縄文	散布地
池田町	ID-99	宮下古墳	古墳	古墳
池田町	ID-100	石矢塚古墳	古墳	古墳
池田町	ID-101	大林遺跡	古墳	散布地
池田町	ID-102	高沢原遺跡	中世	城跡跡
池田町	ID-103	小丸遺跡	中世	散布地
池田町	ID-104	塚の原古墳	古墳	古墳
池田町	ID-105	越前塚古墳	古墳	古墳
池田町	ID-106	赤田見氏館跡	中世	城跡跡
池田町	ID-107	塚田古墳	古墳	古墳
池田町	ID-108	三和家遺跡	縄文	散布地
池田町	ID-109	川合神社土宮遺跡	不明	散布地
池田町	ID-110	万海塚遺跡	古墳	散布地
池田町	ID-111	輪上遺跡	縄文	散布地
松本市	MM-114	松本城	中世	城跡跡
松本市	MM-90	平瀬古跡	不明	城跡跡
松本市	MM-91	法住寺跡	不明	寺跡跡
松本市	MM-92	平瀬遺跡	古墳、平安、中世	散布地
松本市	MM-94	山田遺跡	不明	散布地
松本市	MM-95	久作遺跡	不明	散布地
松本市	MM-100	上岡田遺跡	不明	散布地
松本市	MM-106	塩倉遺跡	縄文	散布地
松本市	MM-107	御山古墳	古墳	古墳
松本市	MM-108	神戸遺跡	不明	散布地
松本市	MM-109	下岡田遺跡	不明	散布地
松本市	MM-110	不明	古墳	古墳
松本市	MM-112	次郎丸古墳	古墳	古墳
松本市	MM-113	神岡古墳群	古墳	古墳群
松本市	MM-114	松岡七石山場遺跡	不明	散布地
松本市	MM-115	西原遺跡	古墳	散布地
松本市	MM-116	水波古遺跡	古墳	古墳群
松本市	MM-153	高田遺跡群	平安	散布地
松本市	MM-159	放光寺遺跡	古墳	社寺跡
松本市	MM-160	本村二ツ家遺跡	不明	散布地
松本市	MM-161	城山庭遺跡	不明	散布地
松本市	MM-162	樋+藤遺跡	奈良、平安	散布地
松本市	MM-163	狐塚遺跡	不明	散布地
松本市	MM-164	沢村北遺跡	不明	散布地
松本市	MM-165	西原塚古墳	古墳	古墳
松本市	MM-166	沢村遺跡	古墳	散布地
松本市	MM-167	田町遺跡	不明	散布地

凡例

- 第4・5図・第2表は、安曇野市域と、松川村・池田町・松本市の一部における遺跡分布図・一覧表である。
 - 第4図は、当該地域における遺跡分布を過時的に示したものである。第5図では、古墳時代の遺跡分布を示した。
 - 第4図に複合遺跡を示す場合は、古墳時代から古代への展開過程を明らかにする本調査の研究目的に基づいて、古墳時代、古代、中近世、弥生時代、縄文時代の順に優先した。
 - 第4・5図・第2表は、註4)安曇野市教育委員会編2010・文化庁文化財保護部編1983から引用した。
 - 遺跡番号は、安曇野市(豊科・穂高・三郷・飯倉・明科地域)については、註4)安曇野市教育委員会編2010の表記に準じた。松川村・池田町・松本市については、註4)文化庁文化財保護部編1983における遺跡番号を使用した。同図の備考号(松川村・池田町3、松本市18)の代わりに、MK(松川村)、ID(池田町)、MM(松本市)を付した。
 - 遺跡名称・時代・種別・位置は、基本的に引用元に関する。
- なお、註4)安曇野市教育委員会編2010の発行以後の発掘調査等で明らかになった知見を追加した箇所もある。

3 長野県における古墳の概要

前期から中期前半 長野県における古墳は、中信の松本市弘法山古墳、北信の長野市姫塚古墳、飯山市勘介山古墳、中野市蟹沢古墳、東信の佐久市瀧の峯1号墳・2号墳、南信の飯田市代田山狐塚古墳のように⁴⁷⁾、各地に拠点的に営まれた前方後方墳から始まった。中信では、方墳かと思われる松本市中山36号墳と、円墳の中山35号墳が弘法山古墳に後続する。前方後方墳は、その前段階と考えられる前方後方形周溝墓を含めて県内に複数存在し、前方後円墳に先行する墳丘形態として評価されているが⁴⁸⁾、多くは詳細な議論を行うための前提的な情報が乏しい。

また、古墳時代前期の中頃になると、県内最大の千曲市森将軍塚古墳を嚆矢として前方後円墳が登場した。いくつかの地域を単位として前方後円墳が営まれた北信地域のうち、善光寺平南部の千曲川右岸地域では、森将軍塚古墳、有明山将軍塚古墳を経て、中期前半の倉科将軍塚古墳、土口将軍塚古墳へ至る首長系譜が想定されている⁴⁹⁾。また、森将軍塚古墳と中野市高遠山古墳、長野市川柳将軍塚古墳と和田東山3号墳、土口将軍塚古墳と中野市七瀬双子塚古墳が相似形墳と評価されており、善光寺平南部地域を頂点として和田東山古墳群や川柳将軍塚古墳などの集団が下部組織として地域社会を構成する社会構造が想定されている⁵⁰⁾。

その他、長野市篠ノ井高畑遺跡・飯田市八幡原遺跡などにおいては、方形周溝墓群が確認された。

中期 中期前半段階をもって北信地域の継続的な前方後円墳の築造が終了すると、中期中頃から大型古墳の分布傾向が南信地域にあたる伊那谷を中心とするようになり⁵¹⁾、飯田市兼清塚古墳を皮切りに前方後円墳の築造が当該地域で活発となる。一方、北信地域では、大型前方後円墳の終焉以後、合掌形石室の展開と、積石塚古墳群の形成という独自の特徴が顕著になっていく。比較的最早い段階に現れた合掌形石室には、長野市大星山2号墳・地附山2号墳、中野市金鑑山古墳などの例がある。積石塚古墳群は、須坂市八丁鑑塚や、長野市杉山古墳群・大室古墳群などが存在する。なお、これまで4世紀後半と考えられてきた積石塚古墳の八丁鑑塚1号墳は⁵²⁾、出土遺物を再整理した結果、古墳時代の中期前半から中頃まで時期が下がる可能性が高くなってきた⁵³⁾。北信における積石塚古墳は、合掌形石室登場と横並び、もしくは若干後続して出現したようである。

ところで、古墳時代中期以降における長野県の古墳文化を特徴づけるものの一つに、馬匹生産をはじめとした渡来系文化をあげることができる。北信地域は、弥生時代から半島系の文物が豊富にみられる地域であるとともに⁵⁴⁾、積石塚古墳や合掌形石室の系譜を朝鮮半島に求めようとする発言も聞かれる⁵⁵⁾。しかし、合掌形石室は、その構造が堅穴系横口式石室の一種であり⁵⁶⁾、「冢形墓室」の一形態として中期に新出した可能性が指摘されるなど⁵⁷⁾、今のところ列島内外に直接的な系譜を想定できない状況にある⁵⁸⁾。積石塚古墳も、その造営に関して周辺の地形・地質的要因に重きをおく環境自生説⁵⁹⁾を採る立場があり、渡来系文化との関係性を直ちに指摘することは難しい。また、鑑塚2号墳、大室155・168・221・225号墳のように、日本列島在来の植輪を伴う積石塚古墳の存在は、多角的な視点から出自を再検討することの必要性を示唆している。

南信地域では、飯田市新井原2号墳・同市高岡4号墳など、中型・小型墳の周溝内に作られた土壇や単独の土壇内に馬の埋葬がみられ、馬匹生産が行われていたことが理解できる⁶⁰。また、飯田市妙前大塚古墳・溝口の塚古墳に代表されるような豊富な副葬品をもつ古墳が多いことと合わせて、畿内中央政権による東国経営戦略として、陸上交通網の整備に必要な馬匹生産を担った当該地域の重要性うかがわれる⁶¹。

中信地域では、大規模な古墳がみられないものの、松本市桜ヶ丘古墳から金銅製天冠が出土するなど、北信・南信地域と同様に渡来系文化が流入したことを示す証左もある。

また、中信の松本市向畑古墳群、北信地域の長野市篠ノ井高畑古墳群・杉山古墳群・大室古墳群、東信の北西の久保古墳群、南信の飯田市宮垣外古墳群・月の木古墳群など、小型墳で構成される初期群集墳も各地に存在する。これらの中には、篠ノ井高畑遺跡のように古墳時代前期から同地域内で展開していく事例もある⁶²。

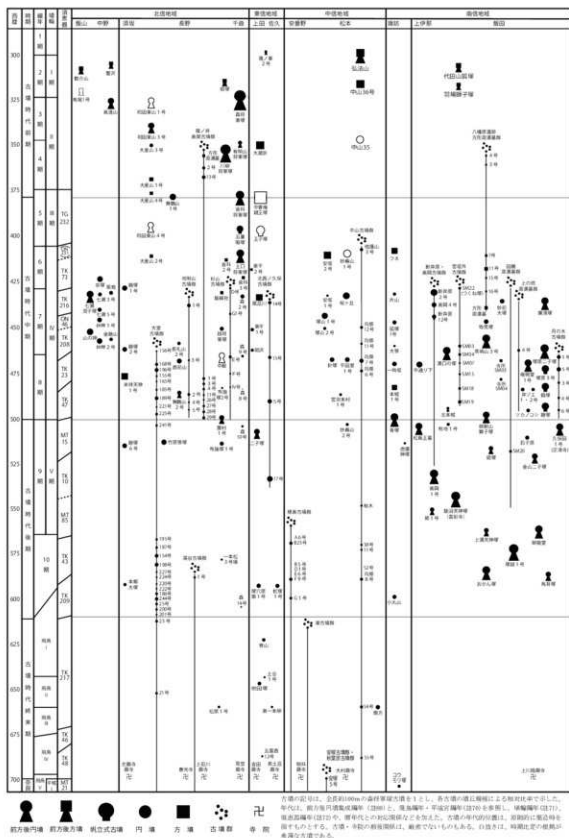
中期末から後期・終末期 ところで、須恵器編年のTK47型式段階になると、北信地域における造墓活動が退潮し⁶³、大室古墳群でもMT15・TK10型式段階の事例が希薄となる⁶⁴。中・東信地域の様相をみると、年代の明らかな事例が少ないこともあるが、この時期を境として造墓行為が縮小する傾向が看取できる。

古墳時代後期後半以降、北信・東信・中信・南信すべての地域には、中小規模な円墳で埋葬施設が横穴式石室をもつ、いわゆる後期群集墳が多数みられるようになる。中信地域の安曇野市穂高古墳群・潮古墳群、松本市中山古墳群、北信地域の太室古墳群などは、その代表的な事例である。概ね古墳時代後期後半段階に造営が展開していき、追葬を含む稼働期間が奈良時代以降まで継続する事例も存在する。南信地域では、引き続き前方後円墳の築造が行われていたが、6世紀末の馬背塚古墳を最後に、その築造は終焉を迎えた⁶⁵。

なお、6世紀末を境として、装飾付大刀や馬具の分布が、南信地域だけでなく信州全域に認められるようになる。いずれも中小規模の円墳に認められることから、墳形によって身分秩序を示すシステムが解体し、畿内政権の支配の広がりが中首長にまで及ぶようになったとする指摘がある⁶⁶。

寺院の出現 全国的に大型墳の築造が停止する7世紀になると、全国各地で寺院の建立がみられるようになる。長野県内においても、7世紀後半から8世紀にかけて続々と古代寺院が造営された。特に、7世紀後半からの事例としては、須坂市左願寺廃寺、長野市善光寺、千曲市兩宮廃寺、安曇野市明科廃寺、飯田市上川路廃寺などをあげることができる⁶⁷。

この内、左願寺廃寺では、善光寺瓦と同范の資料が出土した。また、兩宮廃寺は、埴科郡の郡寺であった可能性が指摘されるとともに、後の貞観8(866)年に定額寺とされた屋代寺ではないかともいわれる。潮古墳群の造営主体が営んだものと思われる明科廃寺からは、岐阜県飛騨市に所在する寿楽寺廃寺から出土した瓦と同范の資料が出土しており⁶⁸、当時の集団関係と技術移転の問題を追究する上でも興味深いものといえよう。上川路廃寺の造営背景は、今のところ詳らかでないが、御旗堂古墳や、馬背塚古墳を造営した集団の後裔によるものかもしれない。(北澤)



第6図 長野県の主要古墳と古代寺院(註47)風間2011、(註51)風間2013などをもとに加筆して作成)

4 穂高古墳群および潮古墳群の概要

(1) 穂高古墳群の概要

本学では、穂高古墳群を以下のように定義・分類している⁷⁰⁾。

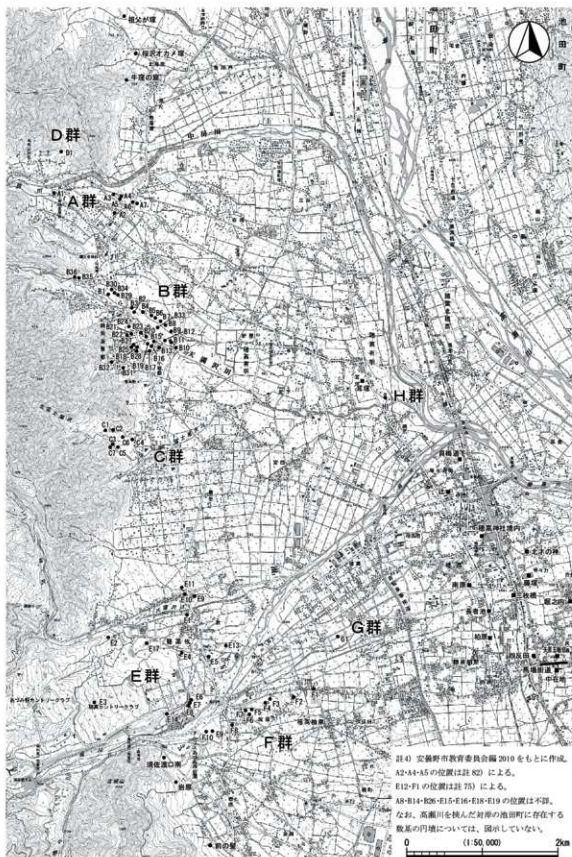
1. 「穂高古墳群」は、『信濃史料』において分類されたA群～D群⁷⁰⁾、『国鉄復線化等開発地域内埋蔵文化財緊急分布調査報告書』において分類されたE群～G群⁷¹⁾、『穂高町の古墳』において分類されたH群⁷⁰⁾、『長野県史』によって旧穂高町地域に分布する古墳群を構成する一部とされた松川村所在古墳⁷²⁾によって構成される。
2. 従来、古墳群全体を示す名称として多く用いられてきた「有明古墳群」は、A群～D群までを指す場合と旧穂高町の古墳全体を示す場合の2通りの語義をもち、なおかつ松川村所在古墳を含める場合と含めない場合があることから、これを用いず「穂高古墳群」の名称に統一する。
3. 単独墳については、現在までの研究史上の慣習やG1号墳(上原古墳)のように未知の古墳が周囲に存在している(していた)可能性⁷³⁾を考慮して、古墳1基のみで構成されていても「群」とする。
4. A群～H群は、穂高古墳群を構成するそれぞれ独立した支群とし、いくつかの支群の総称として習慣上・便宜上使用してきた「有明古墳群」・「西穂高(牧・塚原)古墳群」などの名称は使用しない。
5. 各支群を構成する古墳の総数は、『信濃史料』以降「所属支群を示すアルファベット+通し番号」の表し方で文献上に確認できたものを数え上げた。また、穂高古墳群全体を構成する古墳の総数は、各支群の合計に加え、以前に文献上で存在が確認されているもの(例: 孤塚4・5号墳)を考慮して「85基以上」とする。

以下、上述の諸文献や各報告書をもとにして、支群ごとの概要と、主な事例について紹介しておく(第7～14図・第3表)。

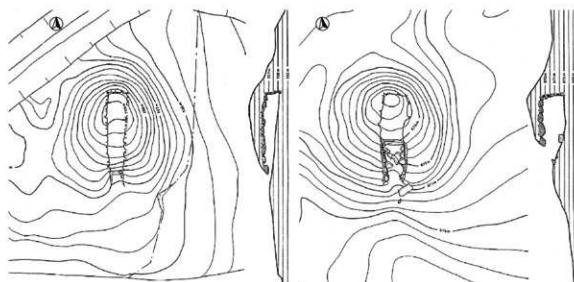
A 群 宮城地区に位置し、油川左岸に沿って分布している。昭和39(1964)年の穂高町教育委員会による悉皆調査では、A群中に8基が存在していたが、そのうち4基が埋滅している。現存する4基のうち、もっとも標高が高い位置にA1号墳があり、残りの3基は約800m～約1,100m離れた場所にある。

A1号墳(陵塚)は、墳丘・石室ともに原形に近い形で残っている(第8図-1)。石室無袖の横穴式石室であり、天井石が2石ある(第9図-1)。石材は、花崗岩が用いられている。土師器、須恵器(甕埴・杯・提瓶)、武器(直刀)、馬具が出土したといわれているものの、所在が不明である。昭和57(1982)年に、筑波大学によって墳丘・石室の実測調査が行われたが、出土遺物が現存していないため、時期を確定することは困難であった。しかし、同じく狭長無袖の横穴式石室を有するG1古墳(上原古墳)の出土遺物を参考に、6世紀後半を上限とする古墳と想定されている⁷⁰⁾。

A6号墳(犬養塚古墳)は、穂高古墳群中では規模の大きなものである。石室は、東壁のすべてと西壁の一部および奥壁が残っているが、天井石を欠く⁸⁰⁾。須恵器(杯・杯蓋・平瓶・横瓶)、武器(直刀・鐔・鉄鎌)、馬具(雲珠・杏葉・轡・鍔・鉸具)、装身具(耳環・勾玉・管玉・切子玉・ガラス小玉)といった多



第7図 穂高古墳群と周辺の古墳時代遺跡



1. A1号墳(陵塚) 墳丘

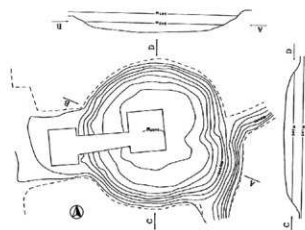
2. B1号墳(ちいが塚) 墳丘



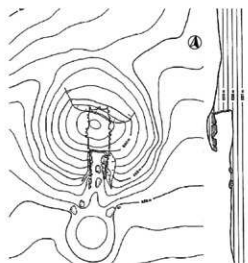
3. F10号墳 墳丘



4. G1号墳(上原古墳) 墳丘



5. H1号墳(耳塚) 墳丘



6. 祖父が塚古墳 墳丘

0 (1:400) 10m

第8図 穂高古墳群の墳丘

(1・2・6 : 註79, 3 : 註73, 4 : 註109, 5 : 註21)

量の副葬品が、有明神社の社宝となっている(第10図-1)。昭和57(1982)年に筑波大学によって遺物の実測調査がおこなわれ、須恵器の型式から6世紀後半のものとして想定された⁸¹⁾。

A 8号墳は、墳丘を失っており、内部主体も不明である。付近から、土師器、須恵器(甕・甕・高杯・提瓶)、馬具(鈎具)、装身具(耳環・水晶製切子玉)が採集された⁸²⁾。

B 群 松尾・四つ堀・小岩岳地区に位置し、天満沢川兩岸に沿って36基が分布している。

B 1号墳は、ちいが塚とも呼ばれ、B群中でも規模が大きい古墳であり、墳丘は、半壊しているものの、石室がほぼ完全に残っている(第8図-2)。無袖の横穴式石室であり、天井石6石のうち1石が石室内に落ち込んでいる(第9図-2)。右壁に巨大な自然石を用いていることが特徴である。昭和57(1982)年に筑波大学によって墳丘・石室が測量調査されたが、出土遺物が不明なため、時期を確定することは困難であった。そのため、石室の形態・構造が類似する松川村祖父が塚古墳から出土した資料の年代観から、7世紀前半に比定された⁸³⁾。

B 5号墳(金堀塚)は、東壁のみが残っている。石室の2箇所に焚火の跡がみられた⁸⁴⁾。無袖の横穴式石室で7世紀前半の築造と思われる⁸⁵⁾。大正7(1918)年に、南安曇教育会によって発掘調査され⁸⁶⁾、人骨3体、須恵器(長頸瓶・提瓶)、武器(直刀・鉄鎌)、馬具(轡・鈎具)、装身具(耳環・勾玉・管玉・小玉)、茶碗のほか多数の遺物が出土した⁸⁷⁾(第10図-2)。

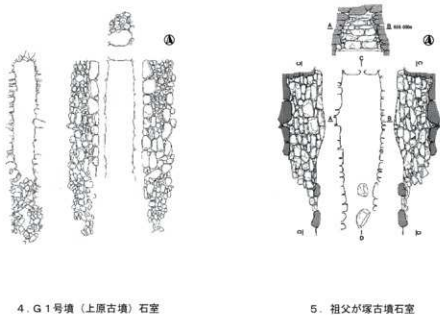
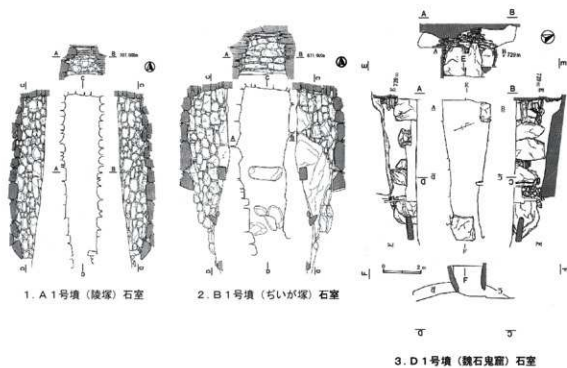
B 23号墳(祝塚)は、墳丘が半壊し、わずかに残る石室も土が流入しており詳細不明である⁸⁸⁾。祝塚のある地籍には、ほかに7基の古墳があったとされ、うち2基から出土した土師器(甕・杯)、須恵器(壺・高杯・提瓶)、武器(直刀)、馬具(金鍍金菱形留金具)、装身具(耳環・切子玉・勾玉・管玉)の一部が有明神社で保管されている⁸⁹⁾(第13図-2)。これらの遺物については、昭和57(1982)年に、筑波大学によって遺物の実測調査がおこなわれ、須恵器の年代から6世紀後半の所産とされた⁹⁰⁾。

C 群 富士尾地区に位置し、富士尾沢上流付近の兩岸に7基が分布している。大型石室を持つ古墳はなく、小・中型の石室を持つ古墳で構成され、確認されている石室はすべて横穴式石室である⁹¹⁾。

D 群 宮城地区の中房川左岸に位置する、八面大王の居住窟伝承で著名な「魏石鬼窟」⁹²⁾にあたるD 1号墳が単独で存在する。

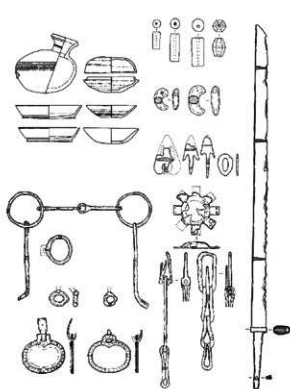
D 1号墳は、墳丘をもつ古墳ではなく、自然石である巨石を天井石に見立て、その下部を横穴状に利用した埋葬施設である(第9図-3)。巨大な花崗岩の一枚岩を天井石とし、板石と角礫を用いて側壁と奥壁が構築された⁹³⁾。珍しい事例であるが、あたかも片袖の横穴式石室のような姿をみせており、規模や副葬品などに関しては、穂高古墳群における他の古墳との違いはみられない⁹⁴⁾。大正10(1921)年に踏査した鳥居龍蔵は、巨石の下に埋葬施設をもつことから「ドルメン式古墳」と呼んだ⁹⁵⁾。鳥居氏の踏査以後も調査がおこなわれ、大正11(1922)年に宮坂光次による実測調査⁹⁶⁾、昭和61(1986)年に三木弘による発掘調査がおこなわれた⁹⁷⁾。副葬品は、須恵器破片(甕・杯・杯蓋・提瓶・平瓶)、武器(鉄鎌)、馬具(鉄地金剛張り飾金具・留金具破片・半球形飾金具・金具破片)、装身具(耳環)が出土した⁹⁸⁾(第10図-4)。このうち、須恵器の年代をもとにして、三木は築造年代を6世紀後半に位置づけている⁹⁹⁾。

古墳時代以降の遺物としては陶磁器、釘、砥石、古銭が出土した。このうち陶磁器の年代は18世紀後半～19世紀中葉の間とみられている。これは天井石正面に彫刻された3体の観音像や天井石上の御堂が江戸時代に作られたという古伝と一致する。石室壁面や天井石には煤が付着し、焼土や灰が堆積土にみ

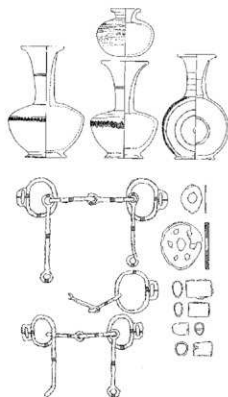


0 1:200 5m

第9図 穂高古墳群の石室
(1・2・5:註79、3:註21、4:註109)



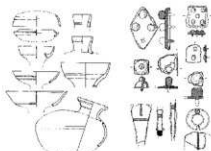
1. A6号墳 (大妻塚)



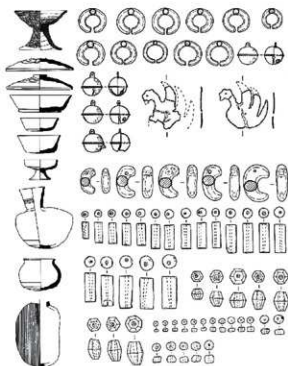
2. B5号墳 (金堀塚)



3. B23号墳 (祝塚) 付近



4. D1号墳 (鏡石鬼窟)



5. 旧有明村 (東京国立博物館・宮内庁蔵)

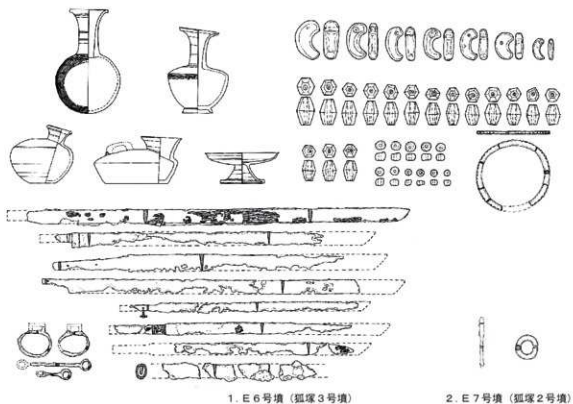
土器：S=1/10 武器・馬具：S=1/8 馬具（帶金具）装身具：S=1/4

第10図 穂高古墳群出土の主要遺物(1) (註21・註77・註118)

られることから、石室内で断続的に火が焚かれていたことが窺われる。こうした状況から後世にこの古墳は修験の場としても利用されていた可能性も指摘されている¹⁰⁰⁾。

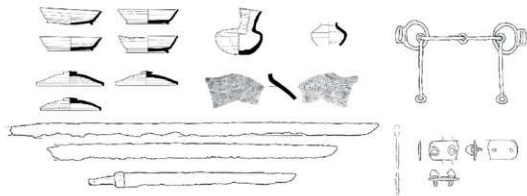
E 群 鳥川と川窪沢川に挟まれている台地の東縁である牧地区に位置し、既に埋滅した古墳も含めて18基が確認されている。

E 6号墳(狐塚3号墳)は、明治44(1911)年に発掘されたE群中最大規模の古墳である。副葬品としては、須恵器(長頸瓶・高杯・杯蓋・平瓶・横瓶)、武器(直刀・鈎・槍身・鉄鏃)、馬具(轡)、装身具(耳環・切子玉・白玉・勾玉・管玉・青銅製銅)が出土し(第11図-1)、東京国立博物館・徳高神社・満願寺



1. E 6号墳 (狐塚3号墳)

2. E 7号墳 (狐塚2号墳)



3. E 13号墳 (浜塚塚)

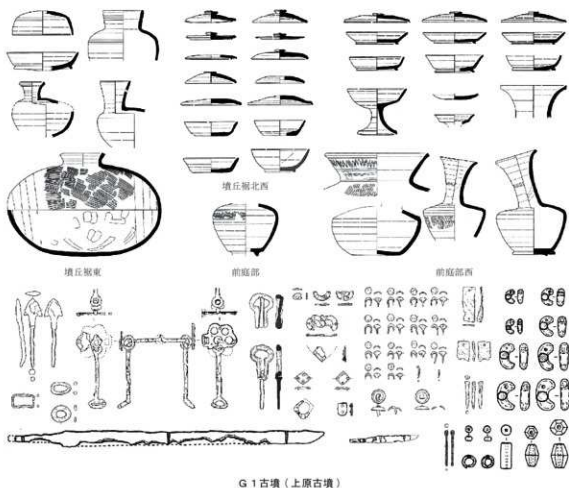
土器: S=1/10 武器・馬具: S=1/8 馬具(帶金具): S=1/4

第11図 穂高古墳群出土の主要遺物(2) (註21、註104)

などに保管されている¹⁰¹⁾。直刀は、平棟平造りの大刀で、これに劍形形の鐏1個がともなっていた。須恵器には、6世紀末の平瓶、7世紀前葉から7世紀中葉の長頸壺・フラスコ形長頸瓶、8世紀前葉の平瓶・高盤がみられる¹⁰²⁾。

E7号墳(狐塚2号墳)は、昭和26(1951)年に、國學院大學教授であった大場登雄の指導により発掘調査された。武器(直刀・鐏・鉄鎌)、工具(刀子)、装身具(耳環)が出土した¹⁰³⁾(第11図-2)。

E13号墳(浜塚塚)は、E群最東端に位置しており、平成3(1991)年に穂高町教育委員会によって発掘調査が行われた。後世の整地・耕作などの擾乱による損壊が著しく墳形は判然としないが、報告書では約100m～約120mの円墳である可能性が指摘されている。石室は一部残存しており、全長約8.6mの無袖横穴式石室である。遺物は須恵器(杯蓋・高台杯・平瓶・小壺・甕)、武器(直刀・鉄鎌)、馬具(轡)などが石室から出土している(第11図-3)。報告者の1人である白居直之は、遺物の年代と出土位置から、E13号墳の築造と初葬は7世紀中頃から後半、7世紀末までに追葬があり、8世紀前葉に閉塞されたとしている。また、E13号墳に隣接するE12号墳については、古墳ではないことが報告された¹⁰⁴⁾。よって、過年度は掲載していたE12号墳を本章の図表から削除した。



G1古墳(上原古墳)

土器：S=1/10 武器・馬具・石製品：S=1/8 装身具：S=1/4

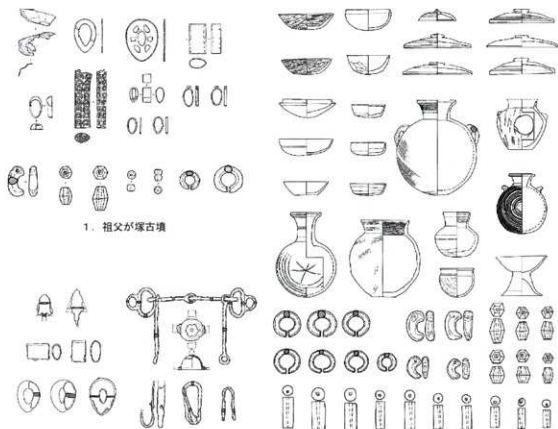
第12図 穂高古墳群出土の主要遺物(3)(註21, 註109)

F 群 塚原地区に位置し、柏原沢右岸の標高約605m～約650mの間に10基が列在している。F群は、ほとんどが破壊されており、墳丘・内部主体・副葬品の詳細を知ることはできないが、10基の墳丘規模は大正10(1921)年の調査により判明しており、それによると大小5基ずつの2グループに分けられる¹⁶⁶⁾。

F 1号墳(一本杉古墳)は、F群中最東端に位置する。無袖の横穴式石室であり、天井石はない。昭和50(1975)年に徳高町教育委員会による発掘調査がおこなわれた。須恵器(高台付杯)の破片1点が出土したほか、床面中央部からは、小豆粒大の骨片が掌一杯ほど出土した¹⁶⁶⁾。

F 9号墳は、F 10号墳(第8図-3)とあわせて二つ塚と呼ばれ、平成21(2009)年より國學院大學考古学研究室が調査を実施している。墳丘の壊変が著しく、天井石を欠くものの、遺存状態の良い無袖の横穴式石室をもつ。土師器(碗)、須恵器(蓋杯・子持壺・長頸壺・フラスコ形長頸瓶・甕ほか)、武器(直刀・両頭金具・鉄鏃)、馬具(轡・鞍金具・鍔紐・鉸具・飾金具・鍔吊金具)、装身具(勾玉・管玉・切子玉・ガラス小玉ほか)などのほか、ウマの骨や、銭貨・釘・瓦も出土した¹⁶⁷⁾。かつては、諏訪社の祠が祀られていた。

G 群 上原地区の水田中に埋没した1基が確認されており、今のところG群はこの1基のみをさ



1. 祖父が塚古墳

2. 出土地不明(有明神社蔵ほか)

土器: S=1/10 武器・馬具: S=1/8 装身具: S=1/4

第13図 穂高古墳群出土の主要遺物(4) (註21・註77)

す。平成11(1999)年の県営担い手育成基盤整備事業にともなう調査の際に、未発見の古墳が埋没していないか検討されたが、新たな古墳は発見されていない¹⁰⁰⁾。しかし、上原古墳の東にあたる小字「塚田」にて大石数個が掘り出されたという話や、昭和20年代に今井沢右岸で石積みか掘り出されたとの話も残されている¹⁰⁰⁾。

G 1号墳(上原古墳)は、7世紀前半に築造されたとみられる円墳で、無袖の横穴式石室を持つ(第7図-4・第8図-4)。昭和5(1930)年に猿田文紀、昭和7(1932)年に今井眞樹が調査を行った¹⁰⁰⁾。その後、昭和57(1982)年に筑波大学が出土遺物の実測調査を行い¹⁰¹⁾、武器(直刀)、馬具(杏葉・轡)、工具(刀子)、装身具(耳環・勾玉・管玉・切子玉・ガラス小玉)を図化した。また、平成14~16(2002~2004)年に安曇野市教育委員会が発掘調査を実施しており、既往の出土資料も改めて再報告された。同調査では、須恵器(広口壺・長頸壺・短頸壺・甕・甌・有台杯・高杯・杯蓋・平瓶・横瓶)、武器(鉄鎌)、馬具(鉸具・留金具)が出土した(第12図)。出土須恵器は、主に尾北産・美濃須賀産とみられるが、歪んだものがほとんどであった。多くが墳丘周辺から故意に細かく割られた状態で出土しており、副葬品ではなく、墓前祭祀に供されたものと考えられる¹⁰²⁾。

H 群 耳塚地区に位置し、穂高川西側の最低位段丘の先端に築かれたH 1号墳1基のみをさす。耳塚とも呼ばれるH 1号墳は、昭和61(1986)年に墳丘測量されたが、墳頂部には大塚神社が鎮座しており削平を受けている(第8図-5)。魏石鬼八面大王にまつわる塚や¹⁰³⁾、耳の神様である大塚様の祠としても知られていたが¹⁰⁴⁾、その詳細は不明である。

松川村所在古墳 安曇野市の北側に接する松川村では、穂高古墳群に近い小字鼠穴に、祖父が塚古墳のほか、損壊・埋没した牛窪の窟古墳・桜沢オカメ塚古墳の存在が知られている¹⁰⁵⁾。いずれも単独墳であり、ほかにも数基の古墳が存在していた可能性がある。

祖父が塚古墳は、ほぼ完存する無袖の横穴式石室を持ち(第8図-6・第9図-5)、昭和57(1982)年に筑波大学が墳丘と石室の実測調査をおこなった。副葬品としては、土師器、武器(甲冑・鉾・大刀)、装身具(玉類)などが出土したと伝えられている。ただし、現存しているものは、宮内庁書陵部に保管されている武器(頭椎大刀)、装身具(耳環・勾玉・切子玉・ガラス小玉)のみである¹⁰⁶⁾(第13図-1)。

その他 旧堀金村内に所在する須砂渡口南古墳・岩原古墳・前の髪古墳・曲尾古墳群・古城下古墳のうち¹⁰⁷⁾、須砂渡口南古墳・岩原古墳は、F群に近い位置関係にあることから、今後の検討によって穂高古墳群の一部と認められる可能性がある。

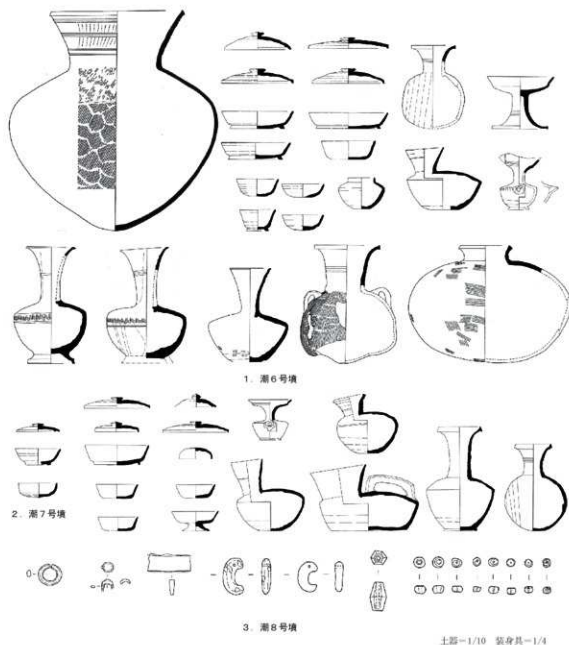
その他、旧有明村内の古墳から出土したされる土師器(碗・壺・高杯)、須恵器(壺・高杯・杯蓋・提瓶・平瓶・横瓶)、武器(直刀・鐔・鉄鎌)、工具(刀子)、馬具(轡・鈴)、装身具(耳環・金銅製鳳凰形銅葉・勾玉・管玉・切子玉・白玉)などが、宮内庁や東京国立博物館に保管されている¹⁰⁸⁾(第10図-5、第13図-2)。須恵器の年代は、6世紀後半~7世紀前半のものが多い¹⁰⁹⁾。これらの遺物のうち、鳳凰形銅葉は、奈良県藤原木古墳出土の天冠に表現されている鳥形の装飾に酷似しており注目される¹²⁰⁾。

(原武)

(2) 潮古墳群の概要

飛騨山脈東麓に位置する徳高古墳群から、犀川を挟んだ潮古墳群までは、直線距離で約8～10kmを隔てているが、造営期間に重複が見られる古墳群であるため、参考までに概要を記しておきたい。

安曇野市明科東川手の潮神明宮付近に所在する潮古墳群では、今までに9基の古墳が確認されている。その中で、6・7号墳では平成10(1998)年に、8号墳では平成17(2005)年に発掘調査が実施された¹²¹⁾。



第14図 潮古墳群出土の主要遺物(註25、註121)

6号墳は、安曇野市唯一の方墳で周溝をともなうが、後世の擾乱を受けその墳丘の形状は判然としな
い。石室も保存状態が悪く、遺物などの出土もみられないが、周溝からは7世紀第3四半期および7世
紀末～8世紀初頭の2時期にわたる遺物が出土した。主体部からは、武器(鉄鎌・刀子・銀製の刀装具の
破片)、武具(鉄金具)、須恵器(杯・杯蓋・平瓶・小型壺)、装身具(ガラス小玉)、人骨が出土している
(第14図-1)。周溝からは、須恵器(杯・杯蓋・小型壺・高杯・長頸壺・平瓶・甕・横瓶・提瓶・盤・大
甕・甕)、ウマの歯、銅鏡が出土している(第14図-1)。銅鏡については、保存状態が悪く全体の形状は
判然としなが、仏具として捉えられるため、明科庵寺との関係、被葬者と当時の政権との関係を示す
遺物であるとされる¹²⁰⁾。

7号墳は、石室・周溝ともに残存状況が悪いが、僅かに残った周溝から円墳であると推定されている。
出土遺物も少ないが、6号墳と同時期と推定される。主体部からは、武器(鉄鎌・鐔)、武具(鉄金具)、装
身具(ガラス小玉・メノウ製勾玉)が出土しており、周溝からは須恵器(杯・杯蓋)が出土している¹²¹⁾(第
14図-2)。

8号墳は、道路拡幅部分の狭小な調査のため古墳の全容は未確認であるが、石室床面に礎が敷き詰め
られ、玄室・羨道が確認されている。主体部からは、装身具(メノウ製勾玉・金環・水晶製切子玉・濃紺
の丸玉・白玉・ガラス小玉)、鉄製品が出土しており、周溝からは7世紀末の須恵器(高杯・長頸壺・平
瓶・甕・杯・蓋杯・提瓶)、ウマの歯が出土している¹²²⁾(第14図-3)。

このほか、6・7号墳の周辺から7基の墓坑が検出されている。そのうちの2基が古代の墓坑であり、
片方からは副葬品としてフラスコ形長頸瓶が出土している。ほかは、近世の墓坑であると推測されてい
る。また、同古墳周辺から33軒の住居址も検出されており、4軒が4世紀前半の古墳時代前期に属する
住居址であることが判明している¹²³⁾。(大嶋)

註

- 1) 片田正人・磯見博1964「塩尻」『5万分の1地質図幅説明書』金沢第54号、地質調査所。日本地誌研究所編1972『日本地誌』第11巻(長野県・山梨県・静岡県)、二宮書店。松本盆地団体研究グループ1977「松本盆地の第四期地質-松本盆地の形成過程に関する研究(3)-」『地質学論集』第14号、日本地質学会。伊藤真人1983「北アルプス南東部 糠ヶ岳付近の河水地形と堆積段丘」『地理学評論』56巻1号、日本地理学会。日本の地質『中部地方1』編集委員会編1988『中部地方1』日本の地質4、共立出版株式会社。大池千尋1991「位置・地形・地質」『黒金村誌』黒金村誌刊行会。仁科良夫1991「第2章 地形と地質」『穂高町誌』自然編、穂高町誌刊行会。保尊祐之1991「第6章 植物」『穂高町誌』自然編、穂高町誌刊行会。塚原弘昭編2002「地震と防災 糸魚川-静岡構造線」、信濃毎日新聞社。原山智・大塚勉・酒井潤一ほか2009「松本地域の地質」地城地質研究報告(5万分の1地質図幅 金沢(10)第46号)、(独)産業技術総合研究所地質総合調査センター。笹本正治2013「水で結ばれたふるさと」、安曇野市。
- 2) 前掲註1)仁科1991。
- 3) 重野昭茂2003「高川扇状地の自然地形と古代開発」『信濃』第55巻第5号、信濃史学会。重野昭茂2007「自然環境による安曇野古代鳥川扇状地の開発」『信濃』第59巻第3号、信濃史学会。
- 4) 安曇野市教育委員会編2010「安曇野市埋蔵文化財包蔵地図」、安曇野市教育委員会。文化庁文化財保護部編1983「全国遺跡地図 長野県」、文化庁文化財保護部。
- 5) 那須野雅好・山田瑞穂ほか編1995「東小倉遺跡」三郷村

- の埋蔵文化財第2集、三郷村教育委員会。土屋和章2012『平成22年度安曇野市埋蔵文化財発掘調査報告書 東小倉遺跡採集資料整理報告』安曇野市の埋蔵文化財第5集、安曇野市教育委員会。
- 6) 豊科町誌編纂委員会編1995『豊科町誌』歴史編・民俗編・水利編、豊科町誌刊行会。
- 7) 森義直・山下泰永・島田哲男ほか2001『徳高町他谷遺跡 県営中山間総合整備事業 あづみ野地区に伴う緊急発掘調査報告書』、徳高町教育委員会。
- 8) 山田瑞穂・百瀬新治編1988『神沢遺跡・田多井古城下遺跡・そり表遺跡』堀金村の埋蔵文化財第1集、堀金村教育委員会。
- 9) 大澤哲・龍野守・岡崎光子1991『はうろく屋敷遺跡-川西地区県営はち整備事業に伴う緊急発掘調査報告書-』明科町の埋蔵文化財第3集、明科町教育委員会。樋口昇一・平林章・町田勝則編1993『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書11 明科町内2 北村遺跡』長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第14集、日本道路公団名古屋建設局・長野県教育委員会・(財)長野県埋蔵文化財センター。
- 10) 前掲註9)大澤ほか1991。
- 11) 山下泰永・土屋和章2016『芝宮南遺跡 徳高南小学校プール改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』安曇野市の埋蔵文化財第10集、安曇野市教育委員会。
- 12) 横山幸子・土屋和章・山下泰永2018『平成28年度安曇野市埋蔵文化財調査報告書』安曇野市の埋蔵文化財第15集、安曇野市教育委員会。
- 13) 土屋和章・松田洋輔・横山幸子・山下泰永2018『徳高神社境内遺跡1 新徳高支所建設事業に伴う第1次発掘調査報告書』安曇野市の埋蔵文化財第14集、安曇野市教育委員会。
- 14) 土屋和章・森義直2009『三枚橋・藤塚遺跡 安曇野市徳高交流学習センター建設工事に伴う埋蔵文化財報告書』安曇野市の埋蔵文化財第2集、安曇野市教育委員会。
- 15) 山田瑞穂・百瀬新治・島田哲男編1988『黒沢川右岸遺跡』三郷村の埋蔵文化財第1集、三郷村教育委員会。岡全寿・山田真一1999『町田遺跡 都市対策砂防事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書』、豊科町教育委員会。
- 16) 前掲註15)岡・山田1999。
- 17) 前掲註7)森ほか2001。前掲註9)大澤ほか1991。
- 18) 前掲註9)大澤ほか1991。
- 19) 寺島俊郎・森義直1987『徳高町矢原遺跡群(馬場街道遺跡) 県道柏谷町-田沢停線拡幅工事に伴う緊急発掘調査報告書』、徳高町教育委員会。
- 20) 前掲註14)土屋・森2009。
- 21) 桐原健1991『第二章第三節 古墳時代』『徳高町誌』第2巻歴史編上・民俗編、徳高町誌刊行会。
- 22) 大池千尋1991『第二編第一章第四節 古代の堀金村誌』上巻、堀金村誌刊行会。島田哲男1995『第一章第二節四 古墳時代の豊科』『豊科町誌』歴史編、豊科町誌刊行会。
- 23) 大澤哲編1995『上生野遺跡 生野地区農村基盤整備事業に伴う緊急調査報告書』明科町の埋蔵文化財第5集、明科町教育委員会。
- 24) 大澤哲・降幡健一編1994『明科町の遺跡 長野県東筑摩郡明科町遺跡詳細分布調査報告書』明科町の埋蔵文化財第4集、明科町教育委員会。大澤哲編2000『明科廃寺址 個人住宅建替に伴う緊急発掘調査報告書』明科町の埋蔵文化財第7集、明科町教育委員会。
- 25) 今村克・講地誠編2005『潮神明宮前遺跡Ⅱ-町道拡幅改良工事に伴う緊急発掘調査報告書-』明科町の埋蔵文化財第13集、明科町教育委員会。
- 26) 前掲註24)大澤編2000。
- 27) 桐原健2002『明科廃寺が提起する問題』『信濃』第54巻第12号、信濃史学会。
- 28) 前掲註9)樋口ほか編1993。前掲註24)大澤編2000。前掲註25)今村・講地編2005。
- 29) 前掲註24)大澤編2000。土屋和章・山下泰永2017『平成27年度安曇野市埋蔵文化財発掘調査報告書』安曇野市の埋蔵文化財第11集、安曇野市教育委員会。
- 30) 大澤哲・山本紀之編1998『坂城古宮址 主要地方道徳高明科線道路改良工事に伴う緊急発掘調査報告書』明科町

- の埋蔵文化財第5集、明科町教育委員会。
- 31) 山路直充2004『「甲斐」における瓦葺き寺院の出現』〔開発と神仏のかかわり〕、帝京大学山梨文化財研究所・古代考古学フォーラム実行委員会。
- 32) 廣田和徳編2005『安曇野農業水利事業あづみ野排水路埋蔵文化財発掘調査報告書-三郷村内-三角原遺跡』長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書76、農林水産省関東農政局安曇野農業水利事業所・(財)長野県文化振興事業団・長野県埋蔵文化財センター。
- 33) 前掲註19)寺島・森1987。
- 34) 前掲註8)山田・百瀬編1988。
- 35) 前掲註32)廣田編2005。
- 36) 前掲註15)岡・山田1999。
- 37) 土屋和章・山下泰水2014『平成24年度安曇野市埋蔵文化財発掘調査報告書 明科遺跡群栄町遺跡(第4次)』安曇野市の埋蔵文化財第7集、安曇野市教育委員会。
- 38) 山本紀之編2002『栄町遺跡-「子どもと大人の交流学習施設」建設に伴う緊急発掘調査報告書-』明科町の埋蔵文化財第6集、明科町教育委員会。
- 39) 前掲註23)大澤編1995。山本紀之・大澤哲編2001『はうろく屋敷遺跡Ⅳ-個人住宅建築工事に伴う第4次緊急発掘調査報告書-』明科町の埋蔵文化財第11集、明科町教育委員会。前掲註25)今村・清地編2005。
- 40) 土屋和章・鳥羽嘉彦・山下泰水2013『平成23年度安曇野市埋蔵文化財発掘調査報告書 明科遺跡群古殿屋敷(第1次)明科遺跡群 栄町遺跡(第3次)』安曇野市の埋蔵文化財第6集、安曇野市教育委員会。
- 41) 座席研究会編2010『古代産業の基礎研究:須忠器室の技術と系譜』、真陽社。
- 42) 田辺昭三・山田真一(ほか編)1999『筑摩東山上ノ山・吾蒲平窟群発掘調査報告書』、豊科町教育委員会。豊科町郷土博物館編1999『土器づくりのムラへの招待-上ノ山窟群・吾蒲沢窟群の発掘調査-』、豊科町郷土博物館。鳥羽英経2013『信濃における須忠器生産の動向』〔長野県考古学会誌〕第145・146号、長野県考古学会。
- 43) 島田哲男1995『第一章第四節 中・近世』〔豊科町誌〕歴史編、豊科町誌刊行会。
- 44) 百瀬長秀編1997『国営アルプスあづみの公園埋蔵文化財発掘調査報告書1-穂高古墳群-近世集石遺構の調査』長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書23、建設省関東地方整備局・(財)長野県埋蔵文化財センター。
- 45) 穂高町誌編纂委員会編1991『穂高町誌』第3巻(歴史編下)、穂高町誌刊行会。
- 46) 長野空襲を語り継ぐ会編1987『長野が空襲された 1945年8月13日 あれから50年』改訂版。
- 47) 風間栄一2011『長野県における古墳時代の二期について』〔特集各地における古墳時代の二期』帝京大学山梨文化財研究所報第51号、帝京大学山梨文化財研究所。
- 48) 大塚初重2006『科野における前方後方墳の世界』〔「シナノ」の玉墓の考古学』、雄山閣。田中裕2011『前方後方墳の歴史性』〔墳墓構造と葬送祭祀』古墳時代の考古学3、同成社。
- 49) 田中裕1996『前方後方墳の規格と地域社会』〔西野元先生退官記念論集 考古学雑論』、西野元先生退官記念会。風間栄一2012『中部高地』〔古墳時代研究の現状と課題』上、同成社。
- 50) 前掲註49)田中1996。
- 51) 松尾昌彦1993『中部山岳地帯の古墳』〔新版 古代の日本』第7巻、角川書店。西山克己2003『シナノの古墳時代中期とその前・その後』〔帝京大学山梨文化財研究所研究報告』第11集、帝京大学山梨文化財研究所。前掲註47)風間2011。風間栄一2013『長野県北部の埴相』〔日本考古学協会2013年度長野県大会研究発表資料集 文化の十字路 信州』、日本考古学協会2013年度長野県大会実行委員会。
- 52) 小林宇志編2000『長野県史跡『八丁館跡』-史跡公園整備に先立つ範囲確認調査報告書-』、須坂市教育委員会。前掲註47)風間2011。前掲註51)風間2013。
- 53) 吉田恵二・内川隆志・深澤太郎(ほか編)2015『長野県史跡八丁館塚-館塚1号墳・2号墳・6号墳出土資料の再整理-』須坂市埋蔵文化財発掘調査報告書第21集、須坂市教育委員会・國學院大学。

- 54) 風間栄一1998「長野県善光寺平の半島系遺物雑考」『Asianletter』第3号、「東アジアの歴史と文化」懇親会。風間栄一2000「科野・善光寺平における渡来系集団とその動向」『考古学ジャーナル』No.459、ニュー・サイエンス社。河野正訓2014「古墳時代鉄製品研究の諸論点-信濃地域-」『古代学研究所紀要』第20号、明治大学古代学研究所。河野正訓2015「大室古墳群の群構造とその変遷」『信濃大室積石塚古墳群の研究Ⅳ-大室谷支群ムジナゴロ単位支群の調査-』考察編、明治大学文学部考古学研究室・六一書房。
- 55) 斎藤忠1944「屋根型天井を有する石室墳に就いて」『考古学雑誌』第34巻第3号、日本考古学会。大場幹雄1951「信濃國の古墳群とその性格」『上代文化』第21輯、上代文化研究会。大塚初重1969「長野県大室古墳群」『考古学集刊』第4巻第3号、東京考古学会。西山克己1996「信濃の積石塚古墳と合掌形石室」『長野県の考古学』、長野県埋蔵文化財センター。飯島哲也1999「科野の積石塚古墳」『東國の積石塚古墳』、山梨県考古学協会。
- 56) 土生田純之1997「科野における横穴式石室の受容」『信濃』第49巻第4・5号、信濃史学会。
- 57) 前掲註49) 風間2012。
- 58) 前掲註49) 風間2012。
- 59) 森本六郎1926「金館山古墳」、雄山閣(1978年復刊)。前掲註53) 吉田・内川・深澤ほか編2015。
- 60) 小林正春2000「伊那谷の地形的特性」『第8回春日井市シンポジウム資料集』、第8回春日井市シンポジウム実行委員会。益谷恵美子2013「長野県南部の様相」『文化の十字路信州』研究発表資料集、日本考古学協会2013年度長野大会実行委員会。
- 61) 前掲註60) 益谷2013。
- 62) 風間栄一・石丸敦史・柴田洋考編2007「篠ノ井遺跡群(6)主要地方道長野上田線 塚崎バイパス 国庫補助地点」長野市の埋蔵文化財第117集、長野市教育委員会文化財課埋蔵文化財センター。
- 63) 風間栄一2001「信濃善光寺平における後期古墳の様相」『東海の後期古墳を考える』第8回東海考古学フォーラム三河大会、東海考古学フォーラム三河大会実行委員会。
- 64) 前掲註54) 河野2015。
- 65) 益谷恵美子2012「飯田古墳群」、長野県飯田市教育委員会。
- 66) 前掲註51) 松尾1993。
- 67) 原田和彦1994「千曲川流域における古代寺院」『長野市立博物館紀要』第2号、長野市立博物館。岡田正彦2004「考古学からみた飯井地方の古代仏教文化」『飯田市美術博物館研究紀要』14、飯田市美術博物館。倉澤正幸ほか2005「信濃の古代・中世の仏教文化と関係遺跡」、上田市立信濃国分寺資料館。倉澤正幸2012「出土軒瓦から考察した信濃の古代寺院」『信濃』第64巻第10号、信濃史学会。
- 68) 前掲註31) 山路2004。
- 69) 広瀬和雄1992「前方後円墳の畿内編年」『前方後円墳集』、山川出版社。鈴木一有2014「野中古墳の築造時期と階層論」『野中古墳と「倭の五王」の時代』、大阪大学出版会。
- 70) 西弘海1986「土器様式の成立とその背景」、真陽社。相原嘉之1997「大和 飛鳥・藤原地域の土器」『古代の土器5-1 7世紀の土器(近畿東部・東海編)』、古代の土器研究会。
- 71) 川西宏幸1978「円筒埴輪総論」『考古学雑誌』第64巻第2号、日本考古学会。
- 72) 田辺昭三1981「須志器大成」、角川書店。
- 73) 『報告2009』。
- 74) 信濃史料刊行会編1956『信濃史料』第1巻上、信濃史料刊行会。
- 75) 長野県教育委員会編1968『昭和42年度国鉄複線化等開発地域内埋蔵文化財緊急分布調査報告書』、長野県教育委員会。
- 76) 穂高町教育委員会編1970『穂高町の古墳』、柳沢書苑。
- 77) 河西清光・松尾昌彦1983「穂高古墳群」『長野県史』考古資料編(3)、長野県史刊行会。
- 78) 重野昭茂・山下泰永2001「第3章第2節3 上原古墳群

- および上原古墳の調査』『一本松・神の木・宗徳寺・南原道跡 穂高沢水系による開発史、上原古墳』、穂高町教育委員会。
- 79) 岩崎卓也・松尾昌彦・松村公仁1983「有明古墳群の再調査」『信濃』第35巻第11号、信濃史学会。上記文献では、G1号墳の築造年代について、出土した甕や装身具から6世紀後半と推定し、「狭長」な石室をもつ点で類似するA1号墳も同年代とみていた。しかし現在、G1号墳については、甕の年代観の修正を受けて、7世紀前半の築造とみられており(後掲註109)山下・土屋編2015)、同様にA1号墳の年代も引き下げる必要がある。
- 80) 前掲註77)河西・松尾1983。
- 81) 前掲註79)岩崎ほか1983。
- 82) 藤沢宗平1968「第四章 古墳文化とそれ以降の文化」『南安曇郡誌』第2巻上、南安曇郡誌改訂編纂会。
- 83) 前掲註79)岩崎ほか1983。
- 84) 前掲註77)河西・松尾1983。
- 85) 前掲註21)榎原1991。
- 86) 太田伯一郎1923「第三章第三節 道跡(古墳)」『南安曇郡誌』(旧版)、南安曇郡教育会。
- 87) 前掲註21)榎原1991。
- 88) 前掲註76)穂高町教育委員会編1970。
- 89) 前掲註21)榎原1991。
- 90) 前掲註79)岩崎ほか1983。
- 91) 前掲註79)岩崎ほか1983。
- 92) 魏碑城窟・魏石岩窟とも表記される。
- 93) 前掲註21)榎原1991。
- 94) 三木弘・寺島俊部・西山克己1987「長野県南安曇郡穂高町所在魏碑城窟古墳について」『信濃』第39巻第5号、信濃史学会。
- 95) 鳥居龍蔵1925「豊科町より」『有史以前の跡を訪尋ねて』、雄山閣。
- 96) 宮坂光次1922「信州南安曇郡有明村ドルメン類似の古墳に就いて」『人類学雑誌』第37巻第9号、東京人類学会。
- 97) 前掲註94)三木ほか1987。
- 98) 前掲註21)榎原1991。三木弘2006「有明古墳群の再検討(2)」『長野県考古学会誌』118号、長野県考古学会。
- 99) 三木弘2011「古墳社会と地域経営」、学生社。
- 100) 三木弘1990「魏石鬼窟古墳を利用した修験道」『穂高町郷土資料館』第12号、穂高町郷土資料館。
- 101) 前掲註21)榎原1991。
- 102) 三木弘1991「有明古墳群の再検討(1)」『信濃』第43巻第12号、信濃史学会。
- 103) 前掲註82)藤沢1968。大場磐雄1951「南安踏査記 六月二十日(水)」『楽石雑筆』巻33。
- 104) 臼居直之・土屋和章・山下泰永・中谷高志2021「穂高古墳群E13号墳(浜場塚)1 1号場整備事業に伴う第1次発掘調査報告書」安曇野市の埋蔵文化財第23集、安曇野市教育委員会。
- 105) 前掲註86)太田1923。
- 106) 中島豊明1976「穂高町塚原F1号墳調査概報」『長野県考古学会誌』第25号、長野県考古学会。
- 107) 『報告2009』～『報告2018・2019』および本書。
- 108) 前掲註78)重野・山下2001。
- 109) 山下泰永・土屋和章編2015「穂高古墳群G1号墳(上原古墳)第3次・第4次発掘調査」安曇野市の埋蔵文化財第8集、安曇野市教育委員会。
- 110) 猿田文紀1931「南安曇郡穂高町上原区古墳発掘に就て」『信濃考古学会誌』第2年第5・6輯、信濃考古学会。
- 111) 猿田文紀1933「南安曇郡穂高町上原区古墳発掘に就て」『史跡名勝天然記念物調査報告』第14輯、長野県・長野県教育委員会。今井流樹1933「穂高町上原の堅穴式石室郡古墳」『史跡名勝天然記念物調査報告』第14輯、長野県・長野県教育委員会。
- 112) 前掲註109)山下・土屋編2015。
- 113) 前掲註86)太田1923。
- 114) 前掲註21)榎原1991。
- 115) 春日賢一1921「北南安曇郡に於ける古墳」『信濃教育』第417号、信濃教育会事務所。
- 116) 前掲註79)岩崎ほか1983。
- 117) 前掲註4)安曇野市教育委員会編2010。

- 118) 中村浩ほか1997『東京国立博物館所蔵 須恵器集成Ⅱ (東日本篇)』、東京国立博物館。前掲註79) 岩崎ほか1983。前掲註77) 河西・松尾1983。
- 119) 前掲註21) 桐原1991。
- 120) 穂高町・穂高町教育委員会編1989『穂高町の古墳群とその人々』、穂高町・穂高町教育委員会。
- 121) 大澤哲・山本紀之・関全寿編2000『瀬神明宮前遺跡-明科町総合福祉センター建設に伴う緊急発掘調査報告書-』明科町の埋蔵文化財第8集、明科町教育委員会。前掲註25) 今村克・請地誠編2005。
- 122) 前掲註121) 大澤ほか編2000。
- 123) 前掲註25) 今村・請地編2005。
- 124) 前掲註121) 大澤ほか編2000。
- 125) 前掲註121) 大澤ほか編2000。
- 126) 平林潤郎1988「第三章第二節 松川の古墳」『松川村誌』歴史編、松川村誌刊行会。
- 127) 土屋和章・横山幸子・山下泰永2019「瀬道跡群 瀬神明宮前遺跡3 安曇野市消防団第7分団第1部詰所新築工事に伴う第3次発掘調査報告書」安曇野市の埋蔵文化財第18集、安曇野市教育委員会。

第3表 穂高古墳群一覧表

古墳名 (所在地)	地籍	墳丘		開口方位	横穴式石室			出土遺物	備考
		径(m)	高(m)		長(m)	幅(m)	高さ(m)		
A 1号墳 (横穴)	安曇野市穂高有明2111	(径)16.00 (幅)14.00	2.10		8.14 (奥)1.80		(奥)1.22	土師器・須恵器(鏡・釵・鏃・柄)・武器(直刀)・馬具	特定
A 2号墳	安曇野市穂高有明2196付付			S 20° E	4.00(推)				埋蔵
A 3号墳	安曇野市穂高有明2345-29	7.00(推定)			4.00(推)	1.00		板蓋器	埋蔵
A 4号墳	安曇野市穂高有明2345	(径)10.00 (幅)7.40	1.20						埋蔵
A 5号墳	安曇野市穂高有明2345	(径)6.60	0.60						埋蔵
A 6号墳 (大規模)	安曇野市穂高有明2348-2	(径)16.00 (幅)11.00	2.70	S 30° W	7.20	1.40	(奥)1.10	須恵器(鏡・鏃・平鏡・鍔付棒・柄)・武器(鉄鏃・直刀・鐙)・馬具(蓋・鍔・鏃・鏃・鏃・鏃)・鉄器(馬具)・土師器(馬具)・銅器(馬具)	埋蔵
A 7号墳 (板蓋)	安曇野市穂高有明2348	10.00~ 15.00	1.20		4.30	1.50	1.10		
A 8号墳	安曇野市穂高有明2111							土師器・須恵器(鏡・鏃・鏃・鏃)・馬具(鍔具)・鍔身具(鍔頭・切子玉)	埋蔵
B 1号墳 (穴・小塚)	安曇野市穂高有明2179-口	15.00	2.50	S 50° W	9.20	(上)0.88 (下)2.50	1.95		特定
B 2号墳	安曇野市穂高有明2188-2	30.00	2.10						
B 3号墳 (横穴)	安曇野市穂高有明2176	15.00	2.50	S 22° E	6.40	1.70	0.90		
B 4号墳	安曇野市穂高有明2189-1	15.30	2.70	S 12° W	10.20	1.70	2.30		
B 5号墳 (金銅製)	安曇野市穂高有明2190	(径)15.00 (幅)12.00			8.60	1.60	1.50	須恵器(胡瓶蓋)・瓦筋蓋・フラスコ形丸蓋器・武器(鉄鏃・直刀)・馬具(鏃・鍔具)・鍔身具(鍔頭・切子玉・小塚)・土師器・銅器	
B 6号墳	安曇野市穂高有明2190	12.50		S 20° E	7.55	1.20~1.40	0.80		
B 7号墳	安曇野市穂高有明2190	8.40		S 30° E	5.30(推定)	1.40	0.80		
B 8号墳	安曇野市穂高有明2191-5	8.30			5.10	1.40	0.80		
B 9号墳	安曇野市穂高有明2191-5	9.62		S 30° E	5.95	(奥)1.80 (幅)1.30	0.90		
B 10号墳	安曇野市穂高有明2126-1	(径)18.00 (幅)14.80	1.80	S 10° E	9.00	2.40	1.45		
B 11号墳	安曇野市穂高有明2215-1			S 20° E	約9.00	1.30			
B 12号墳	安曇野市穂高有明2215-口	8.00(推定)	1.30(推定)						
B 13号墳	安曇野市穂高有明2186-1-3	12.00	1.70		8.50	(奥)1.70 (幅)1.10	1.20		特定
B 14号墳	安曇野市穂高有明2186内	11.00	1.50		7.60	1.80	0.80		
B 15号墳	安曇野市穂高有明2186-1-4				7.00	1.50			
B 16号墳	安曇野市穂高有明2186-1-2			S 20° E	7.50	1.30	1.00		
B 17号墳	安曇野市穂高有明2186-1-2				5.50	1.30			埋蔵
B 18号墳	安曇野市穂高有明			S 10° E	5.00	1.30			埋蔵
B 19号墳	安曇野市穂高有明2186-1-2				5.00	1.30			埋蔵
B 20号墳	安曇野市穂高有明2186-1-2				4.00				埋蔵
B 21号墳	安曇野市穂高有明2186内								
B 22号墳	安曇野市穂高有明2186内								
B 23号墳 (板蓋)	安曇野市穂高有明2186-1-2	13.80	1.80		4.00	1.80		付近の古墳から、土師器(鏃・柄)・須恵器(鏃・鏃・鏃)・武器(直刀)・馬具(蓋・鍔具)・鍔身具(鍔頭・切子玉・小塚)・銅器(鍔)などが出土している	
B 24号墳	安曇野市穂高有明2186-1-2				5.50				
B 25号墳	安曇野市穂高有明2186-1-2			S 35° E	6.50	1.50			
B 26号墳	安曇野市穂高有明2186内	6.40	1.50						
B 27号墳	安曇野市穂高有明2186-1-2				7.00	2.00			
B 28号墳	安曇野市穂高有明2186-1-2				4.80				
B 29号墳	安曇野市穂高有明2176	14.30			8.50	1.50			
B 30号墳	安曇野市穂高有明2319				約4.50	1.25			
B 31号墳	安曇野市穂高有明2248-1				6.00	1.10	0.60		
B 32号墳	安曇野市穂高有明2146				6.00	1.30			
B 33号墳	安曇野市穂高有明2188-2	約10.00							
B 34号墳	安曇野市穂高有明2319				約5.00	(奥)1.30 (幅)2.10			
B 35号墳	安曇野市穂高有明								
B 36号墳	安曇野市穂高有明								
C 1号墳	安曇野市穂高有明2629-5	(径)18.50 (幅)11.70	2.00	S 10° E	7.20	1.45	1.10		
C 2号墳	安曇野市穂高有明2729-1	11.00	2.00	S 2° W	7.50	1.50	1.60~ 1.80	須恵器(蓋)・灰陶器(鏃)・武器(鉄鏃・直刀)・工具(刀子)	
C 3号墳	安曇野市穂高有明2629-5	10.50	1.50		7.00	(奥)1.70 (幅)1.30			
C 4号墳	安曇野市穂高有明2627-3	(径)14.20 (幅)9.10	1.43		3.30	1.50			
C 5号墳	安曇野市穂高有明2729-2				5.30	(上)幅部1.50 (上)中幅1.60 (上)後部1.20			
C 6号墳	安曇野市穂高有明2190								地元でマツカヒと呼ばれる礎石の可能性もある
C 7号墳	安曇野市穂高有明								地元でマツカヒと呼ばれる礎石の可能性もある
D 1号墳 (横穴石室)	安曇野市穂高有明226	—	—		(長)4.36 (奥)2.00	(奥)2.70	(幅)2.50 (幅)1.94	須恵器(杯蓋)・杯身・平鏡・鏡蓋・鏃・高杯)・武器(鉄鏃)・馬具(蓋)・鍔身具(鍔頭)・鍔身具(鍔頭)	
E 1号墳 (西数集)	安曇野市穂高数188	12.00	0.60						

古墳名 (別称)	地籍	墳位		横穴式石室			出土遺物	備考	
		径(m)	高(m)	開口方位	長(m)	幅(m)			高(m)
E 2号墳 (二部塚)	安曇野市穂高1840	14.00	1.40		200	130	120	土師器・須恵器	
E 3号墳	安曇野市穂高2005				500	130			十三層西古墳とも
E 4号墳 (塚原)	安曇野市穂高116								
E 5号墳 (上人塚)	安曇野市穂高200	12.00	1.30						
E 6号墳 (風塚3号)	安曇野市穂高14	(長)19.80 (幅)16.50	3.60					須恵器(ガラスコ形長頸瓶・長頸壺・平瓶・横瓶・高杯・蓋・高脚)・武器(鉄鏝・直刀・盾・鉾・馬具(鞍)・装身具(耳環・勾玉・管玉・切子玉・白玉))	
E 7号墳 (風塚2号)	安曇野市穂高15	15.00	2.00		500	210		武器(鉄鏝・直刀・盾)・工具(刀子)・装身具(耳環)	
E 8号墳 (風塚1号)	安曇野市穂高29	15.00	3.00						存在
E 9号墳 (前田塚)	安曇野市穂高948-6	5.00	1.00						埋蔵
E 10号墳 (寺島塚)	安曇野市穂高916	8.50	1.50					武器(直刀)・装身具(勾玉)	埋蔵
E 11号墳 (神谷塚)	安曇野市穂高1320-2								埋蔵
E 13号墳 (法馬塚)	安曇野市穂高317イ				8.50	1.80		須恵器(杯・壺・平瓶)・武器(直刀)・馬具(鞍)	埋蔵 須恵塚2号墳とも
E 14号墳 (鹿11号)	安曇野市穂高2193	10.00	1.00						埋蔵
E 15号墳 (鹿12号)	安曇野市穂高2194	10.00							埋蔵
E 16号墳 (鹿塚)	安曇野市穂高1652-1								埋蔵
E 17号墳 (ツツノコ)	安曇野市穂高1884	6.30	0.60					武器(直刀)	ショウナン類古墳とも
E 18号墳 (鹿山3号)	安曇野市穂高2194-1								埋蔵
E 19号墳	安曇野市穂高牧上の原1909	(南北)3.50 (東西)4.50	1.50						
F 1号墳	安曇野市穂高町原2257-1	小つては 4.00以上			4.80	(奥)1.00 (中)1.60 (南)1.10	1.25	須恵器(杯)	埋蔵 一本杉古墳とも
F 2号墳	安曇野市穂高町原4290-1	3.00	1.00						
F 3号墳	安曇野市穂高町原4325								
F 4号墳	安曇野市穂高町原4280	5.50	2.00(蓋定)						
F 5号墳	安曇野市穂高町原4070	10.00	1.60		(東壁)5.50	1.80			
F 6号墳 (大塚内野)	安曇野市穂高町原4054				5.95	1.50	1.15		中上古墳とも
F 7号墳	安曇野市穂高町原4063イ	9.00			4.00	1.40			
F 8号墳	安曇野市穂高町原3992-1							須恵器	
F 9号墳 (二ツ塚)	安曇野市穂高町原3654	11.00	1.30	S12° E	7.00	1.30~1.50	調査中	土師器(碗)・須恵器(蓋杯・高杯・子持壺・ガラスコ形長頸瓶・長頸壺・甕など)・武器(両面交互・鉄鏝・直刀)・馬具(鞍)・装身具・装身具(耳環)・工具(刀子)・装身具(耳環・勾玉・管玉・切子玉)・その他(銅・動物骨・陶器)・銭貨	
F 10号墳 (二ツ塚)	安曇野市穂高町原3654	(長)12.90 (幅)11.00	1.80	S10° E				須恵器(蓋杯・高杯・短頸壺・長頸壺・平瓶・横瓶)・武器(鉄鏝・直刀)・馬具(鞍)・装身具(耳環)・勾玉・管玉・切子玉)・その他(銅・動物骨・陶器)・銭貨	存在
G 1号墳 (上原古墳)	安曇野市穂高8783	(南北)14.50 (東西)13.80		S 0°	9.20	(奥)1.25 (中)1.42 (北)1.00(蓋定)	1.40~1.75	須恵器(蓋杯・高杯・短頸壺・長頸壺・平瓶・横瓶)・武器(鉄鏝・直刀)・馬具(鞍)・装身具(耳環)・勾玉・管玉・切子玉)・その他(銅・動物骨・陶器)・銭貨	存在
H 1号墳 (大塚塚)	安曇野市穂高有明383イ	16.00	2.00			(東壁)1.90 (中央)2.40 (西壁)1.60	(西壁)1.80	土師器・武器(盾)・武器(直刀・鉾)・馬具・装身具(耳環・勾玉・切子玉)	存在 百塚とも
熊文9号 古墳	北安曇郡松田村南神戸74795	16.00	2.53	S11° W	8.14				存在
牛宿の塚 古墳	北安曇郡松田村牛宿4942								牛宿古墳とも
坂元オホ メ塚古墳	北安曇郡松田村南神戸74								埋蔵

備考

本一覧表は、以下の基準で作成した。

1. 古墳名と別称の表記及び記号については、現行の遺跡地図(道4)に則った。

2. 地籍(住所)については、道23、および道109から引用した。

3. 遺構の各項目は、基本的に道21から引用した。

なお、道21以降に発掘や調査調査がされた古墳については、以下に示す文献も引用した(F 9号墳・本書、F 10号墳・道23、G 1号墳・道109)。

朝し、E 1号墳の墳位については、道29で示された調査結果と現状とを鑑みて記載するため、道26から引用した。

また、道21に記載がない古墳のうち、それ以前の文献に記載がある場合は、以下に示す文献を引用した(1818、1826号墳・道22、C 5号墳・道260)。

なお、C 2号墳、E 13号墳、E 19号墳、およびC 6号墳とC 7号墳の発掘者は、安曇野市教育委員会のご指示による。

4. 古墳前部を示す表記は、原則に拠った。

5. 各古墳の石室数は、地籍によって異なるが、本表においては小数字2位に統一した。

6. 出土遺物については、道21をもとに作成し、D 1号墳・E 6号墳を道29で補った。熊文が坂元古墳は道29を用いた。

7. また遺物名称については、現在普及している名称表記に改めた箇所がある。

8. 金銅製の武器・馬具は手帳を引いて示した。

9. 松田村所在古墳については、道4(文化庁文化財保護部編1983、道29、道126)を参照した。

10. 表中の空欄は不明・不詳を示す。

第三章 F9号墳の調査成果

1 F9号墳の現況

(1) 古墳の立地

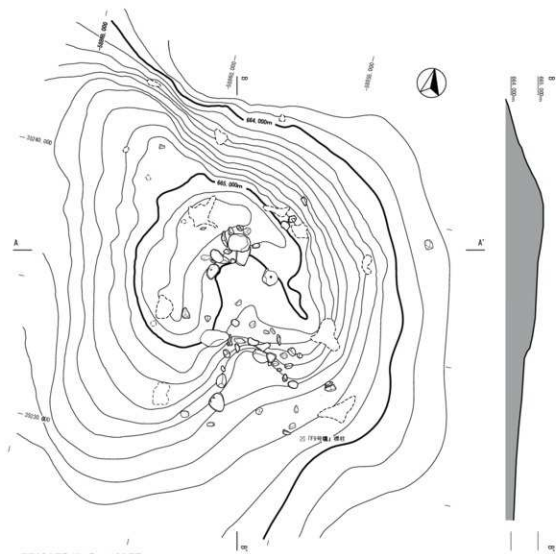
F9号墳の所在 徳高古墳群F9号墳は、長野県安曇野市徳高柏原3653(北緯36°18'56"・東経137°50'40"・標高約665m)に所在する(第1図)。現在は、F9・10号墳ともに、国土交通省が所管する国営アルプスあづみの公園堀金・徳高地区の敷地内に保存されているが、平成16(2004)年に開園した同公園の造成が始まる前まで、両古墳の間に旧徳高町の上水道塚原配水池が設けられていた(第17図)。なお、東西約1.5kmに及ぶ「塚原」地籍の西端に位置する現地は、旧徳高町と旧堀金村の境に接している。

周辺の微地形 烏川扇状地の扇頂付近にあたる調査対象地は、西に飛騨山脈、東に松本平を望む緩斜面である。周辺は、田畑の開墾、配水池建設、公園造成などによって度重なる地形改変を受けてきたものの、約200m北側に流れる烏川右岸の微高地でもあった(第7図)。かつて「塚原古墳群」と呼ばれたこともあるF群の古墳は、最も標高の高い西端に位置するF9・10号墳と同じく、この微高地上に点々と営まれている。(藤原)

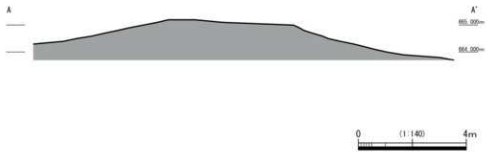
(2) 墳丘・石室の遺存状態

墳丘の現状 第1次調査の墳丘測量では、F9号墳を径約17.0m・残存高約13mの円墳と判断した¹⁾。しかし、墳丘北西側の不自然な突出部は、周囲の畑作などに伴って排出された基盤層の砂礫が寄せ集められたものであろう(第15図)。また、第2次調査では、塚原配水池によって墳丘西側の端部が破壊されていた様子を確認することができた²⁾。従って、F9号墳の築造当初における墳丘の形状・規模は、現況と大幅に異なっていた可能性が高い。但し、墳丘の東側は、盛土の流出こそ否定できないものの、等高線に大きな乱れが見られず、往時の面影を幾許が残したものと考えられる。いずれにせよ、本来の墳丘規模や、盛土の残存状況などについて、発掘調査に拠らずして明らかにすることは難しい。

石室の現状 墳丘の中央に設けられた横穴式石室は、すべての天井石を欠いている。発掘調査に着手する以前は、残された側壁の最上段が部分的に露出しており、僅かに落ち込んだ石室埋土の様子と併せて、南側に開口する横穴式石室の存在が示唆されていた(第15図)。墳丘北東側には、大型の礫が散在しているが、これらも石室の部材であった可能性がある。もともと、地表面の観察から危ぶまれていた石室の遺存状態は、後述する調査成果にみる通り、予想以上に良好であることが明らかとなった。但し、墳丘に根を張ったマツが、石室の壁体を部分的に圧迫しており注意を要する。(中島)



平面测角点标高(黄海高)比2-点原标高
 【F9号桩】X坐标: 33231.402 Y坐标: -58854.742 Z坐标: 664.704

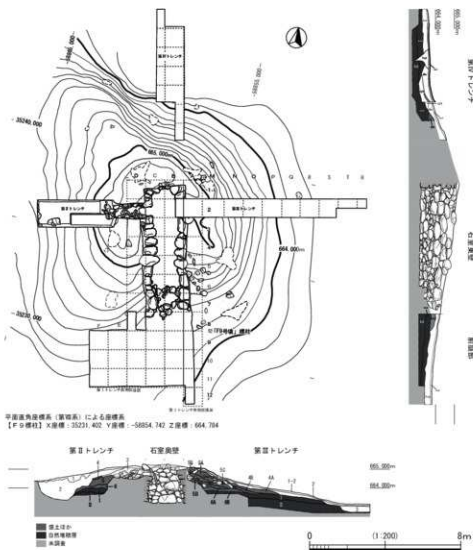


第15图 F9号填 填丘测量图

(3) 調査区の設定

墳丘・石室の規模と構造 既往の調査では、墳丘・石室の規模と構造や、後世の損壊状況を把握するため、石室の範囲から墳丘南側にかけて第Ⅰトレンチ、墳丘西側に第Ⅱトレンチ、東側に第Ⅲトレンチ、北側に第Ⅳトレンチを設定した(第16図)。その結果、各トレンチにて基盤層となる扇状地性砂礫層(Ⅰ・Ⅱ層)の存在を認め、石室の範囲を布掘りして壁体の構築を開始したことや、砂礫混じりの黒色土層を墳丘盛土としたことが明らかとなった。しかし、第Ⅳトレンチに周溝の可能性ある落ち込みを見出したものの、第Ⅱトレンチにて確認した通り墳丘西側が配水池建設によって破壊されており、石室も玄室を残して羨道部が失われている。従って、径約11.0 mの円墳ではないかと推定したが、第Ⅳトレンチ以外でも周溝かと思われる痕跡の存在が疑われており、未だ正確な墳丘径が明確でない悩みがあった。

そこで今回の調査では、改めて墳丘規模と周溝の存否を検証するため、第Ⅰ・Ⅲ・Ⅳトレンチにおけ



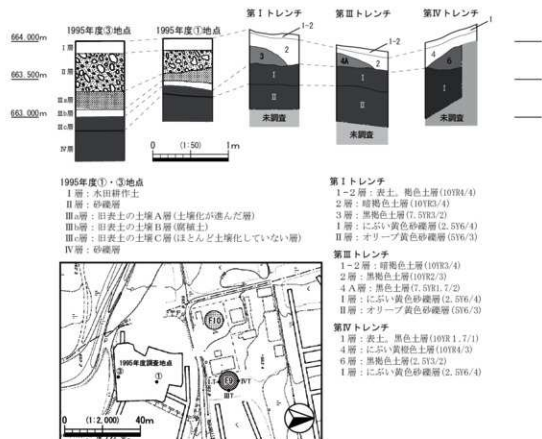
第16図 F9号墳 トレンチ配置図

る土層堆積を再確認することとした。第Ⅰトレンチでは、石室羨道部の損壊が著しいことから、石室開口部附近の自然堆積層上に盛土の一部が残されているか否か検討する。第Ⅲトレンチでは、自然堆積層の広がりを観察しつつ、西半にて盛土の様子を検討するとともに、予想より墳丘が大きくなる可能性も考慮して、トレンチ東側北壁に沿って東西1.5m・南北0.5mの拡張区を設定した。第Ⅳトレンチでは、かつて西壁で確認した掘り込みと埋土を再確認するとともに、第Ⅲトレンチと同じく墳径が想定より大きい可能性を検証するため、トレンチ北側西壁に沿って南北1.5m・幅0.5mの拡張区を設定した。

なお、第Ⅱトレンチは、既に墳丘西端の破壊が明らかであるため、今次調査の対象としない。また、新たに墳丘北東部に設ける予定であった第Ⅴトレンチも、耕作に伴って周囲から寄せられたと思われる礫群を除去したところ、予想以上に盛土が流出していたため、設定を断念した。(小山・深澤)

(4) 基本層序

墳丘と石室の基盤層 第Ⅱ章で触れた通り、調査対象地域の地層は、烏川によって形成された扇状地性砂礫層を基盤としている。F9号墳周辺の自然堆積層としては、第Ⅰトレンチのサブトレンチ、ならびに第Ⅱ～Ⅳトレンチにて、やや土壌化して黄色を呈する砂礫層のⅠ層と、オリブ黄色を呈する砂礫層のⅡ層を確認した(第17図)。墳丘と石室は、これらの砂礫層を基礎にして構築されている。



第17図 F9号墳 基本層序(註3、第12次調査成果)

周辺の土壌と旧地形 公園建設に先立つ平成7(1995)年の試掘調査では、F9号墳から約50cm南側の地点で計6層の堆積が確認された³¹⁾(第17図)。ここでは、Ⅰ層が水田耕作土、Ⅱ層が水田床土の砂礫層、Ⅲa層が黒ボク土である遺物包含層、Ⅲb層が腐植土と砂礫を含む遺物包含層、Ⅲc層がほとんど土壌化していない火山灰・砂礫層、Ⅳ層が砂礫層とされた。このⅢc層・Ⅳ層が、F9号墳におけるⅠ・Ⅱ層に相当するものであろう。なお、これらの基盤層は、北と南へ傾斜しているものとみられ、F9・F10号墳が烏川右岸の微高地上にあった事実を裏付けている。(紀・高橋)

2 遺構

(1) 遺構の概要

墳丘 F9号墳の墳丘は、盛土の流出、石室天井石の欠失、南側隣接地における水田開拓、塚原配水池の建設、そして公園造成などの影響を受けて構築当初の姿から大きく変貌を遂げている。しかし、後述する今次調査成果の検討によって、直径約12.0m以上・残存高約1.3mの円墳であると判断するに至った。また、第Ⅳトレンチにて確認された5層を周溝埋土と認めて良いのであれば、幅約1.8m・深さ約0.3mの周溝が、墳丘の北側から西側にかけて巡っていたものと想定される。

墳丘の大部分は烏川扇状地由来する砂礫層の上に、この砂礫層と黒ボク土を母材とした盛土が施されたものであろう。各トレンチでは、包含する礫の大小・多寡に差があるものの、墳丘盛土と考えられる黒色土層を確認した。墳丘西端は、かつて西側に隣接していた配水池によって破壊されている。

石室 墳丘の中央に設けられた埋葬施設は、主軸をN-12°-Wにとり、南向きに開口する無袖横穴式石室である(第16図)。羨道部と全ての天井石が失われていたが、残存長約7.0m・下端幅約1.8m・残存上端幅約1.3m・残存高約1.8m、床面標高約663.1mの玄室自体は、予想以上に良好な遺存状態であった。

壁体の積み上げに先立っては、烏川扇状地によって形成された砂礫層であるⅠ・Ⅱ層を、石室部分のみ深さ70cmほど掘り下げて石室掘方を設けている。その掘方に、石室の石材を3段ほど据え、掘方の上面、即ちⅠ層上面と石材上面の高さを揃えた後、石室の壁体を積み上げる工程と、裏込めや盛土を施工工程を交互に繰り返して墳丘が形成されたのであろう。このような工程で横穴式石室が構築された結果、床面から開口部までの間には、約50cmの比高差をもつ傾斜が形成された。玄門の周辺には、閉塞石の一部が残存している。床面は、径約3.0cm～約5.0cmの円礫を選別して散布したものと見られ、初葬時以降も幾度か敷き替えがなされた可能性もあるが、直下の自然堆積層と同じく烏川扇状地由来の花崗岩円礫を母材としているため、面的な把握が難しい。

壁体を構成する石材は、大部分が烏川で採取されたと見られる飛騨山脈由来の花崗岩円礫である。奥壁最下段中央に据えられた縦約50cm・横約100cmの石材が腰石と考えられる一方、側壁には明確な腰石がみられない。この奥壁を除いた東西の側壁は、完全な布積みではないものの、石材を概ね6段積み上げており、下から3段を平積み、4段目以上を小口積みとする。主に、縦約30～約40cm・幅約60～約90cmの石材が用いられたが、石材間の隙間を調整したためか、中段に径約10cm～約20cmの間石を噛ませて

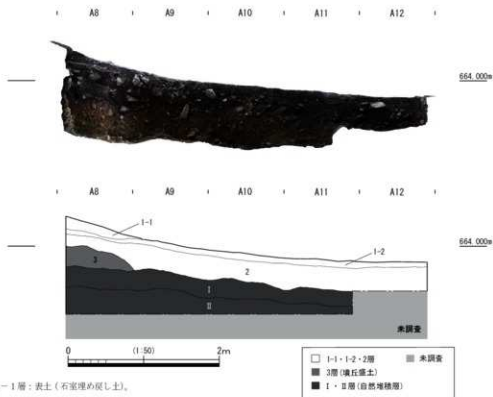
いる部分が広く見られた。両側壁ともに3段目まで垂直に積み、4段目以上を次第に内傾させる持ち送りの技法を用いている¹⁾。

なお、平成30(2018)年の第10次調査を以て、石室における調査が完了した。遺構の現地公開も検討したが、全ての天井石を失っており、かつ木根による壁体の圧迫も懸念されるため、石室内部から墳丘上面を砂で埋め戻して遺構の保護を図った。(小林・水津)

(2) 墳丘 [第Ⅰ～Ⅳトレンチ]

i) 第Ⅰトレンチ

調査の経過 第Ⅰトレンチは、墳丘南側の端部と、墳丘・石室の構築状況、そして石室内部の様子を検討するため、平成22(2010)年の第2次調査から設定している調査区である。今回の調査では、石室開口部周辺の状況が不明なことから、A8～A11グリッドの範囲を対象としたサブトレンチを再設定し、基盤となる砂礫層の堆積状況と、失われた羨道部の背後における盛土残存状況を確認することとした。その結果、A8グリッドにて、盛土の可能性がある黒色土層を確認することができた。なお、第11次調査では、第Ⅰトレンチ南部に周溝埋土の可能性がある堆積の存在を指摘したが、改めて該当箇所を精査



第18図 F9号墳 第Ⅰトレンチ東壁土層断面図

し、木根の影響にて土層が乱されたものと判断した。

土層堆積状況 トレンチの下部にて、基盤となる砂礫層のⅠ・Ⅱ層を確認した。墳丘の基盤となるⅠ層上面は、標高約663.5m前後である。A8グリッドでは、Ⅰ層上面に、ほとんど礫を含まない黒褐色土層である3層を確認した。この3層は、羨道部後背の盛土の一部である可能性が高いが、墳丘の南端を示すものか、破壊された墳丘の名残を僅かに留めるものなのか判断することは難しい(第18図)。

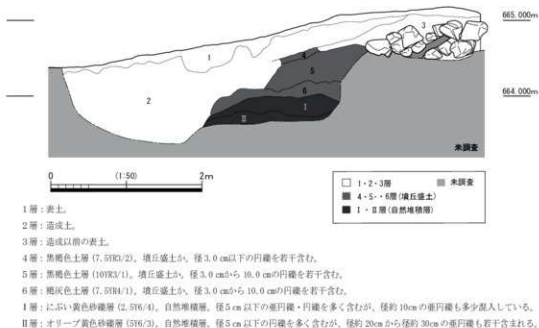
遺物出土状況 第Ⅰトレンチでは、後述するように支室内・前庭部から多数の遺物が出土した。しかし、墳丘の状態を確認するために設けたサブトレンチから得られた資料はない。この第12次調査においても、新たな遺物は出土しなかった。(神澤)

ii) 第Ⅱトレンチ

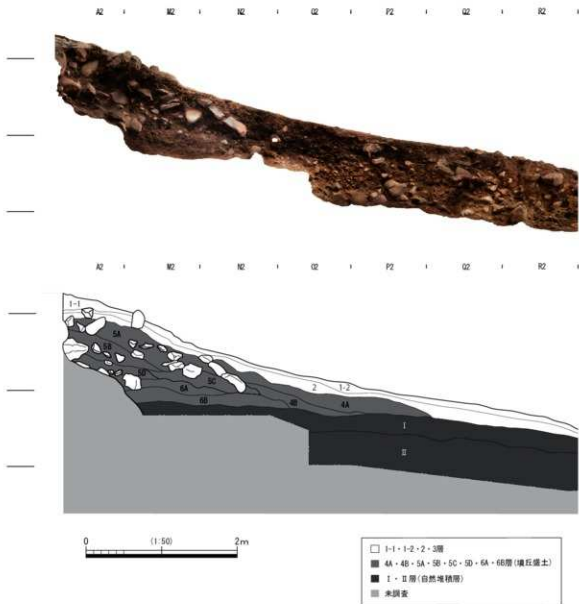
調査の経過 第Ⅱトレンチは、墳丘西側の端部と、墳丘・石室の構築状況を検討するため、平成22(2010)年の第2次調査から設定している調査区である。石室の裏側にて、裏込めと思われる礫群が密に積まれた様子を確認したが、トレンチ西半から鉄筋コンクリート片やケーブル類が多量に出土した。これら、塚原配水池の撤去に際して埋められたと見られる廃棄物が混入した土層の下では、墳丘端部が破壊されていることを確認した。今年度は、調査対象としていない。

土層堆積状況 トレンチの下部にて、基盤となる砂礫層のⅠ・Ⅱ層を確認した。墳丘の基盤となるⅠ層上面は、標高約664.0mである。自然堆積層Ⅰ層の上には墳丘盛土と思われる灰褐色土層(6層)や黒褐色土層(4・5層)が堆積している。それより西側は配水池の造成・撤去に伴う造成土であり、自然堆積層Ⅱ層まで削平されている(第19図)。

遺物出土状況 第Ⅱトレンチでは、これまで遺物の出土を確認していない。(尾上眞・深澤)



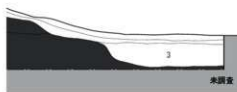
第19図 F9号墳 第Ⅱトレンチ北壁土層断面図



第20図 F9号墳 第Ⅲトレンチ北壁土層断面図

iii) 第Ⅲトレンチ

調査の経過 第Ⅲトレンチは、墳丘東側の端部と、墳丘・石室の構築状況を検討するため、平成25(2013)年の第5次調査から設定している調査区である。第Ⅰトレンチでは、天井石を失った石室の埋土を除去しつつ調査を進めており、第Ⅲトレンチにて石室の裏込めに触れると全体を支持できなくなる恐れがあったため、控え積みの手前までに調査範囲を抑えていた。そこで、石室調査が終了した後、第11次調査にて石室側壁の背後までトレンチ範囲を延ばした結果、基盤層、盛土、控え積みの関係性を、より一層明らかにすることができた。今回の調査では、墳丘東側に隣接して南北方向に延びる直線状の段差が、後世の耕作等による地形改変の結果なのか、あるいは当該箇所附近に古墳の周溝などの痕跡が見出されるのかを確認するため、トレンチ北壁のS2グリッドから東に東西1.5m・南北0.5mの拡張区を設定した。その結果、突然自然堆積層が切断されている落ち込みを確認したが、そこに堆積した土層は、後



- 665.00m 1-1層：表土（石室埋め戻し土）、
1-2層：表土、
2層：黒褐色土層（10TR2/3）、径3.0から8.0cmの壺円礫・円礫を若干含む、
3層：灰黄褐色土層（7.5TR3/4）、田耕作土が、細砂質、径3.0cm以下の円礫を微量含む、
- 664.00m 4 A層：黒色土層（7.5TR1.7/2）、墳丘盛土が、径3.0cm以下の円礫を若干含む、
4 B層：黒色土層（7.5TR2/1）、墳丘盛土が、径3.0cm以下の円礫を若干、径10.0cm以下の壺円礫・円礫を微量含む、
5 A層：黒褐色土層（7.5TR2/2）、石室の控え積みか、径3.0cmから5.0cm以下の礫、径12.0cmから5.0cm以下の壺円礫を若干含む、
5 B層：黒褐色土層（7.5TR2/2）、石室の控え積みか、径12.0cmから15.0cm以下の壺円礫を若干、径3.0から5.0cmの礫を微量に含む、
- 663.00m 5 C層：黒褐色土（7.5TR3/2）、石室の控え積みか、径3.0cmから5.0cmの円礫、径12.0cmから15.0cmの壺円礫を若干含む、
5 D層：黒褐色土層（7.5TR3/2）、石室の控え積みか、径3.0cmから5.0cmの円礫、径12.0cmから15.0cmの壺円礫を多数に含む、
- 664.00m 6 A層：黒褐色土（10TR3/2）、石室の控え積みか、径3.0から5.0cmの円礫を若干含む、
6 B層：黒褐色土（10TR3/2）、石室の控え積みか、径3.0cmから5.0cmの円礫を若干、径12.0から15.0cmの壺円礫を微量に含む、
- 663.00m 1層：にぶい黄色砂礫層（2.5TR/4）、自然堆積層、径5cm以下の壺円礫・円礫を多く含むが、径約10cmの壺円礫も多少混入している、
II層：オリーブ黄色砂礫層（5TR/3）、自然堆積層、径5cm以下の円礫を多く含むが、径約20cmから径約30cmの壺円礫も若干含まれる、

述するように田畑の耕作に伴う床土と思われる、墳丘東側に周溝は見られないと判断するに至った。

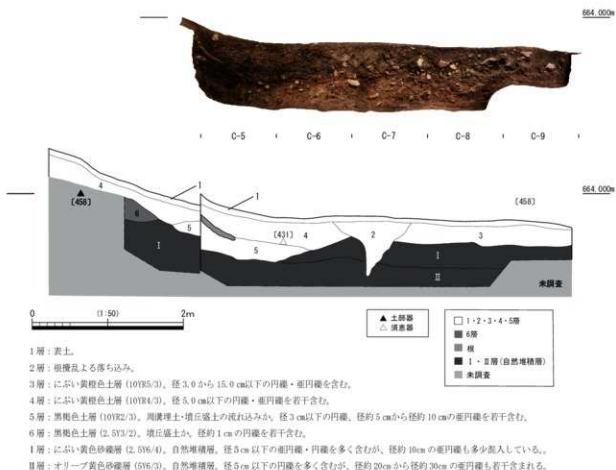
土層堆積状況 トレンチの下端部にて、基盤となる砂礫層のⅠ・Ⅱ層を確認した。墳丘の基盤となるⅠ層上面は西から東に向けて傾斜しており、標高約663.2～約663.9mの範囲におさまる。第12次調査まで、自然堆積層に手を加えた後の再堆積と捉えていた層（第11次調査報告による2 A・2 B層）については、大きな木根の影響を受けて土層が乱れている部分を含むものの、包含する砂礫の性状からⅠ層に連なるものと捉えた。このⅠ層を基盤として、表土層を除く上位の土層が墳丘盛土に相当するものであろう。この内、同じく木根の影響が著しく評価が難しい4 A・4 B層ではあるが、後述する通り他トレンチにおける土層堆積状況との比較から、盛土と判断することとした。なお、東側拡張区にて確認した自然堆積層を切り込む3層は、土層そのものの締まりが著しく弱いこと、過去の耕作地としての利用履歴から、田畑の耕作土であると認識した（第20図）。

遺物出土状況 第Ⅲトレンチでは、第11次調査において、A2グリッド排土より、須恵器甕の破片1点〔661〕を採集した。この第12次調査において、新たな遺物の出土はなかった。（高山）

iv) 第Ⅳトレンチ

調査の経過 第Ⅳトレンチは、墳丘北側の端部と、墳丘・石室の構築状況を検討するため、平成26（2014）年の第6次調査から設定している調査区である。墳丘の立ち上がりかと思われる土層は、木根を避けてトレンチ東壁から南に設けた南北2.0m・東西0.5mの拡張区に見出された。西壁では、基盤層を掘り込む落ち込みと、その埋土が認められた。恐らく、これらが周溝と、周溝埋土である可能性が高い。今年度は、かかる推測を有力と判断しつつも、墳丘がより大きなものであった可能性も否定できないため、トレンチ西壁に沿った北側に南北1.0m・東西0.5mの拡張区を設定した。その結果、表土を剥がして程なく基盤層に達したため、表土下約50cmまで掘削して調査を終了。これより北側にF9号墳に伴う遺構は存在しないと判断した。なお、この拡張区は、北端が公園の花壇に及んでいたため、一時移植していた植栽を調査終了後に復旧した。

土層堆積状況 トレンチの下部にて、基盤となる砂礫層のⅠ・Ⅱ層を確認した。2層は、3・4層を分断し、Ⅰ・Ⅱ層まで食い込んでおり、後世の攪乱によって形成された層であると判断した。4層は、扇状地由来と思われる径約3.0～約15.0cmの礫を多く含んでおり、より細かな分層を行うことは困難だが、



第21図 F9号墳 第Ⅳトレンチ西壁土層断面図

周囲の砂礫などを寄せ集めつつ、比較的長期にわたって形成された旧表土層であると評価しておく。北側の3層は上半にて鉄骨などの残骸も認められたため、4層の旧表土が近代以降の改変を受けた層と判断した。5層(第7次調査報告による3層)は、自然堆積層を血状に掘削した箇所へ堆積した黒褐色土層であり、周溝埋土である可能性が高い。残念ながら、墳丘西端が破壊されており、他の箇所でも類似した遺構が確認できなかったことが惜しまれるが、今回の調査で北側拡張区から目立った遺構が確認されなかったため、これを周溝と捉える判断が妥当かと考えている(第21図)。

遺物出土状況 第Ⅳトレンチでは、第6次調査において、トレンチ西壁の6層(第6次調査報告の2層・第7次調査報告の3層)上面から須恵器片1点〔431〕が出土した。また、第7次調査において、トレンチ南側の表土下から土師器片1点〔458〕が出土した。この第12次調査において、新たな遺物の出土はなかった。(安本)

(3) 石室〔第Ⅰトレンチ〕

調査の経過 第Ⅰトレンチは、埋葬施設である横穴式石室の実態を確認するため、平成22(2010)年の第2次調査から設定した調査区である。恐らく、近代以降のある時期に石室の天井石が失われ、空洞となった石室内に大小の礫を含む土砂が投入されたらしい。第4次調査までは、これらの土砂に混じって、古墳時代から近現代にかけての遺物が散発的に出土する状態であった。もっとも、下層ほど礫の数が減少し、同年に表土下約1.5mの標高663.7m前後まで掘り下げると、若干の礫を含む土層が一様に見られるようになるとともに、玄室の開口部付近で閉塞石の上面が顔を出し始める。

続く第5次調査では、石室の主軸上に幅約15cmの土層観察用畔を残しつつ、埋土を約50cm掘り下げたところ、副葬品の一部やウマの骨・歯が出土した(第24図)。とりわけ、玄室の東南隅では、8世紀前半の須恵器が折り重なった状態で確認された(土器集中区と仮称)(第23図)。なお、土層観察用畔を設けたものの、層相に大きな変化が見られなかったため、第6次調査時に畔を除去した。すると、前年度に引き続きウマの骨・歯が出土し、これを取り下げた直下にて、7世紀中頃の土師器碗や6世紀末から7世紀初頭の須恵器・武器などが出土する標高663.2m前後の面に達した(第22図)。また、トレンチ南端の東壁にサブトレンチを設定し、墳丘南側における基盤層の様子を確認した。更に、第7次調査にてトレンチ東半のB区から装身具の一部や馬具、第8次調査にて須恵器や武器が出土。第9次調査では、石室における初葬時の礫床面を概ね全面検出したところ、須恵器や鉄鏃、装身具が出土した。第10次調査では、石室を埋め戻して埋葬施設の調査を終えた。今年度は、盛土を確認するため南側のサブトレンチを再調査したが(第18図)、石室側は調査対象としていない。

土層堆積状況 玄室床面にて、奥壁附近の一部を精査したところ、基盤となる砂礫層のⅡ層を確認した。初葬時の床面は、Ⅱ層の直上に径約3.0cm～約5.0cmの花崗岩円礫を敷いたものであり、間隙に黒色土が堆積している。自然堆積層と母材が共通しているため、床面の面的な広がりを把握することが難しいものの、遺物の垂直分布から標高663.1m前後を上面としたものであろう。そこから、玄室の開口部と同じ標高663.6m前後までの約50cmは、やや粗ながらも礫混じりの埋土が堆積していた。これは、前庭部から玄室床面の標高を均一にするため、後の世に埋められたものと考えられる。更に上層には、石室の部

材を含む比較的大型の礫や、近現代の銭貨などを含む土砂が充填されていた。

また、墳丘南側のA区では、先述したサブトレンチにて、基盤となる砂礫層のⅠ・Ⅱ層を確認した。同地点のⅠ層上面は、標高約663.6mであり、石室の床面より約40cm高い。前庭部側の土層は、母材を同じくする基盤層との区別が難しいものの、盗掘時に玄室外へ持ち出された遺物の散布状況から、表土であるa層と、上面に古墳時代の遺物が散布するb層とに区分できる。なお、玄室開口部の前後では、閉塞石の一部と思われる径約30cmの礫群を確認した。

遺物出土状況 初葬時の副葬品も含む6世紀末～7世紀中頃の土師器・須恵器・武器・馬具・装身具などは、玄室内を中心として前庭部に至るまで散在している。このうち、B3グリッドでは、ガラス小玉を伴う赤色顔料を確認しており、埋葬された遺体の所在を物語っている。また、B3・B4・C3・C4グリッドにて、6世紀末～7世紀前半の直刀1振や、7世紀中頃の土師器椀3点が出土した。これらの直上にて検出したウマの骨・歯は、放射線年代測定によって9世紀末～11世紀前半の所産と判明している。一方、B5・B6グリッド周辺では、6世紀末～7世紀初頭の馬具や、8世紀前半の須恵器が重なる「土器集中区」が見られた。このほか、閉塞石上や、前庭部側からも多量の遺物が出土したが、いずれも原位置を保ったものではない。前庭部周辺から出土した遺物が、玄室外へ持ち出された時期は不明である。過年度の出土遺物と、その出土状況については、初葬時の第1段階(6世紀後半～7世紀初頭)、追葬時の第2段階(7世紀中頃)、古墳としての機能が停止した第3段階(8世紀前半)、牧の施設に転用された第4段階(9世紀末～11世紀前半)に区分した。第22～24図、および巻末の一覧表を参照されたい。(黒澤・水谷)

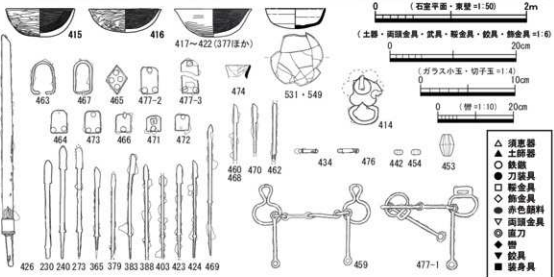
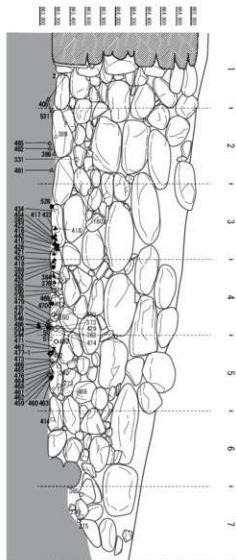
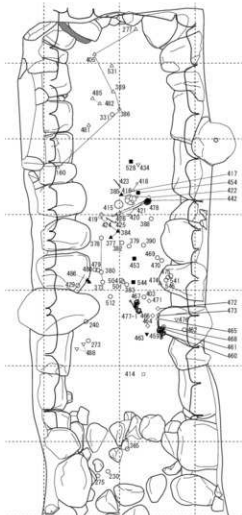
3 遺物

(1) 遺物の概要

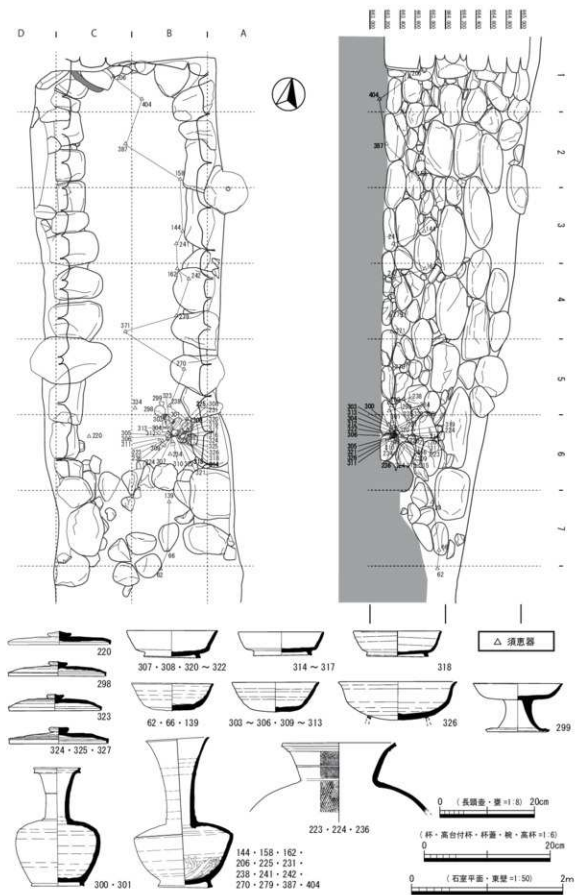
F9号墳における第2次調査から第11次調査では、計468点の遺物が得られた。その内訳は、土師器・土製品計66(取上点数77)点、須恵器計140(取上点数273)点、武器計43(取上点数56)点、馬具計17点、工具計9(取上点数11)点、装身具計36点、赤色顔料1点、陶磁器計6(個体数8)点、動物遺存体計22(個体数47)点などである。6世紀後半から7世紀中頃の土師器、須恵器、武器、馬具、装身具などの副葬品、最後の祭祀痕跡を留めるものとみられる8世紀前半の須恵器群、9世紀末～11世紀後半のウマの骨などや、大方が盗掘時の持ち出しと考えられる墳丘外出土遺物の数々は、F9号墳の築造から祖霊祭祀の廃絶を経て、近現代の地形改変に至る諸段階を物語っている。これら出土遺物の詳細については、既往の報告と、巻末の一覧表に譲ることとし、以下に主要な墳丘・石室出土遺物の概略を整理しておく。

(松坂・神澤)

D I C I B I A



第22図 F9号墳 石室内遺物出土状況 第1・2段階



第23図 F9号墳 石室内遺物出土状況 第3段階

(2) 墳丘出土遺物

i) 土師器・土製品

土師器・土製品は、過年度までに計44点が出土した。全点が器種不明であり、年代が明らかなものも見られない。これらの土師器類は、墳丘の各所に散在しており、盗掘などによって石室内から持ち出されたものと考えられる。(中村・神澤)

ii) 須恵器

須恵器は、過年度までに計48点が出土した。内訳は、甕28(石室出土遺物と接合する点数(以下、括弧内は同様)3)点、杯1(1)点、高杯1(1)点、杯蓋1(1)点、壺1(1)点、子持壺3(1)点、プラスチック形長頸瓶1(1)点、器種不明22(1)点である。その内、墳丘南側の旧A8・A10グリッドから出土したプラスチック形長頸瓶の破片〔18・57〕は、玄室内で出土した資料〔346〕と接合した。同様に、旧B7グリッドから出土した8世紀前半の高杯片〔54・71・84〕は、玄室出入口附近の土器集中区から出土した破片〔123・152・155・299〕と接合した。このように、玄室に納められていた須恵器類の破片が、外部の遺物と接合する事実は、盗掘などによって石室内から遺物が持ち出された事実を示唆する。但し、出土須恵器の大部分を占める甕は、今のところ玄室内より石室外から出土する破片数が多く、墳丘に据えられていた可能性も考慮しておく必要があろう。(松永・神澤)

iii) 武器

武器は、過年度までに計1点が出土した。D10グリッドから出土した銅〔489〕は、無窓の倒卵形を呈するものである。但し、玄室から出土した直刀〔332・426〕の何れに伴うものか、あるいは未発見の刀に伴うものかは不明である。(松坂・神澤)

iv) 馬具

馬具は、過年度までに計2点が出土した。B9グリッドから出土した菱形飾金具〔140〕は、玄室内B5グリッドより出土した飾金具〔465〕と同類である。F9グリッドから出土した鍔吊金具〔592〕は、玄室内C5グリッドより出土した鍔軛〔488〕と一連のものであると推測される。これら6世紀後半から7世紀初頭の所産とみられる馬具類は、盗掘などによって石室内から持ち出されたものと考えられる。

(山本・神澤)

v) 工具

工具は、過年度までに計1点が出土した。D10グリッドから出土した刀子〔519〕は両側で直線的な鋒を持ち、木質が一部残存している。ただし、刀部と茎部の端部が欠損している。(篠田)

vi) 装身具

装身具は、過年度までに計2点が出土した。旧C10グリッドから〔102〕、C8から〔156〕が出土し、どちらも切子玉である。完形の六角形状を呈し、片面穿孔と考えられ、孔の下端が欠けてやや広がっている。(篠田)

vii) 陶磁器

陶磁器類は、過年度までに計6点が出土した。内訳は、近世・近代の燈明皿2点、年代・器種不明の

磁器4点である。これらの陶磁器類は、墳丘からの出土・表面採集資料が主であるが、燈明皿片の一部〔110〕が石室内から出土しているように、近代以降に石室が暴かれた後、新たに石室外から持ち込まれたものも存在したのであろう。(松々見・神澤)

(3) 石室出土遺物

i) 土師器

土師器は、過年度までに計16点が出土した。その内、B3グリッドから出土した7世紀中頃の椀2点〔415・416〕と、B3グリッドを中心として、B4・C4グリッドからも出土した椀の破片〔377ほか〕は、ほぼ同寸法の口径約11.0cm～約12.0cm、高さ約3.8～約4.5cmであり、内面を黒色処理している点でも共通する。初葬時より新しい時期の資料であり、追葬に伴うものである可能性が高い。その他、幾つかの個体も存在するが、大方が破片であるため、年代・器種の特定が困難である。(中村・神澤)

ii) 須恵器

須恵器は、過年度までに計91点が出土した。内訳は、甕10(3)点(甕と思われる遺物2点を含む)、杯4(1)点、高杯1(1)点、高台付杯3点、杯蓋5(1)点、壺2(1)点、長頸壺2点、子持壺7(1)点、フラスコ形長頸瓶1(1)点、椀1点、器種不明55(1)点である。7世紀中頃に比定される杯〔160ほか〕やフラスコ形長頸瓶〔18ほか〕がB1～B3・B6・C1～C4グリッドから出土した。8世紀前半に比定される杯〔8ほか・234ほか〕や杯蓋、高台付杯、高杯、椀、長頸壺がB6グリッド土器集中区を中心として集中して出土した。(松永・神澤)

iii) 武器

武器は、過年度までに計42点が出土した。内訳は、直刀(刀装具)1点、直刀(木質)1点、直刀2点、鉄鎌34点、両頭金具4点である。6世紀後半～7世紀初頭に比定される鉄鎌がB1～B5、B7、C2～C7グリッドから分散して出土した。6世紀末～7世紀前半に比定される直刀1点〔426〕がB3・B4・C3・C4グリッドから出土した。また両頭金具がB2・B3・B5・C2グリッドから出土した。6世紀後半～7世紀前半にかけて埋葬された武器類が集中しており、F9号墳の初葬時に埋葬された副葬品である可能性がある。なお、石室外のD10グリッドから鈎〔489〕が出土しており、石室内から移動した可能性がある。(松坂・神澤)

iv) 馬具

馬具は、過年度までに計15点が出土した。内訳は、轡2点、釵具3点、鞞金具8点、飾金具7点、鍔釦1点である。6世紀後半～7世紀の年代に比定される轡2点〔459・477-1〕がB5グリッドから出土した。6世紀末から7世紀初頭に比定される鞞金具1点〔414〕がB6グリッドから出土した。6世紀後半～7世紀初頭に比定される菱形飾金具1点〔465〕や6世紀末～7世紀前半に比定される飾金具3点〔465・477-2・477-3〕など、飾金具1点〔465〕はB5グリッドから集中して出土した。鍔釦1点〔488〕はC5グリッドから出土した。6世紀後半から7世紀前半にかけての年代に比定される馬具がB5・B6グリッドに集中していることがわかる。このような出土状況から、面鞞と鞞を中心とした一連の馬装が、石室内に副葬されたことが明らかになった。また、轡2点の編年段階からF9号墳の初葬年

代は6世紀後半から7世紀初頭であると推定された。

(山本・神澤)

v) 工具

工具は、過年度までに計8点が出土した。その全てが刀子である。石室中央部(C3グリッド)あたりから開口部(B7・C6グリッド)あたりにかけて散布している。[128] はほぼ完形で残存し、片刃であり、両側でまっすぐな背を持つ。

(篠田)

vi) 装身具

装身具は、過年度までに計34点が出土した。内訳は、切子玉3点、ガラス小玉27点、勾玉1点、管玉1点、耳環1点、白玉1点である。切子玉はB4・B5グリッドから出土した。ガラス小玉は6世紀末～7世紀前半に比定される1点[442]がB3グリッドから出土したほか、B4グリッドから17点が集中して出土した。勾玉はB2グリッドから、管玉と白玉はB6グリッドから、耳環はB5グリッドから出土した。このように6世紀末から7世紀に比定される装身具は主として石室内から出土しており、南北に2から6、東西にB・Cグリッドから出土している。墳丘から2点の切子玉が出土しているが、これらは石室内から移動した可能性がある。

なお、装身具は蛍光X線分析や実体顕微鏡による観察をおこなった。詳細な成分分析や製作技法などに関する内容については2015年度調査報告書を参照されたい。

(加々見・神澤)

vii) 赤色顔料

赤色顔料は、B3グリッドの約7.0cm×約9.0cmの範囲から、厚さ約20cmの赤色顔料塊1点が出土した。蛍光X線分析の結果、ベンガラと判明した。なお、この赤色顔料の直上からは、ガラス小玉1点[442]が出土した。

(加々見・神澤)

viii) 動物遺体

動物遺体は、過年度までに計22点が出土した。内3点はウマの骨であり、歯が多く出土している。C3グリッドから集中して出土したウマの歯は、AMS法による放射性炭素年代測定の結果、9世紀末～11世紀前半の年代が与えられた。上顎歯が歯列を残したままの状態出土した状況から、ウマが単に遺棄されたり何らかの原因で混入したりしたものというより、目的をもって残置されたものの可能性がある。また、ウマの歯などの出土状況から、少なくとも11世紀前半ごろまでF9号墳の天井石が残っており、石室の出入りが可能であった可能性がある。

なお、AMSの詳細な測定結果は、2014年度調査報告書を参照されたい。

(神澤)

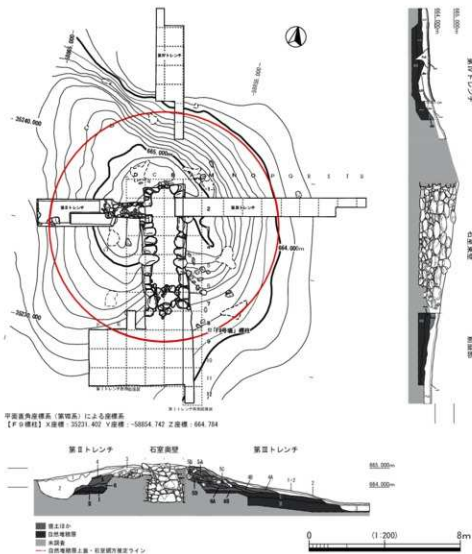
4 小結

第12次調査では、墳丘規模や周溝の有無の確認を目的として、第I・III・IVトレンチを再調査した。各トレンチの状況は、本章第2節で述べた通りである。ここでは各トレンチで得られた所見から、墳丘規模や周溝について簡単にまとめておく。

墳丘規模 第Iトレンチでは、東壁土層堆積状況を再検討・再分層した結果、新たに3層として分層した箇所、すなわち破壊された羨道部背後の土層のみを墳丘盛土の一部とした。第Iトレンチ3層の端

部と、第Ⅳトレンチで盛土とした6層(第7次調査時の2層)の端部を墳丘端部と仮定した上で、2点の位置を石室主軸に移して結ぶとその距離は約115mとなる。便宜的に、墳丘半径を2点が等距離となる5.75mとし、墳丘形態を正円形とした想定した場合、第Ⅲトレンチでは墳丘径推定ラインが4A層東端よりやや西側を通る。このことから、木根の影響が著しいものの第Ⅲトレンチ4A・4B層は、墳丘盛土の一部であると判断した。それに伴い、第Ⅰトレンチよりも残存状態が良好と考えられる第Ⅲトレンチ4A層と、第Ⅳトレンチ6層の端部に墳丘径推定ラインを合わせると、F9号墳は最低でも直径約120mの円墳であると想定できる(第25図)。

しかし、穂高古墳群内でF9号墳と同規模程度の支室を有するE13・G1号墳などは、長さ約2.1m～約3.6mの羨道が確認されていることから⁵⁾、より羨道が長かった場合も考慮すると、F9号墳も墳丘が南側に約2.0m～約3.0m大きくなる可能性がある。その場合は、正円形ではなく、南側にやや張り出す楕円形を呈することが想定される。



第25図 F9号墳 墳径復元案

なお、第Ⅰトレンチ3層・第Ⅲトレンチ4A層・第Ⅳトレンチ6層端部直下の自然堆積層Ⅰ層の標高が663.6m～663.7mの範囲に収まることから(図17)、自然地形をある程度整地したうえで墳丘構築を行った可能性も付言しておく。

周溝 第10・11次調査では、第Ⅰトレンチ南端や、第Ⅲトレンチ東端で周溝と思しき落ち込みを指摘しているが、今回の調査でそれぞれ木根による攪乱と後世の耕作によるものと確認できた。また、第Ⅳトレンチも北側に延伸したが、遺構は検出されなかった。加えて、第8次調査で墳丘西側が大きく損壊を受けていることを再確認しているため、周溝と評価できるのは第Ⅳトレンチ西壁で確認した自然堆積層が幅約1.8mの皿状に掘削された箇所のみとなる。残念ながら、他のトレンチだけではなく第Ⅳトレンチ東壁でも、木根や後世の造成による攪乱によって対応する落ち込みは確認できなかった。よって、F9号墳の周溝がどのように巡っていたかは不明である。(平井・小池・大日方)

註

- 1) 『報告2009』
- 2) 『報告2010』
- 3) 百瀬長秀編1991『国営アルプスあづみの公園文化財発掘調査報告1－穂高古墳群－近世集石遺構の調査』長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告23、建設省地方整備局・長野県埋蔵文化財センター。
- 4) 『報告2016・2017』
- 5) 山下泰永・土屋和章2015『穂高古墳群G1号墳(上原古墳)第3次・第4回発掘調査』安曇野市の埋蔵文化財第8集、安曇野市教育委員会。白居直之・土屋和章・山下泰永・中谷高志編2021『穂高古墳群E13号墳(浜塚塚)は場整備事業に伴う第1次発掘調査報告書』安曇野市の埋蔵文化財第23集、安曇野市教育委員会。

第Ⅳ章 E6号墳の調査成果

1 E6号墳の現況

(1) 古墳の立地

E6号墳の所在 徳高古墳群E6号墳(狐塚3号墳)は、長野県安曇野市徳高牧149-12(北緯36°19'10"・東経137°50'30"・標高675m)に所在する(第1図)。現在は、国土交通省が所管する国営アルプスあづみの公園堀金・徳高地区の敷地内に保存されているが、墳丘の北西部が公園敷地外に及んでおり、市道徳高4218号線と一部重複する。

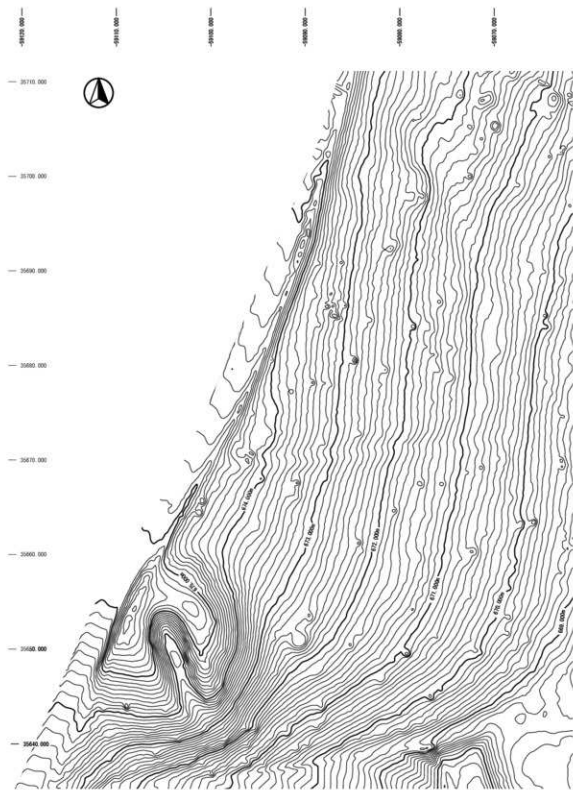
周辺の微地形 調査対象地は、烏川扇状地における扇頂付近の左岸、烏川によって形成された河岸段丘の崖線部にあたり、北西から南東方向へと下る傾斜面上にある(第26図)。この段丘崖には、E6号墳の南西に、一回り小さいE7号墳(狐塚2号墳)・E8号墳(狐塚1号墳)が列状に並ぶ。かつては、同じ狐塚地籍に、狐塚4・5号墳も存在したというが、惜しくも明治年間に埋滅した。(小模)

(2) 墳丘・石室の遺存状態

墳丘・石室の現状 平成3(1991)年刊行の『徳高町誌』は、E6号墳を長径約19.8m・短径約16.5m・高さ約3.6mの円墳とし、墳丘中央に石室石材の抜き取りに伴う長さ約5.0m・幅約1.5mの凹みが認められると報告した。調査前の現況も同様であり、墳丘の大部分は良好に遺存するものの、墳丘上部および石室石材は失われ、墳丘の中央部から南端にかけて溝状の石室跡の掘方が露呈している。墳丘の外形値は、大正12(1923)年刊行の『南安曇郡誌』以来おおむね変わらないが、前述のように墳丘の北西部分が市道徳高4218号線と重複しており、道路敷設に伴う削平が認められる(第26図)。なお、現況では、石室跡の掘方内において石材は認められないが、墳丘の北東に約20mの石が散在しており、これらが石室石材であった可能性がある。(小模)

(3) 調査区の設定

古墳の規模と構造 E6号墳の規模・構造を確認するため、石室主軸に直交する形で、墳丘北東側に8.0m・幅1.0mの第1トレンチを設定した(第27図)。表土を剥がした結果、トレンチ東側の墳丘内に墳丘・石室の基盤層となるローム質土層が現れ、墳丘西側斜面上に石室から持ち出されたと思われる土師器・須恵器片を包含した流れ込み土、そして両者の中間に周溝かと思われる落ち込みへの埋土が認められた。また、表土直下の自然堆積層を精査するため、トレンチ北半に幅0.5mのサブトレンチを設定した。(鈴木)



平面坐标系编号: A202011, 第8类: 3750 48761.11; 点名: 水准点
 [14#导线] X坐标: 35646.1042 Y坐标: -10142.2995 Z坐标: 634.219578

0 (1:400) 16m

第26图 E6号堤周边地形测量图

(4) 基本層序

墳丘と石室の基盤層 調査対象地域の地層は、烏川によって形成された扇状地砂礫層を基礎としている。しかし、左岸のE6号墳が位置する第3段丘面(離山面)は、右岸のF9号墳が位置する第5段丘面より離水時期の早い上位段丘にあたるため、砂礫層の上に厚い風成層が堆積した。E6号墳周辺の自然堆積層としては、第1トレンチ東端の表土直下にて、黄褐色を呈するローム質のi層を確認した。墳丘と石室は、このローム質土層を基礎にして構築されている(第28図)。

周辺の土壌と旧地形 かつて「狐塚」と呼ばれたE6～8号墳は、烏川によって削り出された河岸段丘の崖線上に点在しており、この崖線に沿って樹林が延びている。公園建設以前は、上下の段丘面一帯に耕地が広がっていた。また、1960年代に遡る航空写真では、現在と同じく墳丘南側斜面も樹林に覆われている様子が見て取れる。このように、積極的な土地利用の難しい崖線部であったため、大きな地形改変は認められないが、E6号墳の北西部を切断する形で、市道徳高4218号線が敷設された(第26図)。先述した通り、周囲の基盤層は、ほぼ水平に堆積しているものと考えられるローム質の風成層であり、これが墳丘盛土の母材ともなっている。(久光・深澤)

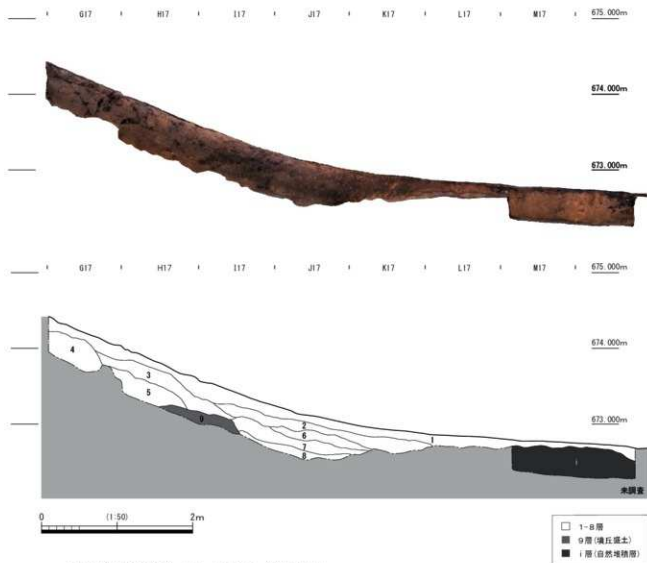
2 遺構

(1) 遺構の概要

墳丘 E6号墳の墳丘は、墳丘上部が失われ、石室石材も抜き取られているほか、墳丘北西部が市道徳高4218号線の敷設によって削られているなど、損壊を蒙っている部分が少なくない。しかし、後述する調査成果の検討によって、径約18.5m・残存高約2.5mの円墳であることが明らかとなった。樹木を避けて第1トレンチを設定したため、今後の精査で正確な墳丘径が前後する可能性はあるが、徳高古墳群の中では、比較的大型の事例であることが追認できたのである。また、第1トレンチにて確認された黄褐色系の8層を周溝埋土と認めた場合、幅約1.8mの周溝が、墳丘の北半を巡っていたものと想定される。

石室 墳丘の中央に設けられた埋葬施設は、主軸をN-20°-Wにとり、南東向きに開口する平面長方形の無袖横穴式石室であった。しかし、全ての石材が抜き取られており、長さ約10.0m・幅約4.0mの窠みが僅かに石室の名残を留めている。但し、現在の石室部分における底面の標高が約673.8mである一方、基盤となるローム質土層の上面が標高約672.7mとなっている(第27図)。自然堆積層の傾斜について一考する余地があるものの、石室床面の高さは、現況より低い標高約673.5mほどであった可能性もあろう。なお、石室は、石材が全て失われており、今のところ当初の姿を復元することは困難である。

(久光)



- 1層：褐色土層 (10YR4/4)。表土。しまり弱く、やや粘性あり。
- 2層：暗褐色土層 (10YR3/3)。ロームブロックが2%混じる。しまり弱く、粘性あり。
- 3層：暗褐色土層 (10YR3/4)。ロームブロックが20%混じる。しまりあり。粘性ややあり。
- 4層：暗褐色土層 (10YR3/4)。ロームブロックが30%混じる。しまり弱く、粘性なし。
- 5層：暗褐色土層 (10YR3/4)。ロームブロックが30%混じる。しまり強く、粘性あり。
- 6層：暗褐色土層 (10YR3/4)。ロームブロックが10%混じる。しまりあり。粘性あり。
- 7層：暗褐色土層 (10YR3/4)。ロームブロックが2%混じる。しまりあり。粘性あり。
- 8層：黄褐色土層 (10YR5/8)。周溝埋土・墳丘盛土の流れ込みか。ロームブロックが30%混じる。しまり弱く、粘性あり。
- 9層：褐色土層 (10YR4/6)。墳丘盛土か。ロームブロックが50%混じる。しまり強く、粘性あり。
- i層：明黄褐色土層 (10YR6/6)。自然堆積層。しまり強く、粘性あり。ローム質。

第28図 E6号墳 第Iトレンチ北東壁土層断面図

(2) 墳丘 [第Ⅰトレンチ]

調査の経過 第Ⅰトレンチは、墳丘北東側の端部と、墳丘・石室の構築状況を確認するため、今次調査で設定した調査区である。今年度掘削した範囲は、西のG17グリッドから、東のN17グリッドに相当する。トレンチ東端では、表土から約10cm掘り下げたところで、ローム質の黄褐色土を検出した。続いて、自然堆積層の精査を目的としたサブトレンチを、北壁に沿って東西2.0m・幅0.5mで設定して掘り下げたところ、同様の土層が一様に続いていたので、これを自然堆積層と判断した。

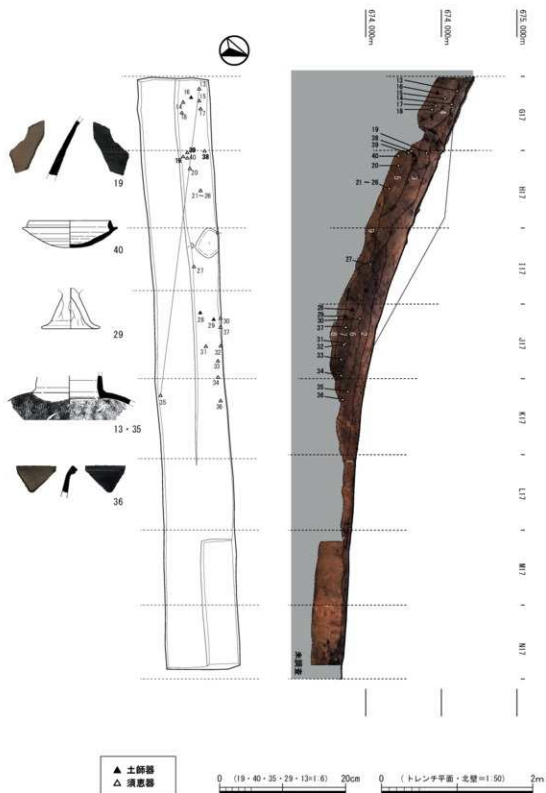
並行して、トレンチ全体の表土層を掘削したところ、K17～L17グリッド付近で南北に延びる帯状の黒色土を検出した。これは、周溝埋土の可能性が考えられたため、北壁から幅0.5mのサブトレンチを設定したが、西側において明確な立ち上がりを確認することができなかった。そこで、黒色土層の検討および墳丘盛土面確認のため、さらに西へサブトレンチを延伸したところ、I17～K17グリッドにて墳丘盛土の可能性のある暗褐色土の堆積を確認した。また、黒色土層・暗褐色土層からは、須恵器・土師器片が出土した。その後、墳丘盛土状況の確認、自然堆積層の精査を目的として、G17・H17グリッドを掘り下げたところ、須恵器杯身〔40〕が出土した。加えて、I17グリッドにて径約40cmの礫を検出したが、今のところ遺構との関連性は不明である。

土層堆積状況 トレンチの下部にて、基盤となるローム質層のi層を確認した。9層は、自然堆積層に由来する比較的大きなロームブロックが多量に混入する一方で、遺物の出土が見られないことから、墳丘盛土の一部であると判断した。I17～K17グリッドには、自然堆積層であるi層を掘り込んだ周溝状の落ち込みが見られ、そこにローム混じりの黄褐色土を主体とする8層が堆積していた。このように、9層を墳丘盛土と仮定し、8層を周溝埋土と認めるならば、E6号墳の墳丘規模を径約18.5m、周溝幅を約1.8mと復元することができる。

また、この埋土上に流れ込んだ6・7層と、更に墳丘側からもたらされた崩落土の3～5層は、多数の土師器・須恵器片を包含する暗褐色土層である。後述するように、墳丘斜面から出土した遺物の中には、一定期間地表面に曝露されていた可能性があるものも含まれる。2層は、それらの上に堆積したものであり、全体を薄い表土層である1層が覆っていた(第28図)。

遺物出土状況 第Ⅰトレンチからは、土師器片3点、須恵器片25点の合計28点が出土した(第29図)。須恵器片の多くを、甕が占めている。これらの遺物は、墳丘斜面のG17・H17グリッドと、墳丘端部付近のI17～K17グリッド周辺に集中していた。前者からは、器種不明の土師器片1点、甕口縁部片〔19〕・杯身〔40〕などの須恵器片16点が出土した。後者からは、器種不明底部〔28〕と、高杯かと思われる脚部片〔29〕の土師器片2点、甕口縁部～頸部片〔35〕、口縁部片〔36〕、〔40〕とは別個体であると考えられる杯身口縁部片〔37〕などの須恵器片9点が出土した。特に須恵器杯身〔40〕は、風化が著しく一定期間野外に曝露されていた可能性が高い。

但し、G17グリッド4層と、K17グリッド2層から出土した須恵器甕片〔13・35〕が接合しているように、墳丘斜面の上下に散在する遺物群は、ほぼ同一の機会によって流れ込んだものと考えられる。こうした遺物の出土状況は、E6号墳の構築当初から墳丘外に土師器・須恵器が配されていた可能性より、石室内に収められていた副葬品が石室の破壊に伴って持ち出された可能性を支持する。(樋口)



第29図 E6号墳 第Iトレンチ遺物出土状況

3 遺物

(1) 遺物の概要

今年度の調査では、第1トレンチから28点、表面採集により7点、計35点の遺物が得られた。その内訳は、剥片2点、土師器片4点、須恵器片28点、煙管1点である。

墳丘北東部に設定した第1トレンチでは、墳丘斜面や、周溝埋土上に堆積する層などから、土師器片3点、須恵器片25点が出土した。また、石室の開口部付近にて土師器片1点、須恵器片3点、墳丘よりやや外れた地点より黒曜石製とチャート製の剥片をそれぞれ1点、煙管1点を表面採集した。(今関)

(2) 墳丘出土遺物

i) 土師器 [第30図、図版11]

土師器は、高杯脚部片1点、器種不明底部片1点、器種不明残片1点の計3点が出土した。以下では、実測可能であった2点を報告する。

高杯 1 [29] は、J17グリッドより出土した高杯脚部片であり、外面にヘラナデ調整を施し、内面にケズリを施す。脚部端部をナデ調整する。

器種不明底部片 2 [28] は、J17グリッドから出土した器種不明底部片であり、内外面にナデ調整を施し、底部に棒状工具による沈線がみられる。(神澤・谷・樋口)

ii) 須恵器 [第30～32図、図版11]

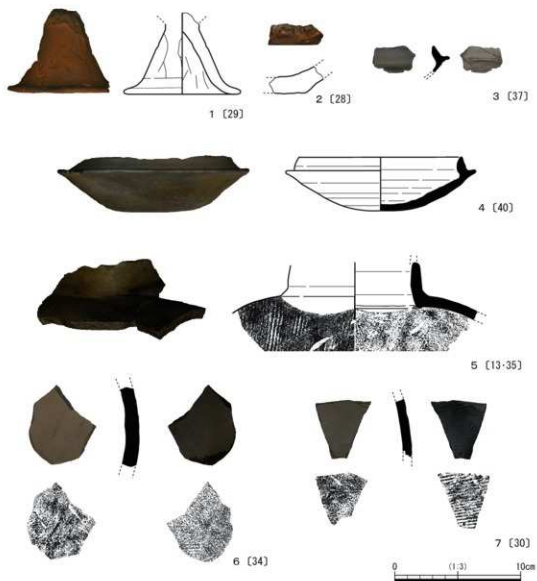
須恵器は、杯片2点、甕片23点の合計25点が出土した。甕は、内外面調整などの特徴から、大きく5～7 [13・30・34・35] と、8～16 [17・19・21～26・27・33・36・38・39] のグループに分類できる。以下では、実測可能であった20点を報告する。

杯 3 [37] は、J17グリッドから出土した杯身の口縁部片であり、外面にナデを施し、内面にナデを施す。4 [40] は、H17グリッドから出土した風化の著しい杯身であり、外面にヘラケズリとロクロナデを施し、内面にロクロナデを施す。底部はヘラ切り後に、粘土をたして、形を整えている。年代は、TK43～TK209型式並行のものと思われる。

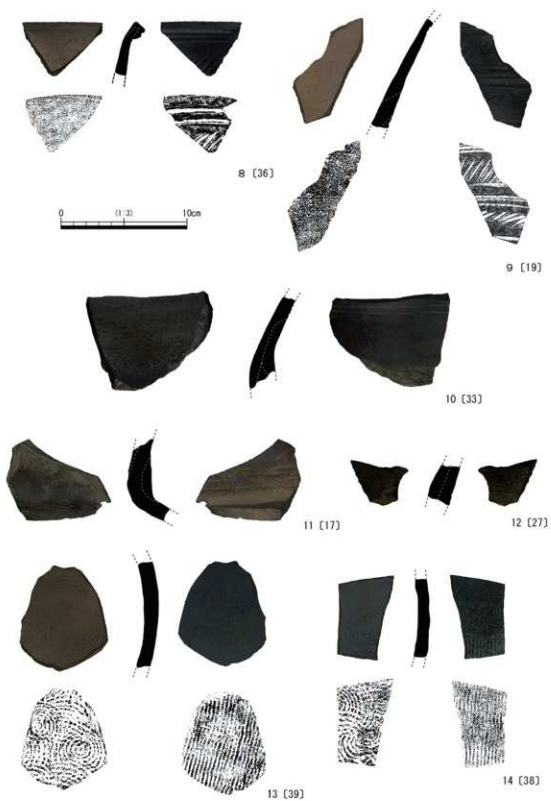
甕 5～7 [13・30・34・35] は、内外面調整などの特徴から同一個体と思われる資料群である。5は、G17グリッドから出土した [13] と、K17グリッドから出土した [35] が接合した頭部片であり、外面にタタキとナデ、内面にナデを施す。J17グリッドから出土した胴部片の6 [34] と、7 [30] は、外面にタタキ、内面にナデを施す。

8～16 [17・19・21～26・27・33・36・38・39] は、内外面調整などの特徴から同一個体と思われる資料群である。8 [36] は、K17グリッドから出土した甕の口縁端部の破片であり、口縁端部に粘土を貼り付け、肥厚させている。内外面ナデ調整、端部にユビナデ調整を行い、外面に沈線と波状文を配

す。9〔19〕は、H17グリッドから出土した甕の口縁部片であり、内外面ナデ調整後、外面に沈線・波状文・ヘラ描き斜線文が配される。J17グリッド出土の10〔33〕、G17グリッド出土の11〔17〕、I17グリッド出土の12〔27〕は、甕の頸部であり、外面にナデ調整を施し、内面の一部に同心円文の当て具痕が見られる。タキ技法による肩部成形後、端部に粘土紐を積み上げることで口縁部を成形する。その後、口縁部内外面に粘土を付加し、ナデ調整を行い頸部から口縁部を整形する。G17グリッド出土の11〔17〕H17グリッド出土の13〔39〕14〔38〕16〔21~26〕、J17グリッド出土の15〔31〕は、甕の胴部の破片であり、外面にタキ、内面に同心円文の当て具痕がみられる。（樋口・小池・平井・谷）



第30図 E6号墳出土遺物(1)



第31图 E6号墳出土遺物(2)



第32图 E 6号墳出土遺物(3)

第4表 E6号墳 土師器観察表

図面番号	遺物番号	出土地点	器種	部位	計測値(cm)		調整				胎土	焼成	残存率	
					口径	器高	外面	内面	外面					内面
-	9	表探	甕	胴部	不明	12.3	不明	不明	不明	黄褐色 10YR5/6	黒色 N1.5/0	白色粒子少量	中々 良好	破片
-	16	G17	不明	不明	不明	(1.7)	不明	不明	不明	紅褐色 1.5YR5/3	黒褐色 7.5YR4/1	白色粒子少量	良好	破片
第30図2	28	J17	不明	底部	不明	12.0	ナデ	ナデ	ナデ	1.5G5/黄褐色 10YR6/4	1.5G5/黄褐色 10YR7/4	白色粒子少量 黒色粒子少量	良好	破片
第30図1	29	J17	高杯	脚部	(6.0)	(5.8)	ヘラナデ →ナデ	ナデ	ナデ	オリーブ黄色 5YR6/6	1.5G5/黄褐色 5YR4/2	白色粒子少量 黒色粒子少量	普通	破片

第5表 E6号墳 須恵器観察表

図面番号	遺物番号	出土地点	器種	部位	計測値(cm)		調整				胎土	焼成	残存率	
					口径	器高	外面	内面	外面					内面
-	6	表探	甕	胴部	不明	(4.3)	横ナデナ	ナデ	ナデ	灰色 5Y4/1	灰色 N4.0	白色粒子微量	普通	破片
-	7	表探	甕	胴部	不明	(3.4)	ナデナ	ナデ	ナデ	灰黄色 2.5Y6/2	淡黄色 2.5Y7/3	白色粒子中量	普通	破片
-	8	表探	甕	胴部	不明	(6.0)	ナデナ	ナデ	ナデ	灰白色 5Y7/1	灰白色 5Y5/1	白色粒子微量	中々 良好	破片
第30図5	13	G17 K17	甕	胴部	不明	(4.1)	ナデナ	ナデ	ナデ	1.5G5/黄褐色 2.5Y6/3	灰黄色 2.5Y6/2	白色粒子少量 黒色粒子少量	良好	破片
-	14	G17	甕	胴部	不明	(4.3)	ナデナ	ナデ	ナデ	暗灰色 N3.0	灰黄色 2.5Y6/2	白色粒子微量 黒色粒子微量	良好	破片
-	15	G17	甕	胴部	不明	(7.9)	ナデナ	ナデ	ナデ	灰褐色 N4.0	灰オリーブ色 5Y6/2	白色粒子微量 黒色粒子微量	良好	破片
第31図11	17	G17	甕	胴部	不明	(6.0)	ナデナ	ナデ	ナデ	暗灰色、灰白色 N3.0、5Y7/2	暗灰色 N3.0	白色粒子微量 黒色粒子微量	良好	破片
-	18	G17	甕	胴部	不明	(7.0)	ナデナ	ナデ	ナデ	灰色 5Y5/1	灰白色 7.5Y7/1	白色粒子微量 黒色粒子微量	良好	破片
第31図9	19	H17	甕	底部	不明	(8.7)	横ナデ	横ナデ	横ナデ	暗灰色 N3.0	灰白色 5Y7/2	白色粒子微量	良好	破片
-	20	H17	甕	胴部	不明	(7.2)	ナデナ	ナデ	ナデ	灰色 N6.0	灰色 N5.0	白色粒子微量 黒色粒子微量	良好	破片
第32図16	21 22 23 24 25 26	H17	甕	胴部	不明	(14.3)	ナデナ	ナデ	ナデ	灰色 N5.0	灰白色 5Y7/2	白色粒子微量 黒色粒子微量	良好	破片
第31図12	27	I17	甕	胴部	不明	(3.2)	ナデ	ナデ	ナデ	灰色 N4.0	灰白色 7.5Y7/2	白色粒子微量 黒色粒子微量	良好	破片
第30図7	30	J17	甕	胴部	不明	(4.5)	ナデナ	ナデ	ナデ	灰色 N4.0	灰黄色 2.5Y7/2	白色粒子微量 黒色粒子微量	良好	破片
第32図15	31	J17	甕	胴部	不明	(6.7)	ナデナ	ナデ	ナデ	灰色 5Y5/1	灰黄色 2.5Y6/2	白色粒子微量 黒色粒子微量	良好	破片
-	32	J17	甕	胴部	不明	(8.6)	ナデナ	ナデ	ナデ	灰褐色 5Y6/1	灰色 5/1	白色粒子微量 黒色粒子微量	良好	破片
第31図10	33	J17	甕	胴部	不明	(7.7)	ナデ	ナデ	ナデ	灰色 N4.0	灰オリーブ色 5Y6/2	白色粒子微量 黒色粒子微量	良好	破片
第30図6	34	J17	甕	胴部	不明	(6.2)	ナデナ	ナデ	ナデ	灰色 5Y6/1	淡黄色 2.5YR7.4	白色粒子少量 黒色粒子少量	良好	破片
第31図8	36	K17	甕	胴部	不明	(4.3)	ナデ	ナデ	ナデ	黒色 N2.0	灰オリーブ色 5Y6/2	黒色粒子微量	良好	破片
第30図3	37	J17	杯	胴部	不明	(9.5)	ナデ	ナデ	ナデ	灰白色 2.5Y7/1	灰白色 2.5Y7/1	白色粒子微量	不良	破片
第31図14	38	H17	甕	胴部	不明	(6.1)	ナデナ	ナデ	ナデ	灰白色 10Y7/1	黄灰色 2.5Y5/1	白色粒子微量 黒色粒子微量	良好	破片
第31図13	39	H17	甕	胴部	不明	(8.3)	ナデナ	ナデ	ナデ	暗灰色 N3.0	灰色 5Y5/1	白色粒子微量	良好	破片
第30図4	40	H17	杯	杯身	12.6	4.2	ヘラナデ リ	ナデ	ナデ	灰白色 2.5Y7/1	灰黄色 2.5Y7/2	白色粒子微量	不良	60%

※胴部付

4 小結

この第12次調査におけるE6号墳での調査では、墳丘の規模・構造を確認するため、測量成果をもとに墳丘東側に調査区を設定した。その結果、E6号墳について、暫定値ながら墳丘径約18.5m以上、残存高約2.5m、周溝幅約1.8mの円墳であることを明らかにした。

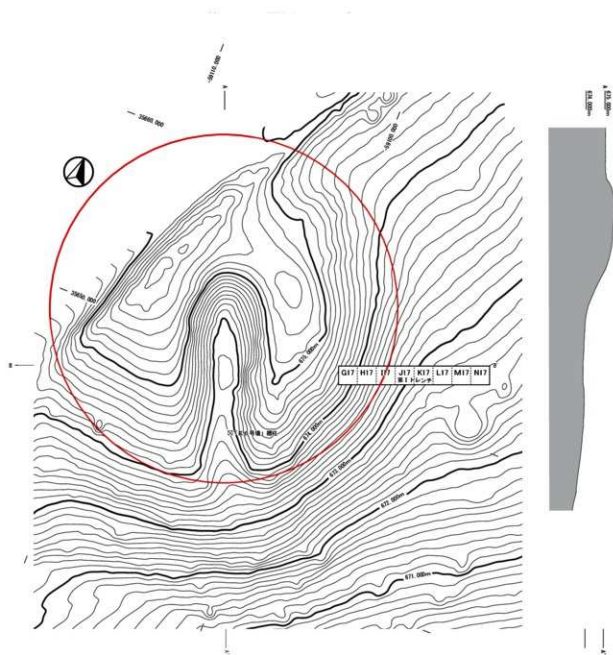
第Iトレンチでは、ローム質の自然堆積層を確認した。墳丘は、このローム質土層を盛土として形成されたものと考えられる。墳丘北東側のJ17グリッド前後には、比較的大型のロームブロックを多量に含むことから盛土であると判断した9層と、周溝の可能性のある幅約1.8mの落ち込みが認められる。これを墳丘端部とみなし、石室推定中軸線との距離約8.8mを2倍にすると、当該部位における墳丘幅を約17.6mと推定することができよう。もともと、この位置は、墳丘の東西軸より些か南寄りとなっている。調査区を一つ設定したのみの現状にて、直ちにE6号墳の規模を復元することは不可能であるが、等高線の様子などを総合的に勘案し、少なくとも18.5m以上の墳丘径であったと想定しておくことにしたい(第33図)。

遺物は、表面採集資料を含めて計35点が出土した。その多くを占める須恵器甕は、胴部片を主とし、頭部片も含んでいる。胎土や調整方法の観察から、少なくとも大甕だけでなく、中型の甕も存在したようだ。このほか、Hグリッドから出土した須恵器杯身〔40〕があり、これをTK43~TK209型式並行のものと同認めれば、E6号墳もF9号墳と同じく6世紀末から7世紀初頭に築造されたものと判断できる。

また、遺物の出土状況に関しては、前底部を除くF9号墳の墳丘外に遺物が殆ど見られないのに対し、E6号墳では墳丘盛土の流れ込みと思われる土層からも多数の遺物が出土した。これは、石室の天井石がある段階で盗掘を受けた可能性のあるF9号墳と、天井石が失われた際、あるいはその後に遺物が持ち出された可能性のあるE6号墳の違いを反映したものであろうか。

なお、今回の調査では、一調査区から得られた成果に基づいて墳丘規模を推定した。今後は、E6号墳の墳丘規模や、築造過程を詳細に検討していくため、自然堆積層の精査を行ってE6号墳の立地条件を明らかにするとともに、新たな調査区を設定して調査成果の精度を高めていく必要がある。

(久光・谷・樋口)



平面図の座標系 (JGD2011, 測尺系:SP50 - 66761) による座標系
 (E4標尺) X座標: 35446.1042 Y座標: -59102.2995 Z座標: 674.379578



第33図 E6号堤防 墳径復元案

第V章 結 語

1 調査のまとめ

以上、徳高古墳群F9号墳の第12次調査と、E6号墳の第1次調査について、その成果を報告してきた。ここでは、改めて両古墳の立地環境や、墳丘・埋葬施設の様相などを整理した上で、今後の調査研究課題を示して跋に代えたい。

F9号墳の調査成果 烏川扇状地の扇央附近に位置するF群は、烏川左岸の扇状地性砂礫層を基盤とする。地表から僅か20cm程度で現れる砂礫層は、大小の礫が密に堆積したものであり、勢い古墳の盛土も土石混合にならざるを得なかった。

その内、わたしたちが調査の畝を入れたF9号墳(第16・17・34図)では、標高663.6m前後にて基盤となる砂礫層を概ね水平に整地し、南側に開口する石室の範囲を深さ70cm～80cmほど掘り出した上で、埋葬施設と墳丘の構築がはじめられている。まずは、この掘方の北端に大型の腰石を据え、その左右に2段分の奥壁を積み、さらに側壁の構築に取り掛かったのであろう。次は、奥壁・側壁の何れも、整地面に3段目の石材を載せ、背後に控え積みの礫を詰めた上で、礫混じりの黒色土層を積み上げていった。そして、このような工程を概ね6段目まで繰り返した後、4段目から持ち送り状に傾斜させていた壁体に、今は失われてしまった天井石を載せ、全体を盛土で被覆したものと考えられる。その結果、破壊されてしまった羨道部から前庭部にかけての様相こそ詳らかでないものの、長さ約6.0mの玄室を内蔵し、部分的に幅約1.8mの溝溝を持つ、直径約12.0mの円墳が形成されたのであった。

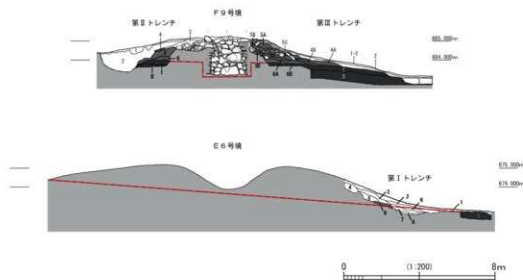
また、遺物出土の状況からは、以下のようなF9号墳のライフサイクルが見えてきた(第22～24図)。第1段階：石室床面とみられる礫散布面(標高約663.1m～約663.2m)に、初葬時の遺体や副葬品(装身具・直刀・鉄鏃・馬具・須恵器など)が納められた6世紀後半～7世紀初頭。第2段階：初葬時の副葬品配置に乱れが生じた面(標高約663.1m～約663.3m)に、土師器椀や須恵器杯が納められた7世紀中頃。第3段階：閉塞石附近(標高約663.2m)に、最後の祖霊祭祀に用いられたと思しき須恵器類を積み重ねた8世紀前半。第4段階：猪鹿牧の施設に転用された可能性がある石室内(標高約663.2m)に、ウマの骨・歯が置かれた9世紀末から11世紀前半。第5段階：玄室内に土砂が堆積し、前庭部や墳丘外に遺物が持ち出された時期。第6段階：封土と天井石が失われ、石室内に大型の礫などが詰め込まれ、その間隙に近現代の銭貨や釘などが散布した段階。いずれにせよ、主に6世紀後半～8世紀前半にかけて、群内の古墳が墓としての機能を果たしていた点は、徳高古墳群全体に共通する現象である。

なお、墳丘の規模と構築過程について、今年度の調査によって得られた知見と、過年度成果から一部所見の変更があった点を簡潔に述べておく。まず、墳丘南側の第1トレンチ(第18図)に関しては、玄室の南側に延びていた羨道部が破壊されているため、土層堆積状況の解釈も難しかったが、基盤の砂礫層上に重なり、礫若干を含んだ黒褐色土層の3層(第10次～5層)を墳丘盛土と考えておきたい。一方、墳丘

北側の第Ⅳトレンチ(第21図)では、土層堆積状況の評価に大きな変更はなく、Ⅰ層を掘り込んだC-5グリッド前後の落ち込みを周溝であると想定すれば、5層(第7次-3層)を周溝埋土、黒褐色土層の6層(第7次-2層)を墳丘盛土と位置付けることができる。第Ⅲトレンチ(第20図)については、これまでⅠ層の東半を基盤層から分離(第5~11次-3層)してきたが、何れも扇状地由来の砂礫を多量に含んでおり、堆積に至った契機を異にした可能性はあるものの、取って区別する必要なしと判断し、総じてⅠ層とみなした。そうすると、礫若干を含む黒褐色土層の4A層(第11次-2A層)東端が、墳丘東側端部を示している可能性が高くなる。実際、そこから石室中軸線までの約6.0mをF9号墳の半径とみなし、第Ⅳトレンチ6層北端を墳丘北側端部とする円墳であったと仮定すれば、失われた羨道部も含めた概ねの墳丘範囲を直径約12.0mと見積もることが可能となろう(第16図)。

E6号墳の調査成果と課題 烏川左岸に展開するE群の基盤層は、F群の様相と全く異なり、砂礫層の上に分厚く積もったローム質の風成堆積層によっている。これは、E群の位置する段丘崖が、F群の位置する烏川第5段丘面より2面上位の第3段丘面(離山面)にあたるため、烏川からの離水時期が早く、火山灰等が厚く堆積し得る環境にあったからに他ならない。地表から、僅か10cm~15cmほど掘削すれば基盤のローム質土層に到達しており、この明褐色土層が墳丘盛土の母材となっていることを予想させる。新たに発掘調査を開始したE6号墳(第11・26図)は、段丘崖に点在する古墳の一つであり、かねて直径20mほどの規模と見積もられてきた。徳高古墳群の内部においては、比較的大型の事例として知られ、惜しくも南東方向に開口する横穴式石室の石材が悉く持ち去られているが、明治44(1911)年に発掘された際も須恵器・武器・馬具・装身具などが豊富に出土している。つまり、このE6号墳は、墳丘の規模と、副葬品に認められる質量との相関関係についても検討を及ぼし得る好事例なのだ。

今回の調査では、墳丘北東側に第Ⅰトレンチ(第26・27図)を設けたに過ぎないが、調査区北東端でローム質土層が確認できた標高約672.7m地点から、市道に接する墳丘南西側の標高約674.5m地点あたりまで、崖線の傾斜に沿って基盤層が堆積しているものと想定している(第34図)。このような予測によれば、ローム質土層の上面、標高約673.5m前後に石室床面が設けられたものと考えられよう。そして、均



第34図 E6号墳・F9号墳 土層断面図

質なローム質土層を基盤に、ロームブロック混じりの墳丘盛土が施され、J17グリッド前後の幅約1.8mにわたって認められる周溝状の落ち込みには、黒色土層も混ざった流れ込み土が堆積している。一方、盛土の可能性を残す9層北東端から、石室の推定中軸線までは、約8.8mとなっている。但し、E6号墳本来の墳丘北東-南西軸は、第Iトレンチ北西壁より3mほど北西寄りと予想されるため、一先ず周辺の等高線の様子も勘案して、直径約18.5mの円墳であると考えておきたい(第26図)。

もっとも、このような見通しは、あくまで第Iトレンチのみの調査結果に立脚するものである。今後は、墳丘の周囲における基本層序を入念に把握した上で、どのような基盤に古墳が営まれたものか、丁寧に点検していくことが求められよう。また、今のところ墳丘斜面から周溝状遺構にかけて、6世紀後半以降の土師器・須恵器類の散布を確認しているが、長期の曝露によるものかと思われる風化痕跡の顕著な遺物が、細かいロームブロック混じりの土層から出土している(第28図)。つまり、未だ現状では、墳丘盛土まで調査の手が及んでおらず、墳丘斜面の流れ込み土を除去している段階にある可能性も想定しておくべきではなかろうか。いずれにせよ、E6号墳の調査は緒に就いたばかりであり、様々な仮説を検討しつつ、それを裏付けるために有効な調査手法を熟慮していきたいと考えている。

コロナ禍と実習調査 ところで、今年度の実習には、終始コロナ禍という大きな課題が立ちはだかっていた。しかも、現地調査を行った8月上旬は、重症化の懸念著しいデルタ株が流行した第5波にあたり、整理作業の追い込み期間であった年末年始も感染力が強いオミクロン株がドミナントとなった第6波の只中である。従って、実習の前提となる調査機材の講習や、帰京後の整理作業も思うように進まぬことが予想された。

そこで、オンラインと対面授業のメリハリをつけ、文化財保護法と埋蔵文化財調査の枠組みに関する講義と、例年課外で行ってきた古墳時代研究会を正課のうちにオンラインで実施。また、感染症対策を厳にした上で、感染拡大の谷を狙っての調査前機材練習や、帰京後の図面・遺物の整理など、スケジュールも臨機応変に工夫しながらの取り組みを進めてきた。一方、國學院大學博物館の協力によるオンライン現地説明会も開催するなど、対面による成果公開が難しい中で、より効果的な教育普及事業も試みたところである。とりわけ、PCR検査にて陰性を確認した上で、極力外部との接触を断ったコミュニケーションによる現地調査は、感染拡大期の授業形態を考える上で一つのモデルになっていくことだろう。

なお昨今は、予算の関係上、複数年次の成果をまとめて刊行する場合も多かったが、偶然が重なることとなり年度内に報告書を刊行する運びとなった。コロナ禍の影響を受けて、整理作業も遅々として進まぬものと思われ中、本報告書の編集にあたって考慮したのは、過年度報告で活かすべき部分を引き継ぎつつ、今年度明らかにし得た成果を簡潔に示していくことである。例年力を入れてきた考察を省いて事実記載に徹したが、この成果を次年度以降の羅針盤として広く活用して頂きたい。なお、本書は、整理作業の最終盤に納期延長も止む無しとなって以降、校正の期間を短縮するため、大日方助手がDTPソフトを駆使して編集したものであることを銘記しておく。

巻末ではあるが、調査に当たってご協力を賜った関係機関・各位、粘り強く現地調査と報告書編集に携わってくれた考古学実習生、そして寸暇を惜しんで教員を補佐し、後輩の指導に尽力された大学院生、上級生に心から感謝申し上げる次第である。

(深澤)

2 おわりにあたって

平成21(2009)年度から始まった國學院大學考古学研究室による穂高古墳群F9号墳の発掘調査は、令和3(2021)年度で第12次調査を迎えた。新型コロナウイルス感染症拡大の影響により、令和2(2020)年度の実習が中止になってしまったため、令和元(2019)年から2年ぶりの実習であった。この調査では、F9号墳の墳丘端部の把握および墳丘規模の確認を主な調査目的とし、調査区として第Ⅰ・Ⅲ・Ⅳトレンチを設定し、調査を実施した。くわえて、E6号墳でも墳丘規模の確認とF9号墳との比較を主な調査目的とし、石室主軸に直交する形で、墳丘東側に第Ⅰトレンチを設定して調査を実施した。

第12次調査は、新型コロナウイルス感染症拡大の影響で令和2(2020)年度の実習が中止になったため複数学年が参加しただけでなく、特別参加生も多数参加したため非常にぎやかであった。考古学調査法の授業では、オンライン授業をまじえながら機材の使用方法や図面の作成方法、文化財保護法について学んだ。また、前期の考古学調査法では古墳時代と穂高古墳群について分担し、調べたことを発表することにより理解を深めた。前期が終了するころには、発掘調査という実践のための準備は整った。

8月に入り、実習当日を迎えたが、はじめて発掘調査に携わる実習生がほとんどであり、戸惑うことも多々あったが、上級生に支えられ調査を行うことができた。また、新型コロナウイルス感染症拡大により、実習前に思うようにコミュニケーションが取れず、人間関係で不安に思うこともあったが、日数がたつにつれ、実習生の仲が深まった。そして、実習生にも余裕ができたことにより主体的に考え、行動できるようになっただけでなく、学んだことが実践できるようになり、作業効率も上がっていった。天候に恵まれず、翌日の調査での作業量が多くなり、大変な場面もあった。この10日間にわたる実習を通じて、考古学調査法で学んだ発掘調査をする上で必要な技術の実践方法を学ぶことができた。価値観が異なる仲間たちと寝食を共にしながら一つの目標に向かって努力するという経験は、非常に貴重な体験であったと確信している。また、実践をもって仮説を検証する「実事求是」という姿勢の重要性について身をもって体験することができたのは、非常に幸運であると思う。

F9号墳では遺物は出土しなかったが、E6号墳では遺物が出土した。そのため後期の考古学調査法では、自分たちの手で取り上げた遺物を用いて実測や拓本を行うことができ、非常に勉強になった。

この報告書を、実習年度内に刊行できたのは、実習生たちが主体的に協力して作業を進めてきてくれただけでなく、先生方、先輩方が手厚く支えてくださったおかげである。感謝してもしきれない。この期間を通じて学び、経験したことはかけがえのない思い出になるだけでなく、これからの人生を生きていくうえで役に立つことがあると信じている。

最後になりましたが、発掘調査実習の準備から報告書刊行に至るまで、ご指導してくださった先生方、諸先輩方、そしてご支援くださった方々に、この場をお借りして深く御礼申し上げます。(水谷)

附編 第12次調査における測量と三次元計測の経過

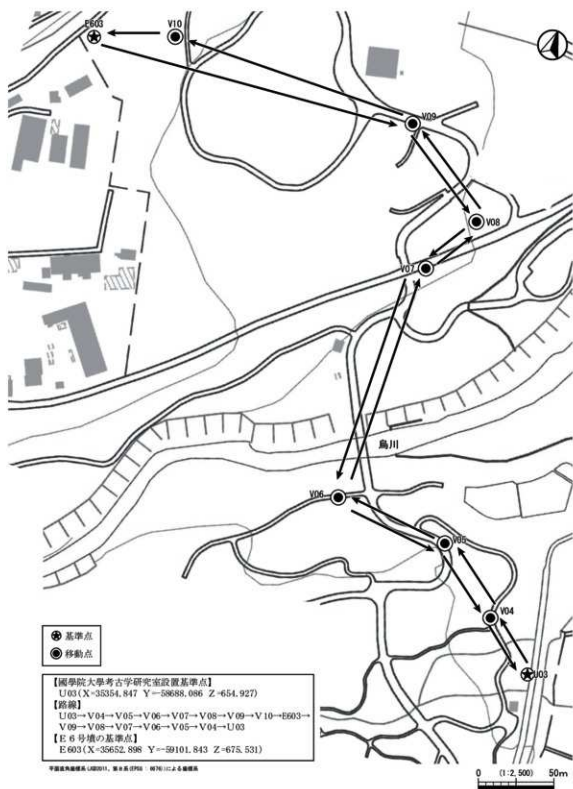
1 測量調査

トラバース測量 E 6号墳に測量基準点(E 603)を設けるため、本学考古学研究室が公園内に設置した平面直角座標系¹⁾のJGD2011²⁾の第8系(EPSSG: 6676)に基づく基準点U03から閉合によるトラバース測量を行った。

測量に使用したトータルステーションはTOPCON社製IS305、プリズムは同社製プリズム2型、座標の算出は同社製FC500を用いた。第35図に示したように、往路U03→V04→V05→V06→V07→V08→V09→V10→E 603、復路E 603→V09→V08→V07→V06→V05→V04→U03の順で測定し、X軸方向に-0.022m、Y軸方向に-0.035m、Z軸方向に0.061mの誤差が生じていた。誤差を補正するため、それぞれの誤差を測量回数で割ってE 603に足し、E 603の座標を得た。その後、E 603から開放トラバースによる基準点を設置した。なお、測量に使用した基準点とE 6号墳の基準点の座標を第6表に一覧として示し、E 6号墳の基準点を第36図に示した。(篠田)

第6表 トラバース測量に使用した基準点とE 6号墳の基準点の座標
(平面直角座標系のJGD2011の第8系(EPSSG: 6676))

性質	基準点名称	X(m)	Y(m)	Z(m)
本学考古学研究室	U03	35354847	-58688086	654927
閉合	E 603	35632898	-59101843	675531
	E 603(主軸上)	35635853	-59106381	675591
開放	E 602(主軸上)	35642169	-59101055	673337
	E 604	35644957	-59108692	674454
	E 605	35655598	-59093911	673198
	E 606	35655792	-59088154	672540
	E 607	35659366	-59092525	672495
	E 608	35661773	-59097561	673965
	E 609	35640201	-59099267	672418
	第1トレンチ南西隅	35650564	-59097383	674252
	第1トレンチ北西隅	35651490	-59088189	674435
	第1トレンチ北辺中央	35652937	-59094506	673012
	第1トレンチ北東隅	35654377	-59090728	672692
	第1トレンチ南東隅	35653434	-59090414	672615
	第1トレンチ南辺中央	35651993	-59094142	672839



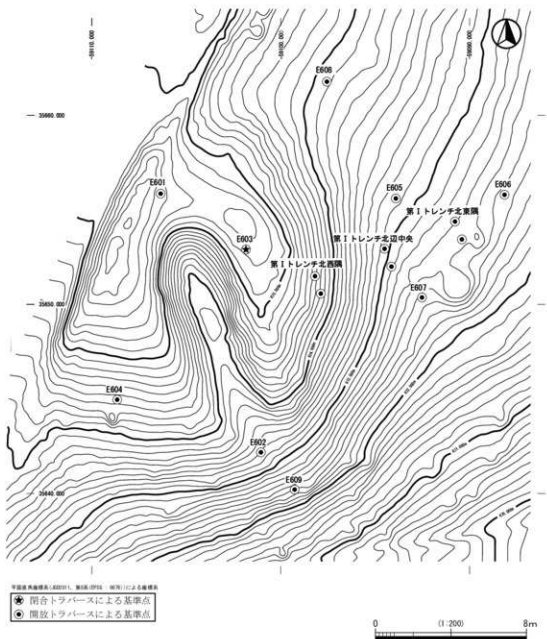
第35図 トラバース路線図

(平面直角座標系 (JGD2011, 第8系 (EPSG: 6676)) による座標系)

2 遺構の三次元計測

(1) 計測手法

2つの計測手法 E 6号墳とF 9号墳の墳丘は位相差方式の三次元レーザースキャナーであるFARO社製Focus 3D X 130 HDR、トレンチはSIMで計測した。



第36図 E 6号墳の基準点

(平面直角座標系(JGD2011, 第8系(EPGS:6676))による座標系)

前者は赤外線レーザー光の波長のずれ(位相差)を利用している³⁾。機械から赤外線レーザー光線を放射して反射してきた光線を計測する。計測後、放射時と反射時の波長のズレを計算して機械と対象物との距離を算出し、機械を中心に三次元点群を生成する。後者はカメラで撮影した複数枚の写真を利用して対象物の三次元データをパソコン上に生成する技術である⁴⁾。

使い分けの理由 F9号墳はある程度の面積を有している。また、E6号墳は範囲確認が調査目的であり、墳丘が位置する傾斜地を含めて計測しなければならなかった。しかし、調査期間は限られており、必要な範囲を短時間で計測する必要があった。

位相差方式の三次元レーザー scanner は広範囲を効率良く計測できるため、墳丘の三次元計測に適していた。けれども、Focus 3D X 130 HDRは据え置き型であり、トレンチには石材や根によって赤外線レーザー光線の死角となる箇所が多い。その一方、カメラであれば、死角となる箇所に回り込んで撮影できる。したがって、カメラで撮影した写真から三次元化するSfMはトレンチの三次元計測に適す。

(2) 墳丘

使用機材 位相差方式の三次元レーザー scanner にはFocus 3D X 130 HDRを使用した。計測の際には本体に加えて三脚とターゲット球も使用した。Focus 3D X 130 HDRで得た三次元点群を編集するソフトウェアにはFARO社製SCENE (ver.2019.0.1.1653)、SCENEから出力した三次元点群に座標を与えるソフトウェアにはフリーソフトであるCloudCompare⁵⁾ (ver.2.11.3)を用いた。

計測手順 Focus 3D X 130 HDRの今回の計測精度は10m先で15.34mmごとに1点とした。1回の計測には5分ほどを要し、E6号墳は40回、F9号墳は12回の計測を行った。この段階では、各計測で得た三次元点群は計測回ごとに保存されているので、各回の三次元点群で同じ箇所をSCENEで指定して合成した。三次元点群をSCENEから出力後、三次元点群を実際の長さや面積に近くするため、CloudCompareを用いて三次元点群に投影座標系⁶⁾の座標を与えた。E6号墳はトラバース測量で得た平面直角座標系のJGD2011の第8系(EPSG:6676)に基づく座標、F9号墳は過年度調査で得た平面直角座標系のJGD2000の第8系(EPSG:2450)に基づく座標をUTM zone 53N(EPSG:6690)⁷⁾に変換⁸⁾し反映させた。なお、変換を行った理由はJGD2011の座標系は左手系(横軸がX軸、縦軸がY軸)であるが、CloudCompareの座標系は右手系(横軸がY軸、縦軸がX軸)であるためである。そして、2つの座標系が混在している理由は、F9号墳の座標は2009年度調査⁹⁾時に得ており、当時の日本測地系はJGD2000であったためである。

(3) トレンチ

使用機材 カメラにはFUJIFILM社製X-T100、Nikon社製D7500を使用した。焦点距離・絞り値・ISO感度は撮影時の状況に合わせて。SfM用のソフトウェアとしてはAgisoft社製Metashape Professional (ver.1.7.4)を使用した。

計測手順 まずカラーチャート入り写真を撮影し、トレンチをくまなく撮影した。撮影後、撮影時に生成されたJPEG形式の画像を使い、Metashapeで写真のアライメントを仮処理して三次元化できている

か否かを確認した。確認後、カメラに付属している現像用ソフトでRAWデータを色合わせて現像した。そして、本処理を行った。具体的には、メッシュ構築をして2-(2)で得たUTM zone 53N (EPSG: 6690)に基づく座標を三次元データに与えた。(篠田)

3 遺物の三次元計測

使用機材 遺物のオルソ画像を作成するため、据え置き型の三次元スキャナーであるShining 3D社製EinScan-SEを使用した。計測で得たデータを解析するソフトウェアには同社製EXScan S (ver.3.1.0.1)とCloudCompare(ver.2.11.3)を用いた。

EinScan-SEを使用した理由 初めはSfMによる三次元化を目指していた。SfMは撮影してから三次元化するという2段階を踏まなければならない、1日2点から3点が限界であった。一方、EinScan-SEは撮影の段階が不要であり、1時間ほどで1個の遺物を三次元化できる。そのため、EinScan-SEはE6号墳から出土した遺物20点を短時間で三次元化することに適していた。

計測手順 EinScan-SEを使い、回転台の上に設けて10度間隔で計測する。そして、遺物と回転台や遺物と支持具の接地面は計測されないため、接地面が計測できるように設置して再度計測する。計測後、EXScan Sで位置合わせを行って出力し、CloudCompareでオルソ画像を作成した。(篠田)

4 三次元データの処理

(1) 土層断面図用オルソ画像の作成

使用機材 使用したソフトウェアはAgisoft社製Metashape Professional(ver.1.7.4)とQGIS 3.16.16 with GRASS 7.85³⁰⁾である。QGISは最新リリース版ではなく、長期リリース版を、MSI形式ではなく、EXE形式をインストールすることが推奨される。最新リリース版は最新の機能が使える一方、デバックが不十分であり、エラーが生じやすい。また、QGISはインストールのファイル形式を選択できるが、MSI形式でインストールすると、エラーが生じやすい。

作成手順 Metashapeでトレンチの壁面のオルソ画像をTIFF形式で生成し、その画像をQGISに読み込ませる。そして、ジオリファレンサ機能を使い、画像に座標と標高を与える。X座標には、X軸に沿うトレンチはX座標、Y軸に沿うトレンチはY座標を入力する。加えて、トレンチの向きを変えたい時はX座標にマイナスを適宜加えた。その後、印刷レイアウトを作成し、アイテムプロパティでグリッドと標高を入れてインポートした。

(2) 等高線の作成

使用機材 ソフトウェアはFARO社製SCENE(ver.2019.0.1.1653)とCloudCompare(ver.2.11.3)、QGIS 3.16.16を用いてGRASS 7.85を使用した。

作成手順 SCENEで点群をエクスポートしてCloudCompareに読み込ませ、TXT形式にする。そして、QGISにインポートする。インポート後、TIN内挿⁴¹⁾(不規則三角網)でDEM⁴²⁾を生成する。そのまま等高線を生成させると、DEMが微細地形(木株・マウンドなど)を拾い、カクカクした等高線になってしまう。そのため、QGISのGRASSツールの1つである*r.mapcalc.simple*⁴³⁾でDEMを滑らかにし、微細地形による等高線への影響を和らげる。その後、等高線を生成し、印刷レイアウトを作成してインポートした。(篠田)

註

- 1) 平面直角座標系とは日本国内用の投影座標系であり「座標の原点を19の地点(系)に分け、それぞれの原点からの距離で位置」(喜多橋一2019「4章 座標参照系(CRS)」「業務で使うQGIS ver. 3 完全使いこなしガイド」、全国林業改良普及協会)を表す。したがって、地点によって使う系が異なる。例えば、E 6号墳またはF 9号墳は第8系だが、渋谷区は第9系となる。対象とする地点の系は国土地理院のウェブサイト「わかりやすい平面直角座標系」(<https://www.gsi.go.jp/sokuchikijun/jp.html>)で調べられる。
- 2) 「測量法及び水路業務法の一部を改正する法律」(平成13年6月20日法律第53号)が2002年4月1日に施行され「日本測地系(Tokyo)」から「世界測地系(JGD2000)」に移行した。改正理由は、日本測地系は日本独自の座標参照系であり、世界標準の座標参照系である世界測地系と400mから500mほどのズレが生じていたためである(前掲註1)。その後、JGD2000は「測量法施行令の一部を改正する政令」(平成23年10月21日政令第326号)が2011年10月21日に施行されてJGD2011へ移行した。改正理由は日本経緯度原点及び日本水準原点が2011年3月11日に東北地方太平洋沖地震を発生させた地殻変動によって移動したためである(国土地理院2011「測量法施行令の一部を改正する政令について」(<https://www.gsi.go.jp/seisakuhousei/seisakuhousei60002.html>)(2022年1月26日閲覧))。
- 3) FARO社2013「第1章：はじめに」[FARO LASER SCANNER FOCUS 3D マニュアル]。
- 4) 森健人2019「フォトグラマトリー(SfM/MVS)による哺乳類標本の3D モデル化と3D プリントによる活用」4「3D×博物館×活用」考古形態測定学研究会。
- 5) CloudCompareはCloudCompareのオフィシャルウェブサイト(<https://www.danielgm.net/cc/>)からダウンロードできる。具体的な操作手順はCloudCompare wiki(https://www.cloudcompare.org/doc/wiki/index.php?title=Main_Page)または中村亜希子2020「第4回 CloudCompareでスケールをいれよう」1、中村による、考古学徒のためのフォトグラマトリーを使った遺物の三次元計測講座(https://researchmap.jp/multidatabases/multidatabase_contents/download/276601/da83e78328f26e2d15f7ee2846ef420/18476?col_no=2&frame_id=761800)(2021年1月5日閲覧)を参照されたい。
- 6) 投影座標系とは「ある座標を原点として、そこから横Xm、縦Ymの位置を地図の位置とした座標系」(前掲註1)である。この座標系に基づく地図は「長さや面積を現実近くに測定」(前掲註1)できる。
- 7) UTM zone 53N(EPGS: 6690)はUTM座標系(ユニバーサル横メルカトル座標系)の第53系のことであり、投影座標系の1つである。平面直角座標系が日本国内用に対してUTM座標系は世界中で使える投影座標系である。
- 8) JGD2011(EPGS: 6676) (JGD2000(EPGS: 2450))を国土

- 地理院のサイト「緯度、経度への換算」(<https://vldb.gsi.go.jp/sokuchi/surveycalc/surveycalc/xy2bl.html>) で JGD2011(JGD2000)に基づく度分秒(60進法)の緯度・経度に変換する。そして、度に分を60で割った値、秒を3600で割った値を足し、JGD2011(JGD2000)に基づく10進法に変換する。その後、JGD2011(JGD2000)に基づく10進法を変換サイトでUTM座標に変換する。
- 9) 「報告2009」。
- 10) QGISはQGISのオフィシャル・ウェブサイト(<https://qgis.org/ja/site/forusers/download.html>) からダウンロードできる。QGISの具体的な操作については喜多耕一2019「業務で使うQGIS ver. 3 完全使いこなしガイド」、全国林業改良普及協会を参照されたい。
- 11) 今回、QGISに読み込ませたデータは点の集まりであり、隙間が生じている。内挿補間はそのデータを統計処理し、メッシュの状態にする処理である。TIN内挿は点群から三角形群を発生させ、各メッシュの標高を三角形の平面から線形近似によって内挿する処理のことである。(国土地理院2006「航空レーザ測量による数値標高モデル(DEM)作成マニュアル(案)」(<https://psgs2.gsi.go.jp/koukyou/download/re-za/310kouku.pdf>) (2022年1月26日閲覧)。
- 12) DEMとは「地表面を等間隔の正方形に区切り、それぞれの正方形に中心点の標高値を持たせたデータ」のことである(国土地理院「DEM(数値標高モデル)」(<https://www.gsi.go.jp/KIDS/KIDS16.html>) (2022年1月26日閲覧)。
- 13) 具体的な操作方法は@ishijunpei2020「QGISで滑らかな等高線を作成する」(<https://qita.com/ishijunpei/items/e8dc3f00b5df116a6a1>) (2022年1月26日閲覧)を参照されたい。

F 9号墳第2次～第11次調査・E 6号墳第1次調査 出土遺物一覧

凡 例

1. 本一覧表は、F 9号墳第2次調査(平成22年度)以降、およびE 6号墳第1次調査で出土した遺物の一覧表である。F 9号墳第1次調査では、遺物の出土は無かった。なお、E 6号墳の一覧表には、令和元(2019)年度の測量調査時に採集した遺物も掲載している。
2. 遺物番号：各遺物固有の個体番号。本文・挿図中において〔 〕内に示した番号と対応する。複数の個体が接合した場合、初出の番号に「ほか」と付して表記した。個体の別は、太線で示した。
3. 取上番号：調査時、および整理作業時に付した遺物番号。調査開始時からの通し番号である。破片番号に類するものであるが、1つの取上番号につき、同一個体の破片を複数含む場合もある。
4. 器種：遺物の種類。器種の別は二重線で示した。
5. 部位：遺物の部位。
6. 時期：遺物の時期。時期比定の根拠は割愛した。
7. 出土地点：遺物の出土地点。主に出土グリッドを示すが、トレンチ単位で表記した箇所もある。なお、F 9号墳の第2～3次調査で使用した旧グリッドについては、()内に表記した。旧グリッドと現行グリッド(第4次調査以降)の位置関係については、本書冒頭の凡例を参照。
8. 破片数：取上番号における破片数。
9. 備考：遺物に関する補足事項。
10. 各年度報告書掲載番号：遺物実測図・図版を掲載した報告書名および図面・図版番号。なお、報告書名は、以下のように略記した。

F 9号墳 第2次調査：2010年度報告書 第〇図〇

第3次調査：2011年度報告書 第〇図〇

第4次調査：2012年度報告書 第〇図〇

第5次調査：2013年度報告書 第〇図〇

第6次調査：2014年度報告書 第〇図〇

第7次調査：2015年度報告書 第〇図〇

第8次調査：2016・2017年度報告書 第〇図〇

第9次調査：2016・2017年度報告書 第〇図〇

第10次調査：2018・2019年度報告書 第〇図〇

第11次調査：2018・2019年度報告書 第〇図〇

E 6号墳 第1次調査：2021年度報告書 第〇図〇

F9号墳第2次調査～第11次調査出土遺物一覧

土師器

No.	取上 No.	器種	部位	時期	グリッド	総片数	備考	各年度報告書 図録番号
37714カ	377	純	体部	7世紀中頃	C4	1	309・413・438は組合せず	2014年度報告書 第19013
	384		体部		B3	1		
	385		体部		B3	1		
	389		口縁部		B3	1		
	413		口縁部		C3	1		
	417		口縁部		B3	1		
	418		口縁部		B3	1		
	419		口縁部-体部		C4	2		
	420		口縁部		B4	1		
	421		体部		B3	1		
	422		口縁部		B3	1		
	435		口縁部		B3	1		
	436		底部		B3	1		
	437		体部		B3	1		
	438		口縁部		B3	1		
439	口縁部	B3	1					
415	415	純	完整	7世紀中頃	B3	1		2014年度報告書 第19011
416	416	純	完整	7世紀中頃	B3	8		2014年度報告書 第19012
121	121	不明	不明		B8	1		未報告
19014カ	195	不明	不明		B6	1	同一器体の可能性	未報告
	228	不明	不明		B6	1		未報告
22214カ	222	不明	不明		B6	1		2014年度報告書 第19014
	254	不明	不明		C6	1		2014年度報告書 第19014
6	6	不明	不明		(B)A8	1	同一器体の可能性	未報告
61	61	不明	不明		(B)B8	2		未報告
68	68	不明	不明		(B)B8	4		未報告
78	78	不明	不明		(B)B7	3		未報告
131	131	不明	不明		B9	1		未報告
204	204	不明	不明		C7	1		未報告
411	411	不明	不明		B5	2		未報告
458	458	不明	不明		4T	1		2015年度報告書 第2401
3	3	不明	不明		(B)A8	1		未報告
4	4	不明	不明		(B)A8	1		未報告
7	7	不明	不明		(B)A7	1	未報告	
11	11	不明	口縁部		(B)A8	1	2010年度報告書 第1126	
15	15	不明	不明		(B)A8	1	未報告	
16	16	不明	不明		(B)A8	1	未報告	
17	17	不明	不明		(B)A8	1	未報告	
21	21	不明	不明		(B)A5	1	未報告	
22	22	不明	不明		(B)A8	1	未報告	
23	23	不明	不明		(B)A8	1	未報告	
44	44	不明	不明		(B)B10	1	上記121～22214カ、6～458と類似する器不明	未報告
55	55	不明	不明		(B)B10	1		未報告
56	56	不明	不明		(B)B8	1		未報告
82	82	不明	不明		(B)B10	1		未報告
98	98	不明	不明		(B)C9	1		未報告
132	132	不明	不明		C6	1		未報告
153	153	不明	不明		C10	2		未報告
247	247	不明	口縁部		C6	1		未報告
248	248	不明	不明		C6	1		未報告
250	250	不明	不明		C6	1		未報告
253	253	不明	不明		C6	3	未報告	
257	257	不明	不明		B4	1	未報告	

No	取上 No	品種	部位	時期	グリップ	破片数	備考	各年度報告書 掲載番号
410	410	不明	不明		B5	1		未報告
427	427	不明	不明		B6	2	上記121～222は小・6～436 と類似するが不明	未報告
486	486	不明	不明		C4	4		未報告
492	492	不明	不明		D9	1		未報告
495	495	不明	不明		E10	1		未報告
499	499	不明	不明		D11	1		未報告
502	502	不明	不明		E9	1		未報告
505	505	不明	不明		E9	1		未報告
506	506	不明	不明		E10	1		未報告
511	511	不明	不明		D10	1		未報告
521	521	不明	不明		E10	1		未報告
522	522	不明	不明		E10	1		未報告
524	524	不明	不明		D10	1		未報告
525	525	不明	不明		E10	1		未報告
527	527	不明	不明		D10	1		未報告
545	545	不明	不明		E11	1		未報告
552	552	不明	不明		E10	1		未報告
567	567	不明	不明		F10	1		未報告
614	614	不明	不明		F9	1		未報告
626	626	不明	不明		F10	1		未報告
628	628	不明	不明		F10	1		未報告
632	632	不明	不明		F9	1		未報告
644	644	不明	不明		D8	1		未報告
662	662	不明	不明		A12	1		2018・2019年度報告書 掲載03

消患器

No	取上 No	品種	部位	時期	グリップ	破片数	備考	各年度報告書 掲載番号
901小	99	子持壺	口縁部		(B/C)G	1		2011年度報告書 第132頁 2014年度報告書 第190頁
	294		口縁部		OE	1		
	406		口縁部		C1	1		
1601小	166	子持壺	口縁部	6世紀末～7世紀前 中頃小	B5	1	製作後一定期間位換した可 能性	2013年度報告書 第160頁13 2016・2017年度報告書 第240頁2
	539		体部		C2	1		
2091小	209	子持壺	不明		E2	1		未報告
	211		不明		E2	1		
2321小	232	子持壺	口縁部		C1	1		2013年度報告書 第160頁12
	398		口縁部		B3	1		
330	330	子持壺	口縁部		C1	1		未報告
335	335	子持壺	不明		B3	1		未報告
474	474	子持壺	胴部		B4	1		2015年度報告書 第247頁3
633	633	子持壺	胴部		F10	1	同一個体小	2018・2019年度報告書 掲載11
647	647	子持壺	頸部		F10	1		2018・2019年度報告書 第208頁2
1614小	18	フラスコ形長頸瓶	胴部	7世紀中頃	(B/A)B	1		2010年度報告書 第117頁1 2011年度報告書 第133頁1 2014年度報告書 第190頁16
	57		胴部		(B/B)B	1		
	346		胴部		B6	1		
157	157	杯	口縁部		E2	1		2012年度報告書 第130頁5
1603小	160	杯	底部	7世紀中頃	C3	1		2012年度報告書 第132頁2 2013年度報告書 第160頁1 2014年度報告書 第190頁6
	277		口縁部		B1	1		
	287		口縁部		C4	1		
	292		体部		C3	1		
	353		口縁部		B1	1		
	386		口縁部		E2	1		
	389		体部		E2	1		
	397		口縁部		B3	1		
	400		口縁部		E2	1		

No.	取上 No.	器種	部位	時期	グリッド	鏡片数	備考	各年度報告書 掲載番号
1604カ	405	杆	底部	7世紀中頃	C1	1		2012年度報告書 第13812 2013年度報告書 第16081 2014年度報告書 第19096
1604カ	482	杆	口縁部	7世紀中頃	C2	1		2006・2017年度報告書 第18501
	485		底部		C2	1		
	531		底部		C2	1		
	549		体部		B5	1		
	580		不明		B2	1		
841カ	8	杆	体部	8世紀前半	(B)A08	1		2010年度報告書 第11383 2011年度報告書 第13356
	10		底部		(B)A09	1		
	26		体部		(B)A30	1		
	41		底部		(B)B06	1		
	59		体部		(B)B09	1		
	62		口縁部		(B)B07	1		
	66		口縁部～底部		(B)B06	1		
	69		口縁部		(B)B09	1		
	86		口縁部		(B)B09	1		
	94		口縁部		(B)C03	1		
	116		口縁部		B8	1		
	139		口縁部		B7	1		
	159		体部		B10	1		
	163		口縁部		C9	1		
	2341カ		234		杆	口縁部		
255		口縁部	B6	1				
303		口縁部	B6	3				
304		底部	B6	1				
305		口縁部	B6	1				
306		口縁部	B6	1				
309		口縁部	B6	1				
310		口縁部	B6	2				
311		口縁部	B6	1				
312		口縁部	B6	1				
313		口縁部	B6	1				
3071カ		307	高台付杆	底部		8世紀前半	B6	1
	308	口縁部		B6	1			
	319	口縁部		B6	1			
	320	口縁部		B6	2			
	321	口縁部		B6	1			
	322	口縁部		B6	2			
3141カ	314	高台付杆	底部・口縁部	8世紀前半	B6	4	土器集中区西土	2013年度報告書 第16088
	315		底部・口縁部		B6	6		
	316		口縁部		B6	1		
	317		口縁部		B6	1		
318	318	高台付杆	定形	8世紀前半	B6	1	土器集中区西土	2013年度報告書 第16097
701カ	70	杆蓋	口縁部		(B)B09	1	2011年度報告書 第13385 2012年度報告書 第13391	
	73		口縁部		(B)B09	1		
	79		口縁部		(B)B09	1		
	87		天舟部		(B)B09	1		
	118		天舟部		B9	1		
	137		天舟部		B9	1		
	142		口縁部		B10	1		
	145		天舟部		B10	1		
	150		天舟部		B10	1		
	220		口縁部		C6	1		
	225		不明		E11	1		
							2016・2017年度報告書 掲載10	

No	取上 No	器種	部位	時期	グリップ	成片数	備考	各年度報告書 掲載番号
7014小	623	杯蓋	不明	8世紀前半	F9	1		未報告
	634		口縁部		F10	1		未報告
	298	杯蓋	底部		E6	2	土器集中区出土	2013年度報告書 第16092
323	323	杯蓋	底部	E6	4	土器集中区出土	2013年度報告書 第16093	
3212小	324	杯蓋	口縁部	8世紀前半	E6	1	土器集中区出土	2013年度報告書 第16094
	325		大丹部~口縁部		E6	8		
	327		口縁部		E6	1		
297	397	杯蓋	口縁部		E3	1		2013年度報告書 第16095
5414小	54	高杯	杯部底部	8世紀前半	①B7	2	一部の破片が土器集中区出土	2011年度報告書 第13054 2012年度報告書 第13053 2013年度報告書 第160910
	71		杯部口縁部		①B7	1		
	84		杯部底部		①B7	1		
	123		胴部		E7	4		
	152	杯部底部	F9		12			
	155	杯部	C8		6			
	299	杯部口縁部~底部	E6		1			
326	326	碗	略定形	8世紀前半	E6	1	土器集中区出土	2013年度報告書 第160911
13814小	138	羹	唇部		E7	1	2012年度報告書 第13096 2013年度報告書 第17016 2014年度報告書 第19098	
	223		胴部		E6	1		
	224		胴部		E6	1		
	226		胴部		E6	1		
	343		口縁部		E6	1		
	373		唇部		F9	1		
914小	9	羹	胴部	同一個体とみられる	①A8	1	2010年度報告書 第11385 2012年度報告書 第13067 2014年度報告書 第19099	
	65		胴部		①B9	1		
	97		胴部		①C9	1		
	135		胴部		B9・B10	1		
	208		胴部		E6	1		
	229		胴部		E6	1		
	364		胴部		E3	1		
2714小	27	羹	胴部		①A10	1		2010年度報告書 第11094
5614小	119	羹	胴部		B10	1	2014年度報告書 第19010	
	38		胴部		①B9	1		
	349		胴部		C6	1		
9014小	90	羹	胴部		①C7	1	2013年度報告書 第17018	
	271		胴部		C5	1		
233	233	羹	唇部		C4	1	2013年度報告書 第17017	
243	243	羹	不明		C3	1	未報告	
350	350	羹	胴部		E6	1	2014年度報告書 第19012	
374	374	羹	胴部		E3	1	2014年度報告書 第19011	
431	431	羹	不明		4T 西壁	1	2014年度報告書 第19013	
500	500	羹	不明		E11	1	未報告	
57014小	570	羹	胴部		F11	1	2018・2019年度報告書 第21011	
	574		胴部		F9	1		
575	575	羹	胴部		F10	1	2018・2019年度報告書 第21016	
57614小	576	羹	胴部下半		F10	1	2018・2019年度報告書 第21017	
	600		胴部下半		F9	1		
577	577	羹	胴部		F9	1	2018・2019年度報告書 第21020	
58114小	584	羹	胴部		F10	1	2018・2019年度報告書 第21028	
	616		胴部		F10	1		
	618		胴部		F10	1		
	651		胴部		F9	1		
587	587	羹	胴部		F9	1	2018・2019年度報告書 第3表	
588	588	羹	不明		F9	1	未報告	
589	589	羹	器台底部		C11	1	2018・2019年度報告書 第3表	

No.	取上 No.	習種	部位	時期	グリップ	観片数	備考	各年度報告書 掲載番号
597	597	葉	胴部		F9	1		2018・2019年度報告書 第21 図15
60214	602	葉	胴部		F9	1		2018・2019年度報告書 第21 図13
	613		胴部		F10	1		
608	608	葉	肩部		F9	1		2018・2019年度報告書 第21 図9
615	615	葉	胴部		F9	1		2018・2019年度報告書 第21 図17
619	619	葉	胴部		F9	1		2018・2019年度報告書 第21 表
622	622	葉	肩部		F10	1		2018・2019年度報告書 第20 図4
624	624	葉	胴部		F10	1		2018・2019年度報告書 第21 図12
628	628	葉	胴部		F11	1		2018・2019年度報告書 第21 図19
641	641	葉	胴部		F11	1		2018・2019年度報告書 第21 表
645	645	葉	胴部		F10	1		2018・2019年度報告書 第21 図18
646	646	葉	胴部		F11	1		2018・2019年度報告書 第21 図14
648	648	葉	胴部		F10	1		2018・2019年度報告書 第21 図6
649	649	葉	胴部		F9	1		2018・2019年度報告書 第21 図10
661	661	葉	肩部		A2	1		2018・2019年度報告書 第26 図1
45	45	葉小	不明		(B10a)	1	同一個体の可能性	未報告
165	165	葉小	不明		B6	1		未報告
513小	5	葉	胴部		(B1A9)	1		2013年度報告書 第11図2 2011年度報告書 第13図7 2014年度報告書 第190014 2018・2019年度報告書 第20 図1
	77		胴部		(B1B)	1		
	104		胴部		(B1B)	1		
	357		胴部		C5	1		
	375		胴部		B6	1		
	579		胴部		C11	1		
4914小	491	葉	胴部		D9	1		2016・2017年度報告書 第24 図3
	514		胴部		D10	1		
	515		胴部		E10	1		
14414小	144	長葉番	胴部	8世紀前半	B3	1		2013年度報告書 第17図14 2014年度報告書 第190015
	158		口縁部		B2	1		
	162		胴部		B4	1		
	206		口縁部		C1	1		
	225		肩部		B6	1		
	231		肩部		D6	1		
	238		口縁部		B5	1		
	241		胴部		B3	1		
	242		胴部-肩部		B4	8		
	258		胴部		B5	1		
	270		胴部		B5	1		
	279		口縁部		B4	1		
	295		胴部		B4	1		
	333		口縁部		B2	1		
	347		肩部		B5	2		
	371		底部		B4	1		
	387		胴部		B2	1		
404	口縁部	B1	1					
30014小	300	長葉番	底部-胴部	8世紀前半	B6	1	土器集中区出土	2013年度報告書 第17図15
	301		口縁部-胴部		B6	1		
3914小	39	不明	口縁部		B10	1	2011年度報告書では図として いる。 平皿の可能性もあり 粘土は子器にも類似	2011年度報告書 第13図2
	40		口縁部		B10	1		

No	取上 No	品種	部位	時期	グリップ	成片数	備考	各年度報告書 掲載番号
6014カ	60	不明	脚底		0920	1	通かしあり	2011年度報告書 第120巻 2014年度報告書 第190巻 2018 - 2019年度報告書 第20 巻3
	63		脚底		0920	1		
	74		脚底		0920	1		
	80		脚底		0920	1		
	83		脚底		0920	1		
	85		脚底		0920	1		
	141		脚底		B10	1		
	143		脚底		B10	1		
	368		脚底		C7	1		
	591		脚底		F11	1		
67	67	不明	口縁部		0920	1		未報告
72	72	不明	不明		0920	1		未報告
148	148	不明	不明		B9	4		未報告
149	149	不明	不明		C9	2	高杯G416カの内上と類似	未報告
154	154	不明	不明		B9	2		未報告
173	173	不明	不明		B9	1		未報告
174	174	不明	不明		C7	1		未報告
90	90	不明	不明		0927	1		未報告
202	202	不明	不明		C7	1		未報告
517	517	不明	不明		D10	1		未報告
523	523	不明	不明		D10	1		未報告
526	526	不明	不明		D10	1		未報告
564	564	不明	不明		D10	1		未報告
583	583	不明	不明		C11	1		未報告
586	586	不明	不明		B11	1		未報告
595	595	不明	不明		C11	1	商標	未報告
621	621	不明	不明		F10	1		未報告
2391カ	239	不明	底部		C5	1		未報告
	358		底部		B5	1		未報告
	408		底部		B5	1		未報告
2831カ	283	不明	不明		B5	1		2014年度報告書 第190巻17
	334		不明		B5	1		
100	100	不明	不明		0927	1		未報告
103	103	不明	不明		0921	1		未報告
106	106	不明	不明		09210	1		未報告
108	108	不明	不明		太字一括	1		未報告
109	109	不明	不明		太字一括	1		未報告
112	112	不明	不明		太字一括	1		未報告
113	113	不明	不明		太字一括	1		未報告
114	114	不明	不明		太字一括	1		未報告
117	117	不明	不明		B6	1		未報告
120	120	不明	不明		C2	1		未報告
122	122	不明	不明		B2	1		未報告
125	125	不明	不明		B2	1	品種不明(2831カの内) 上・調整と類似	未報告
126	126	不明	不明		B2	1		未報告
129	129	不明	不明		C1	1		未報告
133	133	不明	不明		B1	1		未報告
151	151	不明	不明		C9	1		未報告
1611カ	161	不明	不明		B5	4		未報告
	167		不明		B5	1		
	164		不明		不明	不明		
168	168	不明	不明		B5	3		未報告
170	170	不明	不明		B6	1		未報告
171	171	不明	不明		B6	2		未報告
175	175	不明	不明		C8	1		未報告

No.	取上 No.	器種	部位	時期	グリッド	破片数	備考	各年度報告書 掲載番号
177	177	不明	不明		C5	1		未報告
183	183	不明	不明		B1	1		未報告
184	184	不明	不明		B5	1		未報告
185 <small>14小</small>	185	不明	不明		B4	1		未報告
	193	不明	不明		B5	1		
196	196	不明	186	不明	不明	不明		未報告
187	187	不明	不明		B5	1		未報告
188	188	不明	不明		B5	1		未報告
189	189	不明	不明		B5	4		未報告
190	190	不明	不明		C5	4		未報告
191	191	不明	不明		B5	5		未報告
192	192	不明	不明		不明	1		未報告
199	199	不明	不明		B5	1		未報告
200	200	不明	不明		B5	1		未報告
254	254	不明	不明		B1	1		未報告
255	255	不明	不明		B4	1		未報告
256	256	不明	不明		C4	1		未報告
274	274	不明	不明		B1	1	器種不明28311小の範 土・調整と類似	未報告
285	285	不明	不明		C4	1		未報告
326	326	不明	不明		B5	1		未報告
337	337	不明	不明		B5	1		未報告
328	328	不明	不明		B5	2		未報告
336 <small>14小</small>	329	不明	不明		B5	1		未報告
	342	不明	不明		B5	1		未報告
340	340	不明	不明		不明	1		未報告
341	341	不明	不明		B4	3		未報告
345	345	不明	不明		C5	1		未報告
356	356	不明	不明		B4	1		未報告
359	359	不明	不明		B4	1		未報告
360	360	不明	不明		B4	1		未報告
361	361	不明	不明		B5	1		未報告
367	367	不明	不明		C2	1		未報告
428	428	不明	不明		C3	1	未報告	
481	481	不明	不明		C2	1	2016・2017年度報告書 図版14	
620	620	不明	胴部		F10	1	2018・2019年度報告書 第33表	
500	500	不明	不明		B4	1	未報告	

陶磁器

No.	取上 No.	器種	部位	時期	グリッド	破片数	備考	各年度報告書 掲載番号
283 <small>1小</small>	28	標明皿	底部		(B7G)	1		2011年度報告書 第130頁12
	64		口縁部		(B7B)	5		
	110		口縁部		去底一括	1		
432	432	標明皿	口縁部～底部		表採	1	2015年度報告書 第249頁2	
433	433	不明	不明	近代小	表採	1	未報告	
513	513	不明	不明		D11	1	未報告	
611	611	不明	不明		F10	1	未報告	
650	650	不明	不明		不明	1	未報告	

武器

No.	取上 No.	器種	部位	時期	グリッド	破片数	備考	各年度報告書 掲載番号
272	272	両面金具	略定形		C2	1		2015年度報告書 第250頁3
396	396	両面金具	略定形		B2	1		2015年度報告書 第250頁4
434	434	両面金具	略定形		B3	1		2015年度報告書 第250頁2
476	476	両面金具	略定形		B5	1		2015年度報告書 第250頁1

No	取上 No	図種	部位	時期	グリッド	積分数	備考	各年度報告書 掲載番号			
230	230	鉄線	略定形	6世紀後半～7世紀初頭	C7	1	両方式1期	2013年度報告書 第180420			
240	240	鉄線	定形	6世紀後半～7世紀初頭	C5	1	両方式1期	2013年度報告書 第180419			
2731小	273	鉄線	鐵身部～頸部	6世紀後半～7世紀初頭	C5	1	両方式1期	2013年度報告書 第180421			
	296		頸部～基部						C5	1	
331	331	鉄線	鐵身部～基部	6世紀後半～7世紀初頭	C2	1	両方式1期	2014年度報告書 第200421			
423	423	鉄線	定形	6世紀後半～7世紀初頭	E3	2	両方式1期	2014年度報告書 第200420			
	373								頸部～基部	C4	1
	378								基部	C4	1
	380								頸部	C4	1
	479								鐵身部～頸部	C4	2
480	頸部	C4	2								
379	379	鉄線	略定形	6世紀後半～7世紀初頭	B4	1	両方式2期	2014年度報告書 第200418			
388	388	鉄線	略定形	6世紀後半～7世紀初頭	B4	4	両方式2期	2014年度報告書 第200419			
469	469	鉄線	略定形	6世紀後半～7世紀初頭	B4	9	両方式2期	2015年度報告書 第25045			
365	365	鉄線	鐵身部～基部	6世紀後半～7世紀初頭	E7	1	片方式1期	2014年度報告書 第200425			
429	429	鉄線	略定形	6世紀後半～7世紀初頭	C4	1	片方式1期	2014年度報告書 第200424			
4602小	460	鉄線	鐵身部	6世紀後半～7世紀初頭	E5	1	片方式1期	2015年度報告書 第25046			
	468		頸部						E5	2	
383	383	鉄線	定形	6世紀後半～7世紀初頭	B4	5	片方式2期	2014年度報告書 第200422			
403	403	鉄線	頸部～基部	6世紀後半～7世紀初頭	E5	4	片方式2期	2014年度報告書 第200426			
424	424	鉄線	定形	6世紀後半～7世紀初頭	C4	7	片方式2期	2014年度報告書 第200423			
470	470	鉄線	鐵身部～頸部	6世紀後半～7世紀初頭	B4	2	片方式2期	2015年度報告書 第25047			
307	307	鉄線	頸部		B1	1		2013年度報告書 第180423			
215	215	鉄線	頸部		C3	1		未報告			
275	275	鉄線	頸部～基部		C7	1		2013年度報告書 第180422			
328	328	鉄線	頸部		C3	1		未報告			
382	382	鉄線	頸部		B4	1		未報告			
390	390	鉄線	頸部～基部		B4	2		未報告			
391	391	鉄線	基部		C8	1		未報告			
455-1	455-1	鉄線	基部		E5	1		2015年度報告書 160412			
455-2	455-2	鉄線	基部		E5	1		2015年度報告書 160412			
461	461	鉄線	頸部～基部		E5	1		2015年度報告書 第250410			
462	462	鉄線	頸部～基部		E5	1		2015年度報告書 第25048			
475	475	鉄線	頸部		B4	1		2015年度報告書 第25049			
5011小	501	鉄線	鐵身部～頸部		B4	1	平根系鉄線十字筒三角形式	2016・2017年度報告書 第24168			
	504								B4		
5071小	507	鉄線	鐵身部～基部		C4	1	具距離両方式1期	2016・2017年度報告書 第24164			
	508								C4		
	509								C4		
	512								C5		
530	530	鉄線	頸部		C2	1	具距離	2016・2017年度報告書 第24166			
540	540	鉄線	鐵身部～頸部		E5	1	具距離片方式	2016・2017年度報告書 第24165			

No.	取上 No.	器種	部位	時期	グリップ	破片数	備考	各年度報告書 掲載番号
5413カ	541	鉄鍔	胴部		B4	1		2016・2017年度報告書 第2107
	546		胴部～基部		B4	5		
5613カ	561	鉄鍔	基部		B5	1		未報告
	563				B4	1		
332	332	直刀	切先		C2	1		2014年度報告書 第22029
426	426	直刀	刀身・木質(把・鞘)	6世紀末～7世紀前半	B3・B4・C3・C4	1		2014年度報告書 第211628
4013カ	401	直刀(木質)	木質		B3	破片		未報告
	402		木質		B3	破片		
425	425	直刀(刀装具)	刀装具		C4	2	黄金具小足金具の可能性	2014年度報告書 第22030・31
489	489	鐙	刀装具		D10	1		2016・2017年度報告書 第2109

馬具

No.	取上 No.	器種	部位	時期	グリップ	破片数	備考	各年度報告書 掲載番号
430	430	靴形環状鍔板付物	完形	製作：6世紀後半 3部：6世紀末～7世紀初頭	B5	1		2015年度報告書 第26301
477-1	477-1	大型環状鍔板付物 靴形鍔板付物	完形	6世紀末～7世紀前半	B5	1		2015年度報告書 第26302
414	414	鍔金具	略完形	6世紀末～7世紀初頭	B6	1		2014年度報告書 第22032
302	302	鍔具	完形		B6	1	土器集中区出土	2013年度報告書 第18026
463	463	鍔具	完形		B5	1		2015年度報告書 第27301
467	467	鍔具	完形		B5	1		2015年度報告書 第27302
140	140	鍔金具	完形	6世紀後半～7世紀初頭	B9	3	鍔形鍔金具	2012年度報告書 第13099
465	465	鍔金具	完形	6世紀後半～7世紀初頭	B5	2	鍔形鍔金具	2015年度報告書 第27303
477-2	477-2	鍔金具	完形	6世紀末～7世紀前半	B5	1	半円形鍔金具3部・大鍔(477-1)に装着して出土	2015年度報告書 第27304
477-3	477-3	鍔金具	略完形	6世紀末～7世紀前半	B5	2	半円形鍔金具3部・大鍔(477-1)に装着していた破片と接合	2015年度報告書 第27305
464	464	鍔金具	略完形		B5	1	半円形鍔金具3部・小	2015年度報告書 第27306
473	473	鍔金具	略完形		B5	1	半円形鍔金具2部・小	2015年度報告書 第27307
466	466	鍔金具	略完形		B5	1	半円形鍔金具2部	2015年度報告書 第27308
471	471	鍔金具	略完形		B5	1	半円形鍔金具2部	2015年度報告書 第27309
472	472	鍔金具	略完形		B5	1	半円形鍔金具2部	2015年度報告書 第27310
488	488	鍔類	略完形		C3	1	簡易乾水処理のみ502と一連のものか	2016・2017年度報告書 第18033
502	502	鍔形金具	不明		F9	不明	488と一連のものか	2018・2019年度報告書 第21021

工具

No.	取上 No.	器種	部位	時期	グリップ	破片数	備考	各年度報告書 掲載番号
127	127	刀子	刃部		C6	1		2012年度報告書 第130112
128	128	刀子	完形		B7	1		2012年度報告書 第130110
147	147	刀子	刃部		C3	1		未報告
169	169	刀子	刃部		B5	2		2012年度報告書 第130111
172	172	刀子	刃部		C4	1		未報告
178	178	刀子	刃部		C3	1		未報告
1964カ	196	刀子	刃部～基部		C6	1		2013年度報告書 第18025
	197		刃部		C6	1		
	198		刃部		C6	2		
237	237	刀子	基部		B6	1		2013年度報告書 第18024
519	519	刀子	刃部～基部		D10	1	両面で直線状の跡を持つ木質の一部残存	2016・2017年度報告書 第21010

装身具

No.	取上 %	品種	部位	時期	グラフィッド	破片数	備考	各年度報告書 掲載番号
412	412	耳環	完形		B5	1	銅板に銀薄板を巻き、薄板表面に金アマルガムによる鍍金	2014年度報告書 第220833
276	276	写実	完形		B2	1		2013年度報告書 第180827
221	221	管玉	完形		B6	1		2013年度報告書 第180828
302	302	切子玉	完形		図C109	1		2011年度報告書 第130811
156	156	切子玉	完形		C8	1		2012年度報告書 第13088
409	409	切子玉	完形		B5	1		2014年度報告書 第220834
440	440	切子玉	完形		B4	1		2015年度報告書 第280841
453	453	切子玉	完形		B4	1		2015年度報告書 第28082
365	365	白玉	完形		B6	1	漆石ないし松皮岩の可能性。経磨により彫刻	2014年度報告書 第220817
442	442	ガラス小玉	完形		B3	1		2015年度報告書 第28083
446	446	ガラス小玉	完形		B4	1		2015年度報告書 第28084
448	448	ガラス小玉	完形		B4	1	青緑色を呈する 基礎ガラスはソーダ石灰ガラスの可能性が高い 巻き付けによる製作と推定される	2015年度報告書 第28085
449	449	ガラス小玉	完形		B4	1		2015年度報告書 第28086
450	450	ガラス小玉	完形		B4	1		2015年度報告書 第28087
451	451	ガラス小玉	完形		B4	1		2015年度報告書 第28088
452	452	ガラス小玉	完形		B4	1		2015年度報告書 第28089
444	444	ガラス小玉	完形		B4	1	青緑色を呈する 基礎ガラスはソーダ石灰ガラスの可能性が高い 経磨による製作と推定される。	2015年度報告書 第280910
508	508	ガラス小玉	完形		B4	1		2016・2017年度報告書 第240814
352	352	ガラス小玉	完形		C6	1		2014年度報告書 第220836
430	430	ガラス小玉	完形		B4	1		2014年度報告書 第220835
445	445	ガラス小玉	完形		B4	1		2015年度報告書 第280911
447	447	ガラス小玉	完形		B4	1	青緑色を呈する 基礎ガラスはアルミナソーダ石灰ガラスの可能性が高い	2015年度報告書 第280912
528	528	ガラス小玉	完形		B3	1	引き伸ばし法による製作と推定される。	2016・2017年度報告書 第240811
501	501	ガラス小玉	完形		B3	1		2016・2017年度報告書 第240813
509	509	ガラス小玉	完形		B3	1		2016・2017年度報告書 第240812
562	562	ガラス小玉	完形		B4	1		2016・2017年度報告書 第240815
454	454	ガラス小玉	完形		B3	1	青緑色を呈する 基礎ガラスはアルミナソーダ石灰ガラスの可能性が高い 製作技法不明	2015年度報告書 第280913
441	441	ガラス小玉	完形		B4	1	青色不透明を呈する基礎ガラスの種類不明	2015年度報告書 第280914
443	443	ガラス小玉	略定形		B4	1	筒状に引き伸ばしたのち切断して製作されたと推定される	2015年度報告書 第280915
483	483	ガラス小玉	完形		C3	1	青緑色を呈する 基礎ガラスはソーダ石灰ガラスの可能性が高い 棒などに巻きつけて製作したと推定される	2016・2017年度報告書 第18084
484	484	ガラス小玉	完形		C5	1		2016・2017年度報告書 第18085
544	544	ガラス小玉	完形		B4	1	青緑色を呈する 基礎ガラスはソーダ石灰ガラスの可能性が高い	2016・2017年度報告書 第240816
565	565	ガラス小玉	欠損		B4	1	引き伸ばし法による製作と推定される	2016・2017年度報告書 第240817
585	585	ガラス小玉	完形		B4	1		2018・2019年度報告書 第210822
603	603	ガラス小玉	完形		C3	1		2018・2019年度報告書 第210823
604	604	ガラス小玉	完形		C4	1		2018・2019年度報告書 第210824

銭貨

No.	取上 No.	器種	部位	時期	グリッド	破片数	備考	各年度報告書 掲載番号
42	42	大銀通寶	定形	明治年～1817年	01D66	1		2011年度報告書 写真図版11-8
107-1	107-1	寛永通寶	定形	近世	玉壹一様	1		2011年度報告書 写真図版11-7
494	494	寛永通寶	定形	近世	D11	1		2016・2017年度報告書 100図1
96	96	銅錢	平銀		01C10	1		2011年度報告書 写真図版11-9
1	1	一銭銀貨	定形	明治6年～17年	01A23	1		2010年度報告書 写真図版22-4
2	2	五銭銀貨	定形	明治25年	01A96	1		2010年度報告書 写真図版22-3
25	25	十銭銀貨	定形	明治25年	01A33	1		2010年度報告書 写真図版22-1
107-2	107-2	一銭銀貨	定形	昭和15年	玉壹一様	1		2011年度報告書 写真図版11-10
13	13	十銭銀貨	定形	昭和16年	01A10	1		2010年度報告書 写真図版22-2
92	92	五銭銀貨	定形	昭和16年	01D10	1	臨時補助貨幣五銭アルミニウム銀貨(富士) 量目変更後小は不明	2011年度報告書 写真図版11-12
91	91	一銭銀貨	定形	昭和17年	01D66	1	臨時補助貨幣一銭アルミニウム銀貨(富士)	2011年度報告書 写真図版11-11
33	33	十銭銀貨	定形	昭和18年	01D10	1		2010年度報告書 写真図版22-5
32	32	一銭銀貨	略定形	昭和19年	01D10	1		2010年度報告書 写真図版22-6
14	14	一円銀貨	定形	昭和30年	01A10	1		2010年度報告書 写真図版22-7
12	12	一円銀貨	定形	昭和32年	01A10	1		2010年度報告書 写真図版22-8
24	24	一円銀貨	定形	昭和34年	01A23	1		2010年度報告書 写真図版22-9

赤色顔料

No.	取上 No.	器種	部位	時期	グリッド	破片数	備考	各年度報告書 掲載番号
478	478	ペンガラ	一		B3	一	数目的染色と推定。数パ ラケリアを起源とするパイ プ状ペンガラ	2015年度報告書 100図5

彫物骨

No.	取上 No.	器種	部位	時期	グリッド	破片数	備考	各年度報告書 掲載番号	
208-110カ	208-1	ウマの骨	左上顎第1切歯	10世紀後半～11世紀 前半	C3	1	372と同一歯列で出土	2013年度報告書 第5表 2013年度報告書 写真図版16-35	
	208-2		左上顎第2切歯		C3	1		2013年度報告書 第5表 2013年度報告書 写真図版16-35	
	208-3		左上顎第3切歯、 犬歯、切歯骨		C3	1		2013年度報告書 第5表 2013年度報告書 写真図版16-35	
	384		左上顎第2前臼歯		C3	1		2013年度報告書 第5表 2013年度報告書 写真図版16-31	
	278-1		左上顎第3前臼歯		C3	1		2013年度報告書 第5表2 013年度報告書 写真図版16-31	
	278-2		左上顎第4前臼歯		C3	1		2013年度報告書 第5表 2013年度報告書 写真図版16-31	
	372-1		左上顎第1臼歯		C3	1		2014年度報告書 第4表 2014年度報告書 写真図版13-42	
	372-2		左上顎第2臼歯		C3	1		372と同一歯列で出土	2014年度報告書 第4表 2014年度報告書 写真図版13-43
	376-1		左上顎第3臼歯		C3	1		372と同一歯列 放射性炭素年代測定を実施	2014年度報告書 第4表 2014年度報告書 写真図版13-44
	376-3		左上顎骨第1後臼 歯に伴う1)		C3	1		372と同一歯列で出土	未報告
	376-2		左上顎骨第2後臼 歯に伴う1)		C3	1		372と同一歯列で出土	未報告
	278-3		左上顎骨		C3	1			2013年度報告書 第5表
	381		右上顎第1切歯		C3	1			未報告
	207-1		右上顎第2切歯		C3	1			2013年度報告書 第5表 2013年度報告書 写真図版16-35
	207-2		右上顎第3切歯		C3	1			2013年度報告書 第5表 2013年度報告書 写真図版16-35
	207-3		右上顎切歯骨		C3	1			2013年度報告書 第5表 2013年度報告書 写真図版16-35
385	右上顎第2前臼歯	C3	1		2013年度報告書 第5表 2013年度報告書 写真図版16-32				

No	取上 No	図種	部位	時期	グリッド	破片数	備考	各年度報告書 掲載番号
268-11カ	278-4	ワマの骨	右上顎第3歯臼歯	10世紀後半～11世紀前半	C3	1		2013年度報告書 第5表 2013年度報告書 写真図版16-32
	376-7		右上顎第4歯臼歯	10世紀後半～11世紀前半	C3	1	372と同一歯列で出土	2014年度報告書 第4表 2014年度報告書 写真図版13-38
	376-6		右上顎第4歯臼歯・上顎骨	10世紀後半～11世紀前半	C3	2	372と同一歯列で出土	2014年度報告書 第4表 2014年度報告書 写真図版13-40
	376-5		右上顎第2歯臼歯	10世紀後半～11世紀前半	C3	1	372と同一歯列で出土	2014年度報告書 第4表 2014年度報告書 写真図版13-39
	376-4		右上顎第3歯臼歯	10世紀後半～11世紀前半	C3	1	372と同一歯列で出土	2014年度報告書 第4表 2014年度報告書 写真図版13-41
	278-5		右上顎骨		C3	1		2013年度報告書 第5表
	376-8		上顎骨片	10世紀後半～11世紀前半	C3	4	372と同一歯列で出土	未報告
	227		右下顎第2歯臼歯	9世紀末～11世紀前半	C1	1	放射性炭素年代測定を実施	2013年度報告書 第5表 2013年度報告書 写真図版16-34
	216		右下顎第2歯臼歯		B1	1		2013年度報告書 第5表 2013年度報告書 写真図版16-33
	267-4		267-4	ワマの骨か	不明		C3	2
268-4	268-4	ワマの骨か	不明		C3	7	ワマの骨の可能性があるが、268-1・2・3との埋合関係は不明	2013年度報告書 第5表
136	136	蹄鉄	蹄鉄か	不明	B1	6		2012年度報告書 写真図版14-13
246	246	蹄鉄	不明	不明	C3	1		2013年度報告書 第5表
259	259	蹄鉄	不明	不明	C4	2		2013年度報告書 第5表
260	260	蹄鉄	不明	不明	C4	1		2013年度報告書 第5表
261	261	蹄鉄	不明	不明	C4	5		2013年度報告書 第5表
262	262	蹄鉄	不明	不明	C4	2		2013年度報告書 第5表
263	263	蹄鉄	不明	不明	C4	4		2013年度報告書 第5表
264	264	蹄鉄	不明	不明	C4	5		2013年度報告書 第5表
265	265	蹄鉄	不明	不明	C4	3		2013年度報告書 第5表
266	266	蹄鉄	不明	不明	C4	1		2013年度報告書 第5表
286	286	蹄鉄	不明	不明	C4	2		2013年度報告書 第5表
288	288	蹄鉄	不明	不明	C4	3		2013年度報告書 第5表
348	348	蹄鉄	不明	不明	B1	2		未報告
134	134	不明	不明	不明	B1	1		未報告
176	176	不明	不明	不明	C3	1		未報告
351	351	不明	不明	不明	C1	5		未報告
353	353	不明	不明	不明	B4	1		未報告
362	362	不明	不明	不明	B1	1		未報告
363	363	不明	不明	不明	B1	1		未報告

その他

No	取上 No	図種	部位	時期	グリッド	破片数	備考	各年度報告書 掲載番号
19	19	角釘	略定形		(B)A8	1		2010年度報告書 第11図7
20	20	角釘	定形		(B)A9	1		2010年度報告書 第11図8
29	29	角釘	定形		(B)D1	1		2010年度報告書 第11図8
34	34	角釘	略定形		(B)D1	1		未報告
47	47	角釘	定形		(B)D8	3		未報告
48	48	角釘	略定形		(B)D8	4	4点のうち、湖底を欠く1点を2011年度報告書に提示	2011年度報告書 第13図181カ 3本は未報告
49	49	角釘	略定形		(B)D10	1		未報告
50	50	角釘	定形		(B)D9	1		2011年度報告書 第13図17
52	52	角釘	定形		(B)D8	5		未報告
75	75	角釘	略定形		(B)D9	2		未報告
76	76	角釘	定形		(B)D10	1		2011年度報告書 第13図14
88	88	角釘	定形		(B)D10	1		未報告
89	89	角釘	定形		(B)D7	1		2011年度報告書 第13図16
95	95	角釘	定形		(B)C1	1		2011年度報告書 第13図15

No.	取上 No.	登録	部位	時期	グループ	鏡片数	備考	各年度報告書 掲載番号
101	101	角釘	完形		01D08	1		2011年度報告書 第13回13
105	105	角釘	略定形		01A55	1		未報告
115	115	角釘	略定形		支那一基	1		未報告
124	124	角釘	手摺		C5	1		未報告
212	212	角釘	略定形		C2	1		未報告
612	612	角釘	略定形		D6	1		未報告
51	51	丸釘	完形		01D09	2		未報告
53	53	丸釘	略定形		01D09	4		未報告
111	111	丸釘	手摺		支那一基	2		未報告
498	498	釘	完形		E10	1		未報告
500	500	釘	完形		E10	1		未報告
554	554	釘	略定形		D11	1		未報告
557	557	釘	完形		E11	1		未報告
643	643	釘	欠損		不明	1		未報告
30	30	不明鉄製品	不明	近代小	01FC1	1		未報告
31	31	不明鉄製品	不明	近代小	01FC1	1		未報告
35	35	不明鉄製品	不明	近代小	01FC1	1		未報告
46	46	不明鉄製品	不明	近代小	01D08	1		未報告
182	182	不明鉄製品	不明		B4	1		未報告
194	194	不明鉄製品	不明		B6	1		未報告
210	210	不明鉄製品	不明		B6	2		未報告
219	219	不明鉄製品	不明		B2	1		未報告
249	249	不明鉄製品	不明		C6	1		未報告
269	269	不明鉄製品	不明		C2	1		未報告
294	294	不明鉄製品	不明		C7	4		未報告
407	407	不明鉄製品	不明		C3	8		未報告
457	457	不明鉄製品	不明		B1	1		2015年度報告書 30版12
487	487	不明鉄製品	不明		2T	1		未報告
493	493	不明鉄製品	不明	近代小	E11	2		未報告
510	510	不明鉄製品	不明	近代小	E11	1		未報告
516	516	不明鉄製品	不明		D10	1		未報告
572	572	不明鉄製品	不明		F11	1		未報告
503	503	鉄片	不明		C4	1		未報告
533	533	鉄片	不明		B5	2		未報告
534	534	鉄片	不明		B5	1		2016・2017年度報告書 30版11
81	81	鉄片	—		01D09	1		未報告
205	205	不明鋼製品	不明	近代小	C1	1		未報告
214	214	不明鋼製品	不明		B2	1		未報告
251	251	不明鋼製品	不明	近代小	C1	1		未報告
252	252	不明鋼製品	不明	近代小	C1	1		未報告
37	37	炭化物	—		01DG1	1		未報告
179	179	炭化物	—		C2	1		未報告
180	180	炭化物	—		B2	1		未報告
181	181	炭化物	—		B1	1		未報告
456	456	炭化物	—		B1	1		未報告
490	490	炭化物	—		D9	不明		未報告
496	496	炭化物	—		E10	不明		未報告
497	497	炭化物	—		E11	不明		未報告
518	518	炭化物	—		E10	不明		未報告
530	530	炭化物	—		D11	不明		未報告
529	529	炭化物	—		C2	不明		未報告
536	536	炭化物	—		C5	不明		未報告
547	547	炭化物	—		B2	不明		未報告
537	537	炭化物	—		E9	不明		未報告
538	538	炭化物	—		E11	不明		未報告
542	542	炭化物	—		E11	不明		未報告

No	取上 No	品種	部位	時期	グリップ	産片数	備考	各年度報告書 掲載番号
543	543	炭化物	—		E11	不明		未報告
548	548	炭化物	—		E11	不明		未報告
553	553	炭化物	—		E11	不明		未報告
555	555	炭化物	—		E11	不明		未報告
556	556	炭化物	—		E11	不明		未報告
566	566	炭化物	—		B7	不明		未報告
568	568	炭化物	—		F10	不明		未報告
601	601	炭化物	—		B1	不明		未報告
605	605	炭化物	—		D11	不明		未報告
606	606	炭化物	—		F11	不明		未報告
607	607	炭化物	—		C11	不明	煮煉	未報告
610	610	炭化物	—		D8	不明		未報告
617	617	炭化物	—		F10	不明		未報告
625	625	炭化物	—		F10	不明		未報告
630	630	炭化物	—		F10	不明		未報告
532	532	不明土器	不明		D10	1		
663	663	土製品	不明	不明	A12	1		2018～2019年度報告書 図版10
43	43	石器	細片か		前刃部	1	黒曜石	未報告
569	569	瓦	平瓦		F11	1		未報告
571	571	瓦	平瓦		F11	1		未報告
578	578	瓦	平瓦		F11	1		未報告
580	580	瓦	平瓦		F11	1		未報告
581	581	瓦	平瓦		F11	1		未報告
582	582	瓦	平瓦		F11	1		未報告
593	593	瓦	平瓦		F11	1		未報告
594	594	瓦	平瓦		F11	1		未報告
596	596	瓦	平瓦		F11	1		未報告
598	598	瓦	平瓦		E11	1		未報告
599	599	瓦	平瓦		F11	1		未報告
609	609	瓦	平瓦		F11	1		未報告
627	627	瓦	平瓦		F10	1		未報告
629	629	瓦	平瓦		F10	1		未報告
631	631	瓦	平瓦		表層	1		未報告
635	635	瓦	平瓦		F11	1		未報告
636	636	瓦	平瓦		F11	1		未報告
637	637	瓦	平瓦		F11	1		未報告
639	639	瓦	平瓦		F11	1		未報告
640	640	瓦	平瓦		F11	1		未報告
642	642	瓦	平瓦		F11	1		未報告
652	652	瓦	平瓦		表層	1		未報告
653	653	瓦	平瓦		表層	1		未報告
654	654	瓦	平瓦		表層	1		未報告
655	655	瓦	平瓦		表層	1		未報告
656	656	瓦	平瓦		表層	1		未報告
657	657	瓦	平瓦		表層	1		未報告
658	658	瓦	平瓦あるいは焼瓦	俵部	F11	1		未報告
659	659	瓦	平瓦あるいは焼瓦	俵部	F11	1		未報告
660	660	瓦	平瓦あるいは焼瓦	俵部	F11	1		未報告

E6号墳第1次調査出土遺物一覧

土師器

No.	取上 No.	器種	部位	時期	ドリッド	破片数	備考	各年度報告書 掲載番号
29	29	高杯	脚部		J17	3		2021年度報告書 第2904 1
28	28	不明	底部		J17	1		2021年度報告書 第2904 2
16	16	不明	不明		G17	1		未報告
9	9	不明	不明		表採	1	内面黒色	未報告

須恵器

No.	取上 No.	器種	部位	時期	ドリッド	破片数	備考	各年度報告書 掲載番号
40	40	杯身	略定形	TK43-TK309型 式並行	H17	10		2021年度報告書 第2904 4
37	37	杯身	口縁部		J17	2		2021年度報告書 第2904 3
134か	13	葉	胴部		G17	1	同一個体の可能性	2021年度報告書 第2904 5
	30	葉	胴部		J17	1		2021年度報告書 第2904 7
	35	葉	胴部		K17	1		2021年度報告書 第2904 5
	34	34	葉	胴部		J17		1
36	36	葉	口縁部		K17	1		2021年度報告書 第3004 8
19	19	葉	口縁部		H17	1		2021年度報告書 第3004 9
15	15	葉	胴部		G17	1		2021年度報告書 第3004 11
17	17	葉	胴部		G17	1		2021年度報告書 第3004 11
211か	21	葉	胴部		H17	1	同一個体の可能性	2021年度報告書 第3104 16
	22					1		2021年度報告書 第3104 16
	23					1		2021年度報告書 第3104 16
	24					1		2021年度報告書 第3104 16
	25					1		2021年度報告書 第3104 16
	26					2		2021年度報告書 第3104 16
18	18	葉	胴部		G17	1		2021年度報告書 第3004 11
20	20	葉	胴部		H17	1		2021年度報告書 第5表
14	14	葉	胴部		G17	1		2021年度報告書 第5表
27	27	葉	胴部		I17	1		2021年度報告書 第3004 12
31	31	葉	胴部		J17	1		2021年度報告書 第3104 15
32	32	葉	胴部		J17	1		2021年度報告書 第3004 11
33	33	葉	胴部		J17	1		2021年度報告書 第3004 10
28	28	葉	胴部		H17	1		2021年度報告書 第3004 14
39	39	葉	胴部		H17	1		2021年度報告書 第3004 13
1	1	葉	胴部		表採	1		2018・19年度報告書 第2704 1
2	2	葉	胴部		表採	1		未報告
4	4	葉	胴部		表採	1		未報告
5	5	葉	胴部		表採	1	調査調査表採	2021年度報告書 第5表
6	6	葉	胴部		表採	1		2021年度報告書 第5表
7	7	葉	胴部		表採	1		2021年度報告書 第5表
3	3	不明	胴部		表採	1		未報告
8	8	不明	胴部		表採	1	石室	2021年度報告書 第5表

その他

No.	取上 No.	器種	部位	時期	ドリッド	破片数	備考	各年度報告書 掲載番号
10	10	銅片	不明		表採	1	黒曜石	未報告
11	11	銅片	不明		表採	1	チャート	未報告
12	12	柳箆	箆首	近世	表採	1		未報告